斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書XIII

長廻横穴墓群・長廻遺跡（Vol.1）

2001年3月

通省出雲工事事務所
県教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書XIII

長廻横穴墓群・長廻遺跡（Vol.1）

2001年3月

国土交通省出雲工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行ってます。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成３年度から島根県教育委員会の御協力のもとに調査を行ってます。今回の調査箇所からは弥生時代の竪穴建物、古墳時代後期の横穴墓などが発見されました。

国土交通省出雲工事事務所といたしましては、今後も同教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の記録保存のため調査を円滑に進めてまいりたいと考えており、本報告書が、埋蔵文化財に対するより一層の関心と御理解を得るための資料としてお役立てていただければ幸いに思います。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
所長　五　道　仁　実

序

島根県教育委員会は、建設省中国地方建設局（現　国土交通省中国地方整備局）の委託を受け、平成３年度以来、斐伊川放水路建設予定地内で遺跡の発掘調査を行っています。本書は平成11年度に発掘調査を実施した長廻遺跡、平成12年度に発掘調査を実施した長廻横穴墓群について、その調査結果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲市周辺域は島根県内でも有数の遺跡集中地域であり、数多くの歴史的文化遺産の残っているところです。今回は、斐伊川放水路開削部のうち大津町内の調査を行いました。この調査により、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代後期の横穴墓を発見するなど大きな成果をあげることができました。いずれも、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史学習に活用されることを期待いたします。

なお、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては地元の皆様、国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所をはじめ、関係の皆様から多くの御協力を得ましたことに対して心からお礼申し上げます。

平成13年３月

島根県教育委員会
教育長　山　﨑　悠　雄

例　言

1．本書は建設省中国地方建設局（現　国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成11・12年度に実施した、斐伊川放水路建設予定地内長廻横穴墓群・長廻遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

○平成11年度［1999］長廻遺跡

事　務　局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
宍道正年（所長）、秋山　実（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、
今岡　宏（総務係長）

調　査　員　内田律雄（主幹）、平石　充（主事）、後藤達夫（教諭兼文化財保護主事）、
糸賀五月（臨時職員）

○平成12年度［2000］長廻横穴墓群

事　務　局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
宍道正年（所長）、内田　融（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、
今岡　宏（総務係長）

調　査　員　内田律雄（主幹）、伊藤　智（主事）、岡田充哲（教諭兼文化財保護主事）、
福田市子（臨時職員）

3．発掘作業（発掘作業雇用ほか）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所所長）、永原正寛、小村敏行、岡田篤志、高橋憲生、保科　昭、
藤原　恒、加本宏文（以上技術員）、飯塚春美、木村　恵（以上事務員）

発掘作業員

平成11年度（長廻遺跡）

吾郷正夫、安部誠一、安部孝代、有藤躬基子、江戸友義、小谷四郎、小林和子、小林邦子、
高橋準一、高橋邦明、田中二三、田部博、藤内嘉吉、中島和恵、中島三恵子、萬代とみ子、
東原敬子、深津光子、古川民子、松崎久子、三原信之、元井清二、山根信枝

平成12年度（長廻横穴墓群）

荒薦　実、飯塚美代子、石川美奈子、奥井惣市、奥井久子、加藤敏男、鐘築幸男、川谷重子、
坂根幸子、佐藤益子、塩野啓子、須山林吉、高橋加代子、高橋辰夫、玉木貫平、寺本武夫、
富室　和、中山三郎、成相律子、新田幸男、日野定雄、三島輝夫、三成銀一郎、吉田清夫、
吉田末子、吉田延子

4．遺物の実測・整理などは主に調査員が行い、三島幸子、門脇卓子、石橋直子、阿部春枝、池田智恵、伊藤明子、井原朋子、坂根喜世美、須山啓子、内藤洋子、中島直美、槙野喜久恵が遺物整理と一部実測にあたった。

5．調査に関連しては、以下の方々から有益な御指導、助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい（敬称略）。

岸　道三（出雲市教育委員会）・田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）・大久保徹也（徳島文理大学）・山根正明（島根県立松江南高等学校）・渡邊貞幸（島根大学）・大日方克己（島根大学）

6．遺物の写真撮影は調査員が行った。

7．本書の執筆は基本的に平石・伊藤が行い、それぞれ目次に明記した。また、第５章については国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に玉稿を賜った。

8．挿図中の方位は、測量法による第Ⅲ座標系の軸方位である。したがって、磁北より７°55″、真北より０°21′東の方向を指す。標高は海抜をあらわす。

9．本書に掲載した第２図は建設省国土地理院発行の地図、第３図・第18図は出雲市都市計画図を一部改変して使用した。

10. 本書で使用した遺構記号は以下の通りである。ＳＩ：竪穴建物、ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、ＳＸ：その他の遺構。

11. 土器実測図のうちアミかけのものは赤色塗彩を、荒い点をうったものは土製支脚・竈などの破損部分を表す。

12. 出土遺物及び、実測図、写真は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過（伊藤　智・平石　充） …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第２章　位置と環境（伊藤　智） …… 2
第３章　長廻横穴墓群の調査（伊藤　智） …… 6
第１節　遺跡の概要 …… 7
第２節　調査の結果 …… 8
（１）　横穴墓 …… 8
１号横穴墓 …… 8
２号横穴墓 …… 8
（２）　その他の遺構 …… 8
ＳＸ03 …… 8
ＳＸ04 …… 13
第３節　トレンチ調査 …… 14
第４節　まとめ …… 21
写真図版 …… 22
第４章　長廻遺跡の調査（平石　充） …… 36
第１節　遺跡の概要 …… 37
第２節　調査の結果 …… 39
（１）　Ⅰ区の調査 …… 39
（２）　Ⅱ区の調査 …… 41
写真図版 …… 72
第５章　自然科学的分析
出雲市長廻遺跡出土銅印の非破壊分析結果について
（国立歴史民俗博物館　情報資料研究部　永嶋正春） …… 98

挿図目次

第１図　調査対象位置図…… 1
第２図　周辺の遺跡…… 3
第３図　長廻横穴墓群調査区配置図…… 7
第４図　長廻横穴墓群調査前測量図…… 9
第５図　長廻横穴墓群１号横穴墓実測図…… 10
第６図　長廻横穴墓群２号横穴墓実測図…… 11
第７図　２号横穴墓出土遺物実測図…… 11
第８図　長廻横穴墓群ＳＸ03実測図…… 12
第９図　長廻横穴墓群ＳＸ04実測図…… 13
第10図　長廻横穴墓群２号横穴墓周辺平面図・正面図…… 14
第11図　長廻横穴墓群調査範囲及びトレンチ範囲図…… 15
第12図　長廻横穴墓群トレンチ１土層図…… 16
第13図　長廻横穴墓群トレンチ４土層図…… 17
第14図　長廻横穴墓群トレンチ６土層図…… 18
第15図　長廻横穴墓群トレンチ８土層図…… 19
第16図　トレンチ１出土遺物実測図…… 19
第17図　長廻横穴墓群トレンチ12土層図…… 20
第18図　長廻遺跡位置図…… 37
第19図　長廻遺跡調査区位置図…… 38
第20図　長廻遺跡Ⅰ区大岩実測図…… 39
第21図　長廻遺跡大岩周辺出土遺物実測図…… 40
第22図　長廻遺跡Ⅱ区遺構図…… 41
第23図　長廻遺跡Ⅱ区調査区土層図…… 42
第24図　長廻遺跡ＳＸ01遺構・出土遺物実測図…… 43
第25図　長廻遺跡ＳＩ01遺構図…… 45
第26図　長廻遺跡ＳＩ01遺物出土状況図…… 46
第27図　長廻遺跡ＳＩ01甑形土器出土状況図…… 46
第28図　長廻遺跡ＳＩ01出土遺物実測図１…… 47
第29図　長廻遺跡ＳＩ01出土遺物実測図２…… 48
第30図　長廻遺跡ＳＩ01出土遺物実測図３…… 49
第31図　長廻遺跡ＳＩ02遺構・出土遺物実測図…… 50
第32図　長廻遺跡ＳＩ03遺構・出土遺物実測図…… 51
第33図　長廻遺跡ＳＩ04遺構図…… 52
第34図　長廻遺跡ＳＩ05遺構図…… 53
第35図　長廻遺跡加工段01遺構図…… 55

第36図　長廻遺跡加工段01遺物出土状況図…… 56
第37図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図１…… 57
第38図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図２…… 58
第39図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図３…… 59
第40図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図４…… 60
第41図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図５…… 61
第42図　長廻遺跡加工段02遺構・出土遺物実測図…… 62
第43図　長廻遺跡加工段03・04遺構・出土遺物実測図…… 63
第44図　長廻遺跡加工段05遺構・出土遺物実測図…… 64
第45図　長廻遺跡ＳＫ01～05遺構・出土遺物実測図…… 65
第46図　長廻遺跡ＳＤ01遺構・出土遺物実測図…… 66
第47図　長廻遺跡ＳＤ02遺構・出土遺物実測図…… 67
第48図　長廻遺跡ＳＤ03遺構・出土遺物実測図…… 68
第49図　長廻遺跡Ⅱ区調査区出土遺物実測図１…… 69
第50図　長廻遺跡Ⅱ区調査区出土遺物実測図２…… 70

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

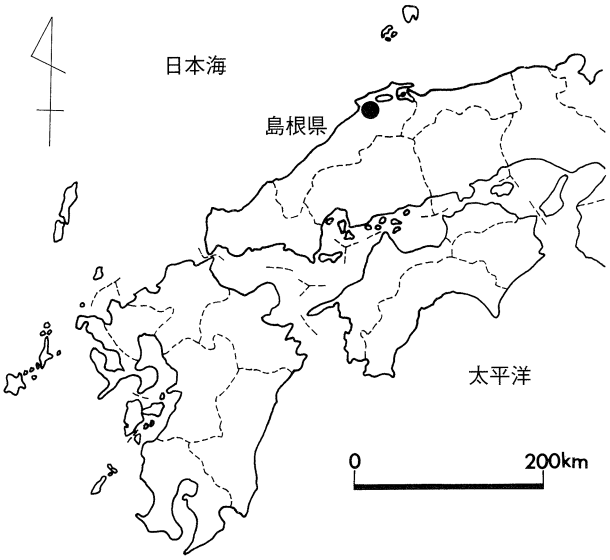
斐伊川放水路事業は斐伊川の計画高水流量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量を合わせて、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川の流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、建設省が同51年に確定したものである。ルートの最終決定は同54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年３月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめ提出した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塩冶を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年３月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課及び島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成３年１月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成３年４月より発掘調査事業がスタートすることとなった。

第２節　調査の経過

長廻横穴墓群・長廻遺跡は出雲市大津町に所在する周知の遺跡で、平成11年４月19日～同年９月14日、同12月１日～27日に隣接する瀧谷山城跡を含め129か所でトレンチ調査を実施し、本調査範囲を確定した。これと並行して、同年５月20日～７月13日にかけてⅠ区大岩の調査、同９月14日～12月15日にかけて同Ⅱ区の調査を実施した。平成12年度は、引き続き長廻遺跡を調査するとともに、平成12年４月17日より長廻横穴墓群の調査を開始した。長廻横穴墓群では前年度に確認した２穴の調査と周辺のトレンチ調査を並行して進めた。険しい丘陵斜面での調査は困難を極めた。最終的に6,310㎡の調査区内で14か所のトレンチ調査を行った。同年９月29日に長廻横穴墓群の調査を終了した。



第１図　調査対象位置図

第２章　位置と環境

長廻遺跡及び長廻横穴墓群は出雲市大津町に所在し、出雲平野の南側丘陵に位置する。遺跡のすぐ東には島根県東部を代表する河川である斐伊川が北に向かって流れており、遺跡の北500ｍにはＪＲ山陰本線が東西に通っている。

出雲平野は北側を島根半島、南側を中国山地に挟まれた部分に斐伊川及び神戸川の沖積作用によって縄文時代後期から平野化が進んでいった。斐伊川は氾濫の度に幾度も流路を変え、浅所に地下水槽をつくり、かつての流路沿いに自然堤防の微高地を残してきており、その微高地は縄文時代から集落を営む場として利用されてきた。またそれまで西の日本海に流れていた斐伊川は、寛永16年（1639年）の大洪水以降、東の宍道湖に注ぐようになり、近世以降上流部で盛んになってきた、たたら製鉄に伴う鉄穴流しの影響もあって、出雲平野東部の平野化を進めていった。

縄文時代

後期以前の出雲平野周辺の遺跡は、菱根遺跡、上ヶ谷遺跡、上長浜貝塚、三田谷Ⅲ遺跡などがあげられ、平野の端の部分つまり丘陵の裾部にほぼかぎらている。後期以降は後谷遺跡、御領田遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、三田谷Ⅲ遺跡など平野の端の部分だけでなく、矢野遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡など平野の中心部においても確認されている。

弥生時代

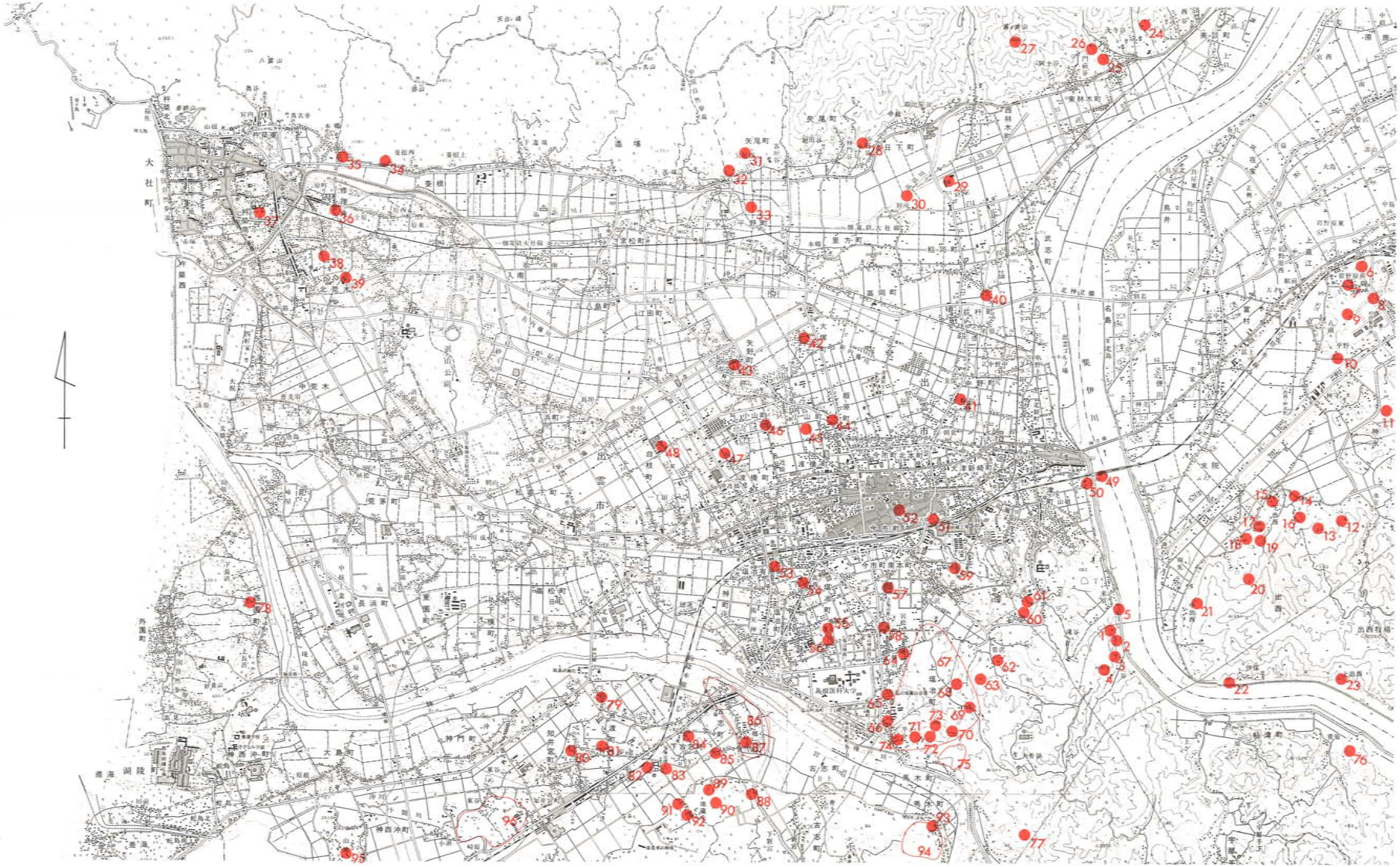
前期には後谷遺跡、矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡など縄文時代晩期から続く遺跡が多い。中期になると遺跡の数も増え、天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡など平野部に環壕を伴う遺跡が確認されるようになる。また出雲平野から南方にやや入った丘陵部には神庭荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡といった多数の青銅器が発見された遺跡が存在する。後期になると多くの集落が確認され、また南方の丘陵部には四隅突出形墳丘墓群の西谷墳墓群が存在している。

古墳時代

古墳時代になると天神遺跡、古志本郷遺跡などの神戸川水系の遺跡は衰退し、山持川川岸遺跡、斐伊川鉄橋遺跡、石土手遺跡など斐伊川水系の遺跡が確認される。出雲平野の最も古い古墳は前期末の大寺古墳で、北山山麓に位置する前方後円墳である。中期は平野南端の北光寺古墳、軍原古墳、神庭岩舟山古墳がある。後期になると平野南部の神戸川と斐伊川に挟まれた地域を中心に横穴式石室を持つ古墳が多く造られるようになる。中でも今市大念寺古墳は全長90ｍを超える島根県下最大級の前方後円墳である。その後もこの地に上塩冶築山古墳、地蔵山古墳と大規模な石室を持つ古墳が展開する。また横穴墓も多数造墓され、なかでも上塩冶横穴墓群では、180穴を超える横穴墓が確認されている。

奈良・平安時代

出雲平野に古代の行政区画をあてはめると、神門郡と出雲郡の一部になる。当時の官衙関連の遺跡としては、木簡・緑釉陶器・墨書土器などが出土した三田谷Ⅰ遺跡、緑釉陶器・墨書土器が出土した天神遺跡、礎石建物跡が検出された後谷Ⅴ遺跡などがる。なかでも古志本郷遺跡では企画的に配置された大規模な堀立柱建物跡が発見され、神門郡家の政庁の一部と考えられる。古代寺院としては神門寺境内廃寺、長者原廃寺がある。



第２図　周辺の遺跡

0　3km

鎌倉時代以降

12世紀の終わりに東国に武家政権が台頭し、西国にも影響が及んでくる。出雲平野の遺跡としては、半分城、大井谷城などの城館遺跡や、天神遺跡、矢野遺跡、蔵小路西遺跡、渡橋沖遺跡に代表される屋敷跡などがある。

表1　周辺の遺跡

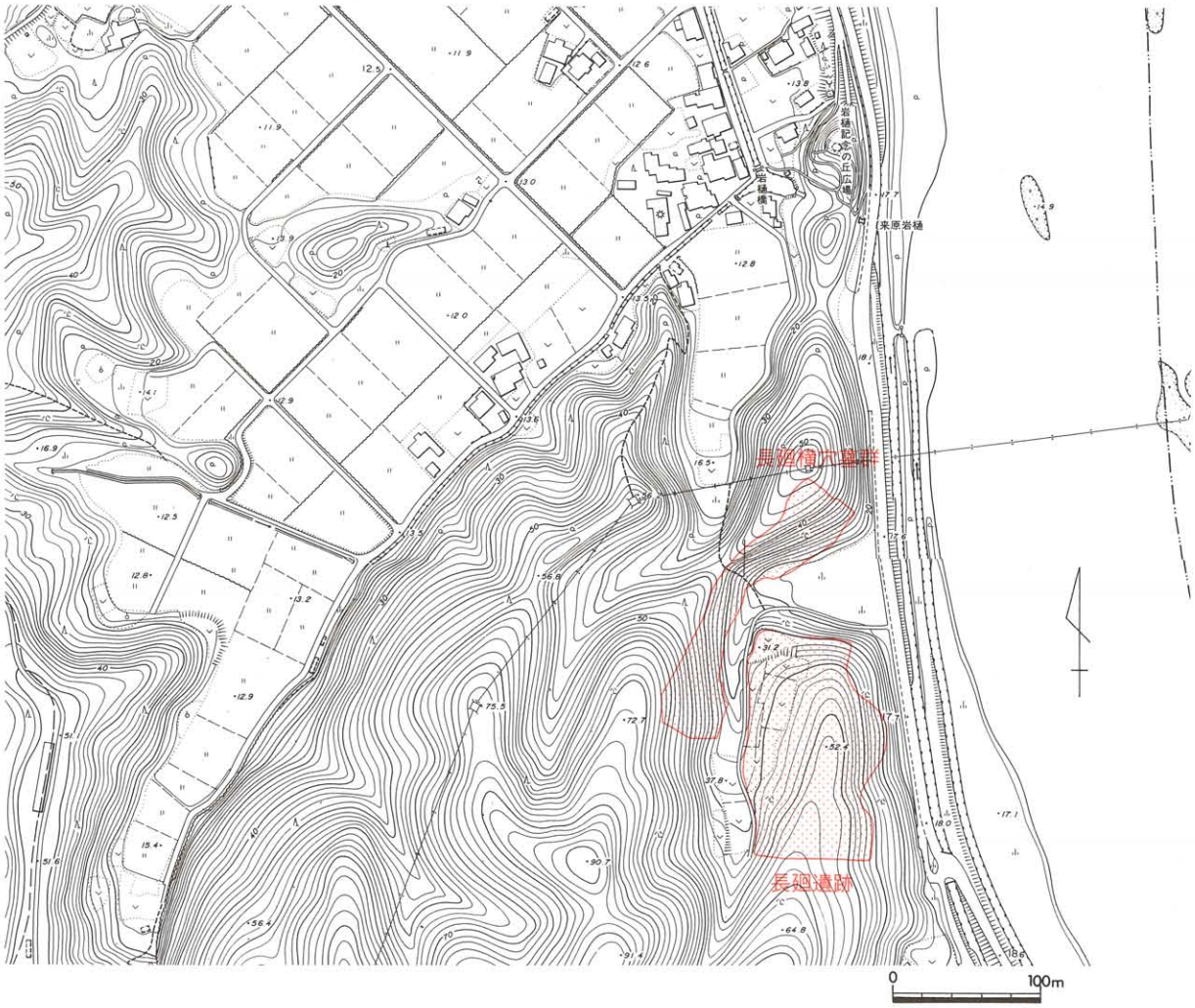
No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名	No.	遺　跡　名
1	長廻横穴墓群	33	里方八石原遺跡	65	地蔵山古墳
2	長廻遺跡	34	菱根遺跡	66	半分古墳
3	権現山古墳	35	修理免本郷遺跡	67	上塩冶横穴墓群
4	権現山横穴墓群	36	原山遺跡	68	大井谷城跡
5	来原岩樋跡	37	鹿蔵山遺跡	69	上塩冶横穴墓群第７支群
6	岩野原古墳群	38	南原貝塚	70	三田谷３号墳
7	岩野原横穴墓群	39	中分貝塚	71	三田谷Ⅰ遺跡
8	平野横穴墓群	40	荻杼古墓	72	三田谷Ⅱ遺跡
9	コモゴ山横穴墓群	41	太歳遺跡	73	三田谷Ⅲ遺跡
10	亀山横穴	42	大塚遺跡	74	上塩冶横穴墓群第33支群
11	上ヶ谷遺跡	43	矢野遺跡	75	光明寺古墳群
12	外ヶ市古墳	44	姫原西遺跡	76	菅原横穴墓群
13	長者原古墳群	45	蔵小路西遺跡	77	大坊古墓
14	後谷Ⅴ遺跡	46	小山遺跡	78	上長浜貝塚
15	沢田横穴墓群	47	渡橋沖遺跡	79	極楽寺付近遺跡
16	後谷丘陵古墳群	48	白枝荒神遺跡	80	知井宮多聞院遺跡
17	八幡宮横横穴墓群	49	斐伊川鉄橋遺跡	81	東原遺跡
18	出西小丸古墳	50	石土手遺跡	82	天神原古墳
19	栖雲寺山古墳	51	今市大念寺古墳	83	宝塚古墳
20	山ノ奥横穴墓群	52	塚山古墳	84	下古志遺跡
21	剣先横穴墓群	53	天神遺跡	85	田畑遺跡
22	海の平横穴墓群	54	高西遺跡	86	古志本郷遺跡
23	岩海横穴墓群	55	神門寺境内廃寺	87	大梶古墳
24	大寺古墳	56	神門寺付近遺跡	88	放れ山古墳
25	膳棚山古墳群	57	角田遺跡	89	妙蓮寺古墳
26	平林寺山古墳群	58	宮松遺跡	90	浄土山城跡
27	鳶ヶ巣城跡	59	下沢遺跡	91	地蔵堂北横穴墓群
28	矢尾横穴墓群	60	菅沢古墓	92	地蔵堂横穴墓群
29	山持川川岸遺跡	61	長者原廃寺	93	小坂古墳
30	里方別府遺跡	62	上沢Ⅱ遺跡	94	刈山古墳群
31	大前古墳	63	狐廻谷古墳	95	山地古墳
32	石臼古墳	64	上塩冶築山古墳	96	神門横穴墓群

第３章　長廻横穴墓群の調査

第１節　遺跡の概要

長廻横穴墓群は出雲市大津町に所在し、斐伊川左岸の標高20～50mの丘陵斜面に位置する。放水路開削部の入口部分に予定されている。遺跡全域にわたって急峻な斜面が多い。尾根沿いに250m北には来原岩樋、谷を挟んだ南西の丘陵には長廻遺跡、さらに南西には権現山古墳、権現山横穴墓群が存在する。

調査はすでに開口している２穴の横穴墓と、周辺のトレンチ調査を行った。開口していた２穴はお互いが60m離れていた。それぞれ周辺の表土を堀り、岩盤まで検出して確認したが他には横穴墓は確認できなかった。また遺跡内は急峻な斜面が多く、人力による掘削は危険が伴うのでトレンチ調査にとどめておいた。２穴の横穴墓は標高40m付近の凝灰岩に穿たれている。遺跡全域で、丘陵の尾根から標高36m前後の高さに横穴墓が穿たれている凝灰岩の岩盤が分布しており、それより下の部分は岩盤の質が変わり石を多く含む層を経て、きめが細かく、しまった層になり、傾斜も急で調査は一部にとどめておいた。凝灰岩部分も風化が激しく、横穴墓が造られてから今日に至るまでの間に横穴墓及びその周辺もかなり崩落していると思われる。さらに２号穴の左右の岩盤に人為的な加工部分を確認した。また尾根付近に堀切と考えられる遺構を検出したが、尾根部分は出雲市教育委員会が調査をする予定になっていたので検出したにとどめておいた。



第3図　長廻横穴墓群調査区配置図（Ｓ＝1／5000）

第２節　調査の結果

（１）横穴墓

１号横穴墓

立地　遺跡ほぼ中央部の標高38.9mを測り、主軸をＳ－22.5°－Ｅにとる。

形態（第５図）

墓道・玄門部　玄門の手前の部分から墓道にかけてかなり崩落している。玄門は現状で前幅0.75m、奥幅1.2m、奥行き0.85m、高さ0.9mを測る。側壁はほぼ垂直に立ち上っており、天井部との境界は右側壁部分は明瞭であるが、左側壁は曖昧である。

玄室　前幅1.9m、奥幅1.7m、奥行き1.7m、高さ1.2mを測る。台形を呈し、コーナーはやや丸みを持っている。床面は手前に向かって傾斜している。工具痕が残っており調整が終わっていない。側壁、奥壁、天井も調整が終了しておらず、工具痕がはっきりと残っている。しかし、軒線や棟線を入れようとした意図がうかがえ、曖昧ではあるが軒線及び棟線を確認することができる。天井は家形平入りを意図して加工されたと思われる。

土層堆積状況（第５図）　玄門部分から玄室中央まで、１～５㎝程流入土が認められた。

遺物出土状況　流入土直上に現代の陶磁器が認められた。

２号横穴墓

立地　１号穴の南西60m、標高39.1mを測り、主軸をＳ－84.0°－Ｅにとる。

形態（第６図）

墓道・玄門部　墓道から玄門にかけて崩落してほとんど失われている。

玄室　玄室から玄門にかけての床面と玄門部の右側壁に、横穴墓造墓時以降に加工が施されており、現状で玄室は前幅2.0m、奥幅2.3m、奥行き2.0m、高さ1.4mを測る。やや歪んだ正方形を呈し、コーナーはやや丸みを持っている。床面は玄門に向かって傾斜している。側壁、奥壁及び天井は風化や崩落がはげしいが、床から天井に向かって立ち上がる線は確認できた。工具痕ははっきりと確認できないが、前述した再加工されたと思われる部分には工具痕が残っている。また奥壁の中央やや左よりに同じ時期の彫り込みが施されている。再加工された部分には斜めに筋が通っており、ツルハシ状の工具で加工したと推測できる。

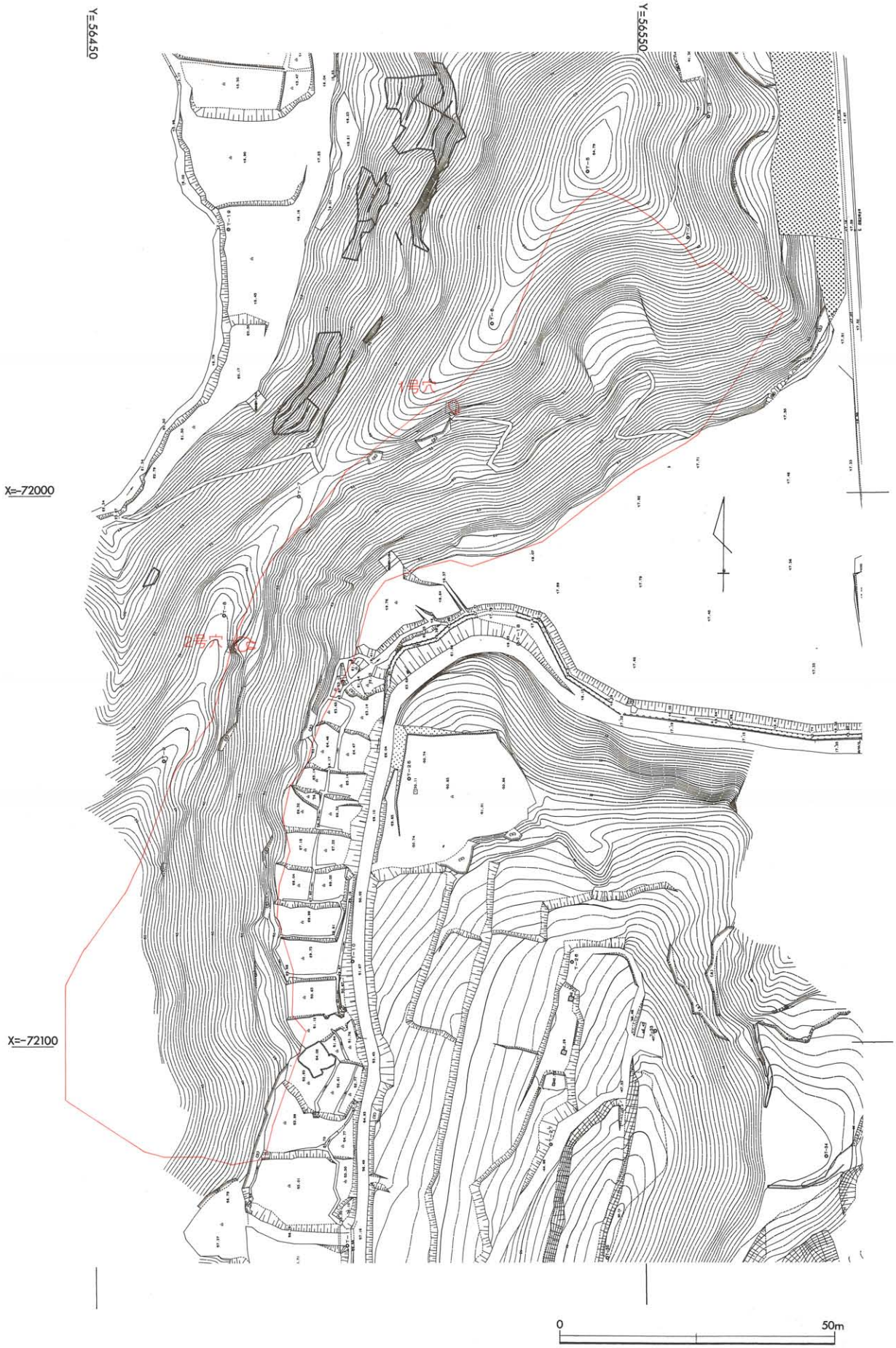
土層堆積状況（第６図）　第１層から第４層は横穴墓を再加工した後の堆積と考えられる。

遺物出土状況（第７図）　第３層から18世紀末から19世紀にかけての青磁の破片が２点出土した。おそらく本来は一個体だったと思われる。肥前系の香炉の一部と考えられる。

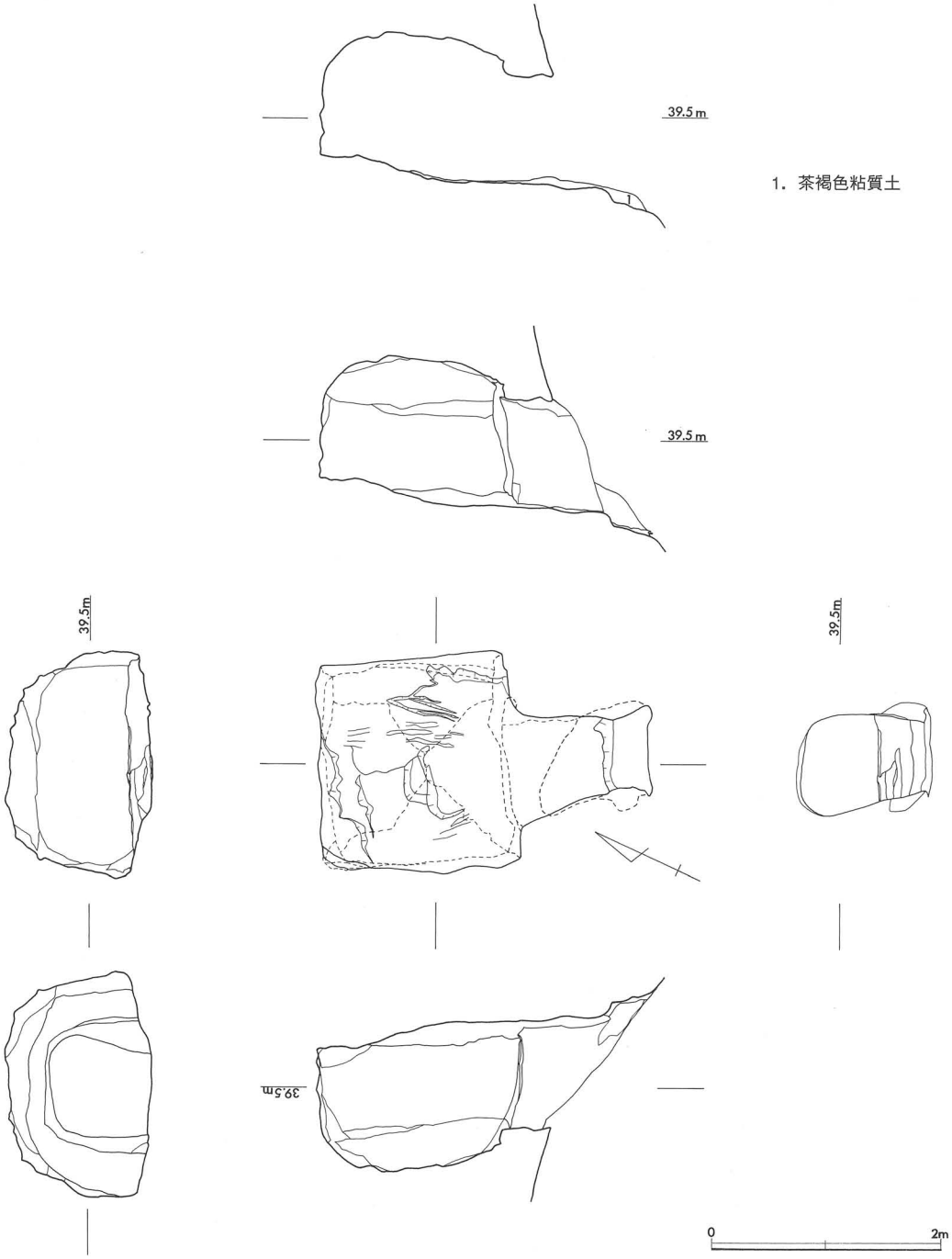
（２）その他の遺構

ＳＸ03

立地　２号穴の南３ｍ、標高38.8mを測り、勾配56度を越える凝灰岩の岩盤に位置する。現状では主軸をＳ－72.0°－Ｅにとっているが大部分が崩落し、本来の形をとどめていないと思われる。



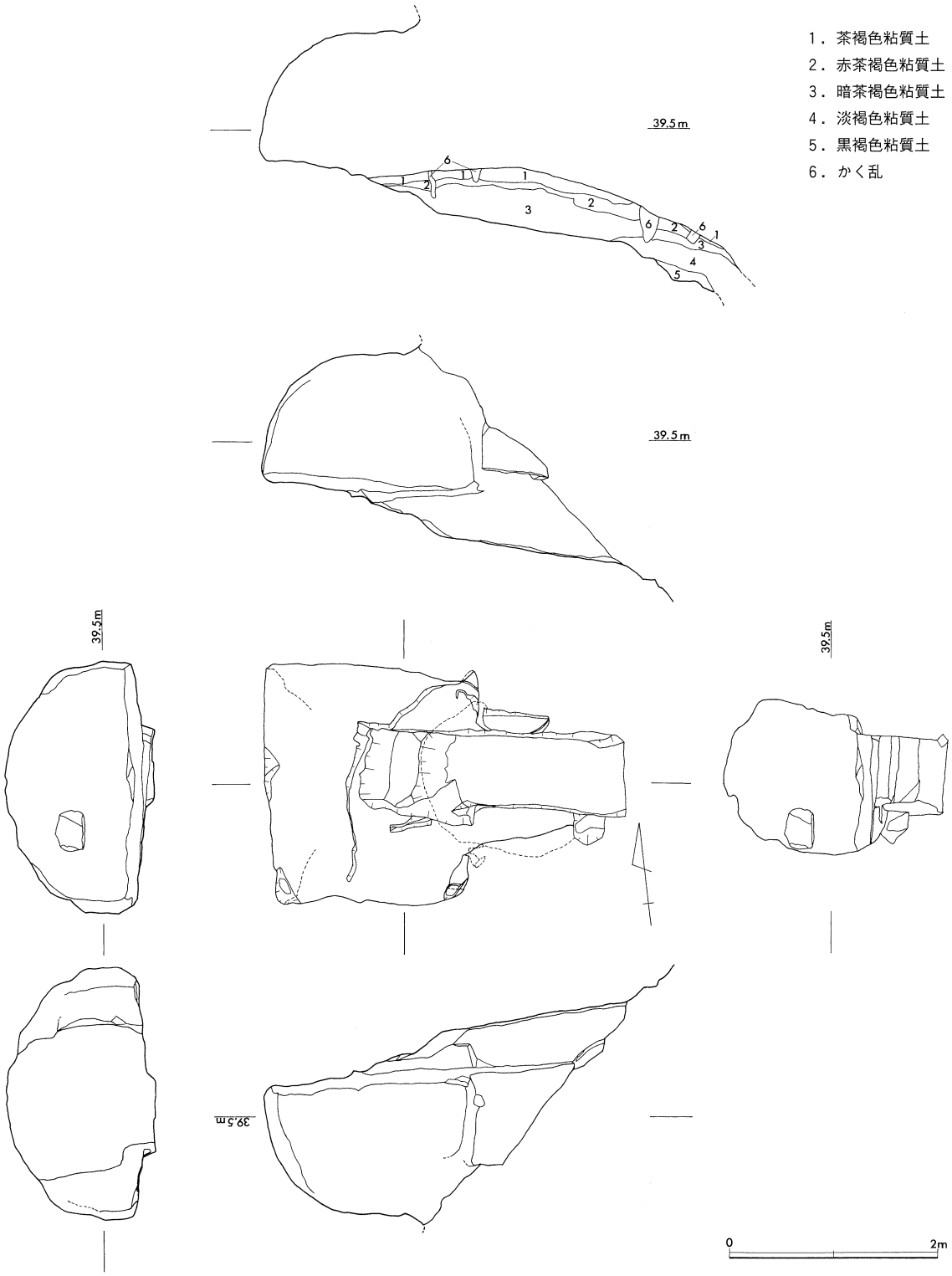
第4図　長廻横穴墓群調査前測量図（S＝1／1000）



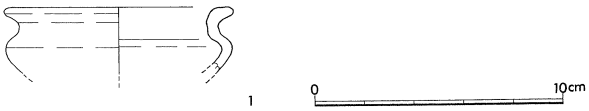
第5図　長廻横穴墓群1号横穴墓実測図（S＝1／60）

形態（第８図）　現状で奥行き0.36m、幅0.76m、高さ0.54mを測り、床面は楕円形である。本来はもう少し前方から加工されていたが、岩盤が非常にもろいため前方部分が崩落した可能性がある。遺構の目的等は不明である。

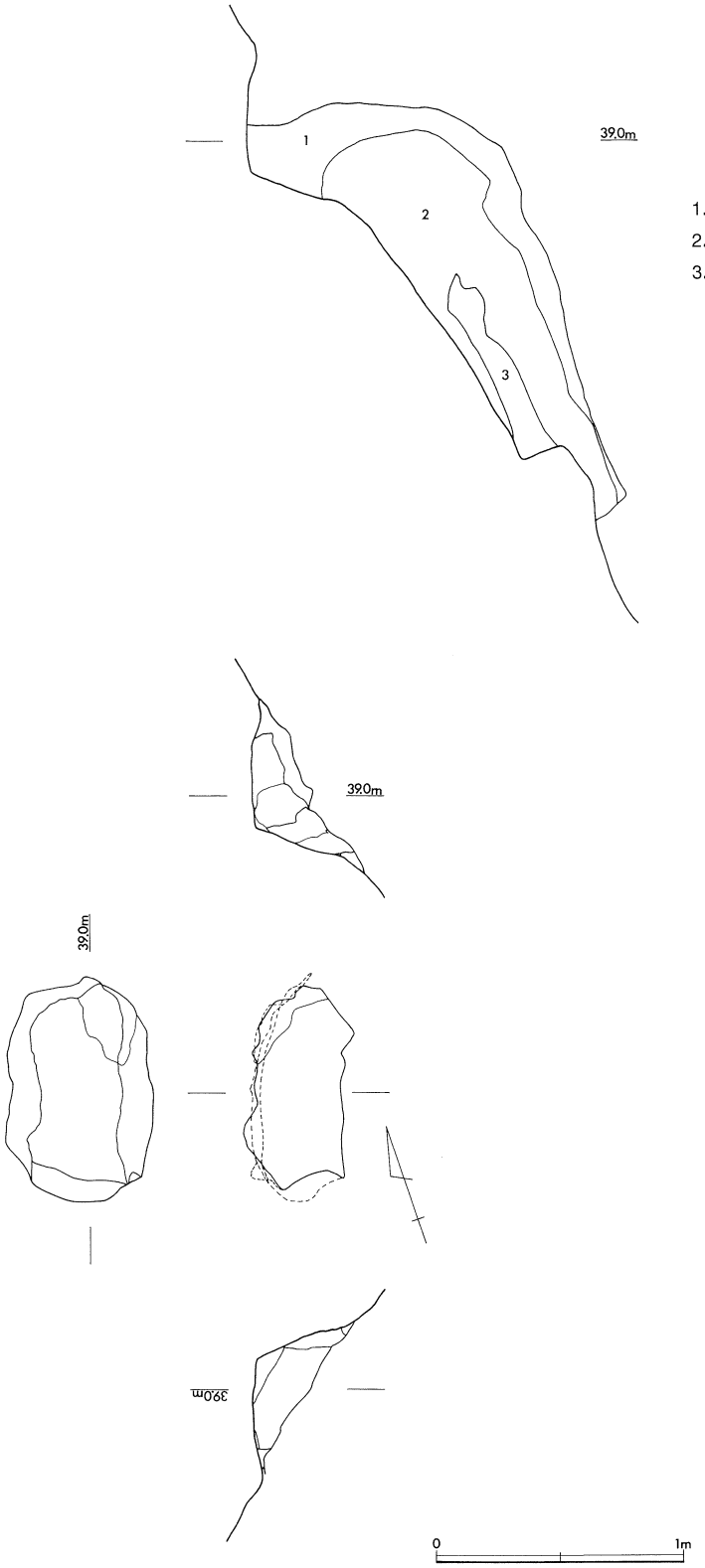
土層堆積状況（第８図）　第１層、第２層は崩落した後に堆積したと考えられる。第３層は本来凝灰岩の岩盤だったところに、木の根や土が入り込み岩盤から離れていったものと考えられる。また遺物は出土していない。



第6図　長廻横穴墓群2号横穴墓実測図（S＝1／60）

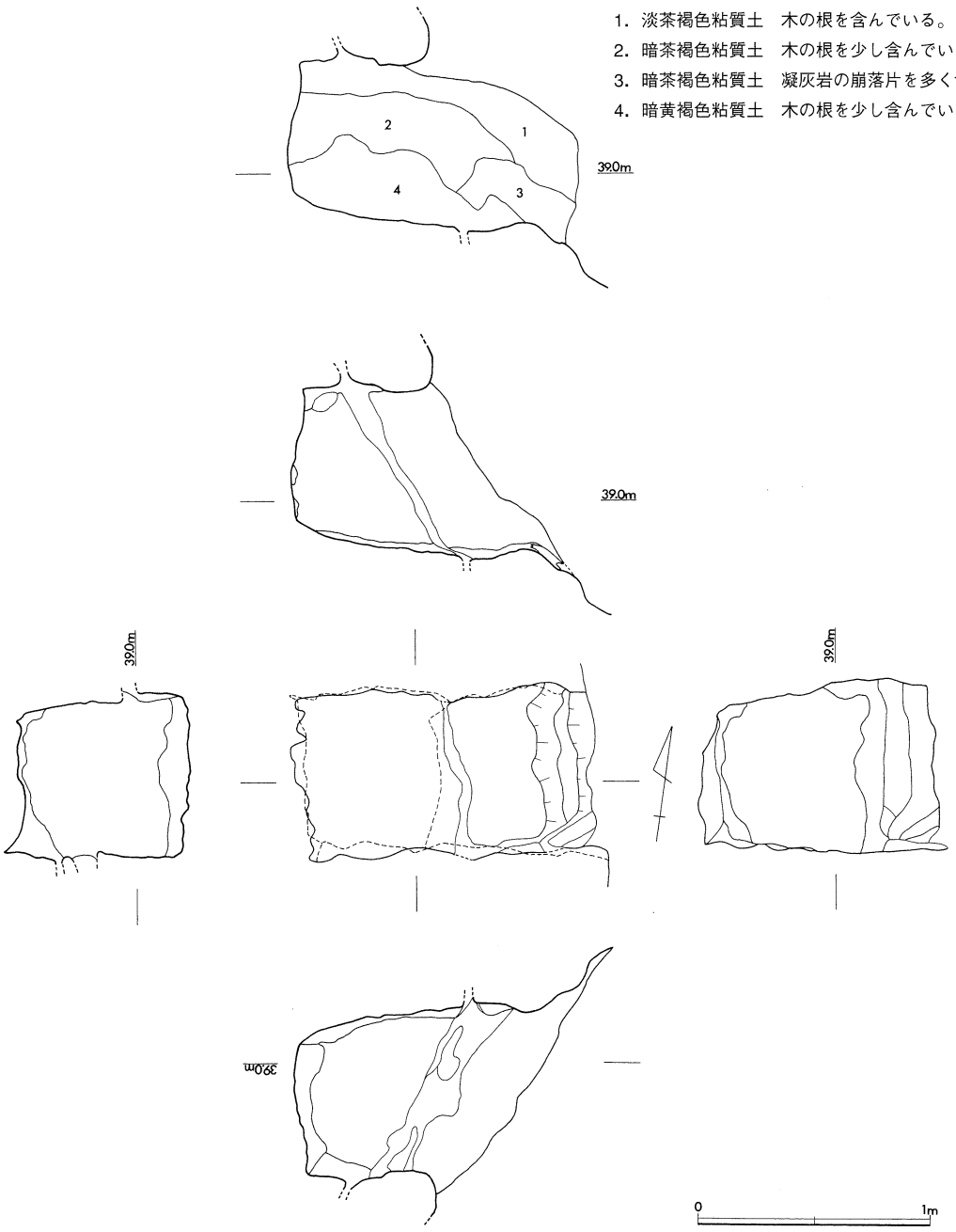


第7図　2号横穴墓出土遺物実測図（S＝1／3）



1. 茶褐色粘質土　　木の根を多く含んでいる。
2. 淡茶褐色粘質土　木の根を多く含んでいる。
3. 暗茶褐色粘質土　凝灰岩片を多く含んでいる。

第8図　長廻横穴墓群ＳＸ03実測図（Ｓ＝1／30）



第9図　長廻横穴墓群ＳＸ04実測図（Ｓ＝1／30）

ＳＸ04

立地　２号穴の北２ｍ、標高38.9mを測り、主軸をＳ－82.0°－Ｅにとる。

形態（第９図）　岩盤斜面に水平方向に掘られている。奥行き1.2m、床幅0.7m、天井幅0.6m、高さ0.7mを測る。床面は長方形、横断面は台形を呈し、箱状の空間をつくっている。床は手前に向かって緩やかに傾斜している。側壁及び奥壁には幅７㎝の平刃削痕、床には幅２㎝の溝状痕が残っている。また入口から0.4m奥へ入ったところで、上から手前に向かって斜めに切るように幅５～10㎝の裂け目が入っている。工具痕を観察すると裂け目の前後で筋が通っているので、この裂け目はＳＸ04を穿孔した後出来たと思われる。遺物等は出土しておらずこの遺構の目的等は分からない。

土層堆積状況（第９図）　第３層で凝灰岩の崩落が確認できる。

第10図　長廻横穴墓群2号横穴墓周辺平面図・正面図（S＝1／60）

第３節　トレンチ調査

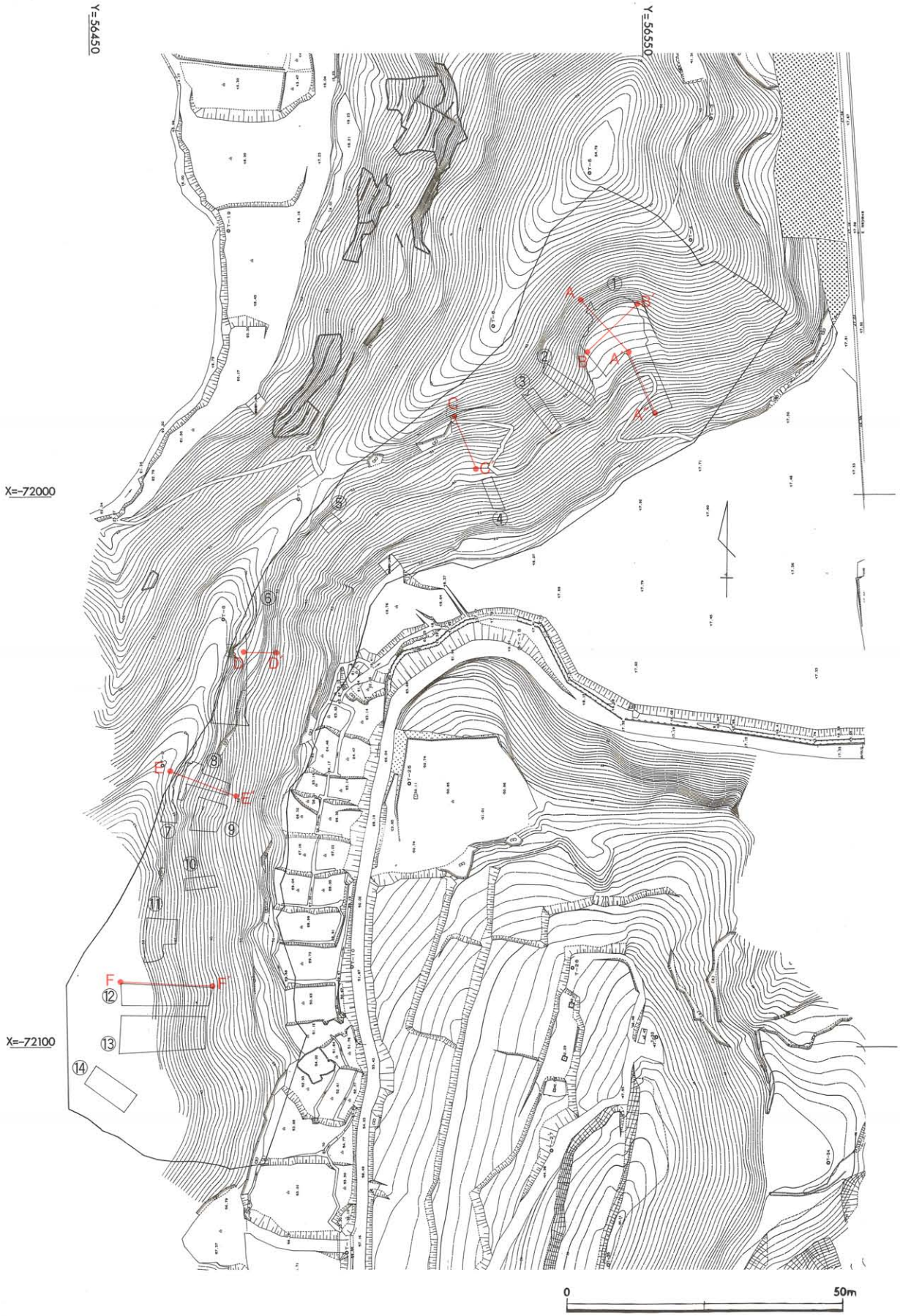
長廻横穴墓群では合計14か所のトレンチ調査を行った。（第11図）

トレンチ１（第12図、第16図）

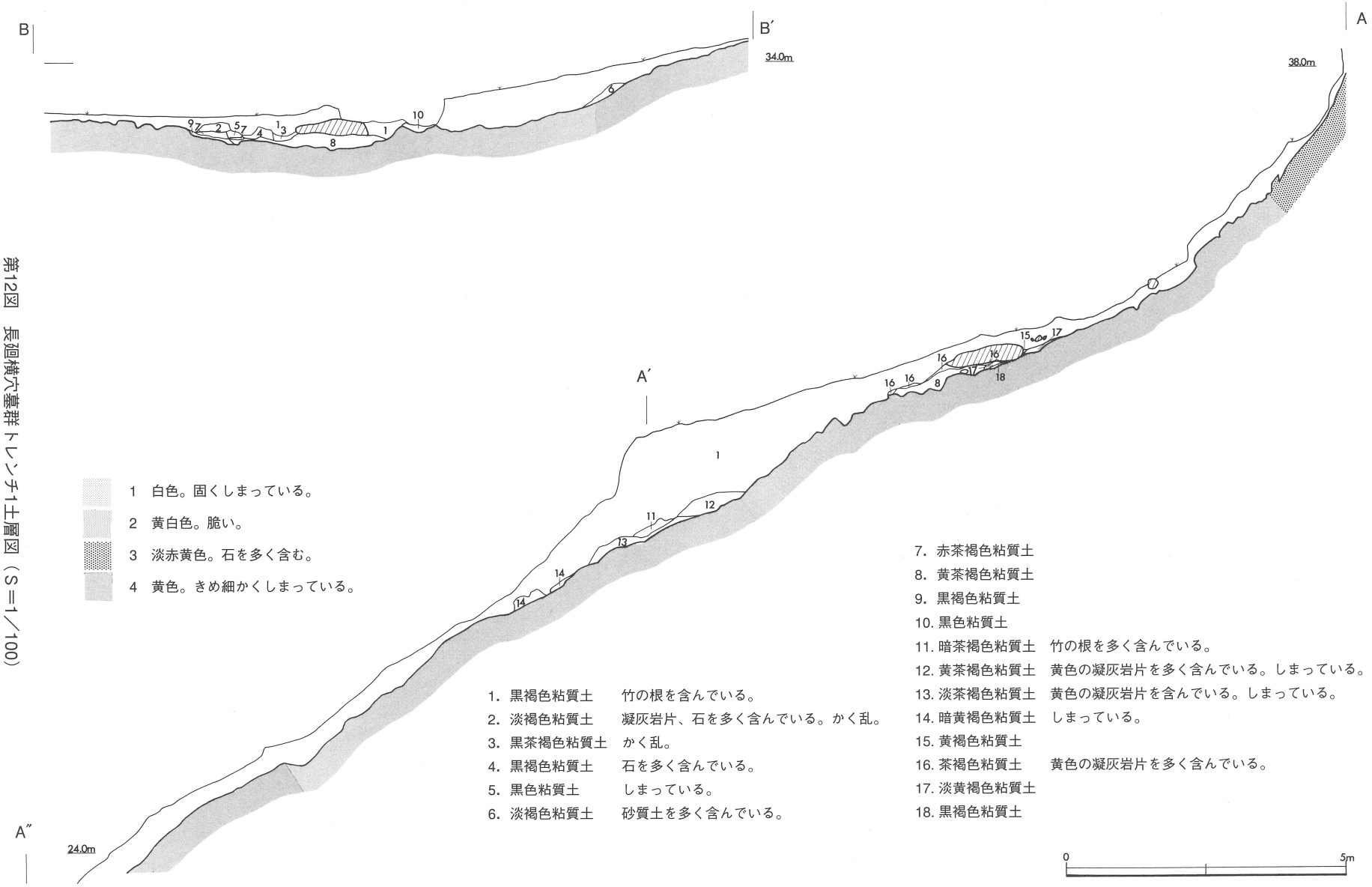
トレンチ１は遺跡の東端に位置し、幅14m、奥行き10mの平坦面で、三方を斜面に囲まれる地形に設定した。実質は南東側に緩やかに傾斜している。平坦面中央部から長さ1.3m、幅1.1m、厚さ0.3mの凝灰岩が出土したが、工具痕は確認できず、人為的に持ち込まれたかは分からない。平坦面では厚いところで約２mの粘質土が岩盤まで堆積していた。遺構についてはピットを１か所確認した。遺物は土師質の土器片が第１層から２点出土した。１点は坏または皿の底部で内外面ともに回転ナデ調整をしており、底はヘラ切りをしている。（第15図）もう１点も底部と思われるが摩耗がかなりはげしく、器種、調整等は不明である。

トレンチ４（第13図）

トレンチ４は１号横穴墓の中軸線の延長をトレンチの西端に設定し、そのラインで土層を観察した。岩盤まで0.2m～0.8mの粘質土が堆積していたが、遺物は確認できなかった。



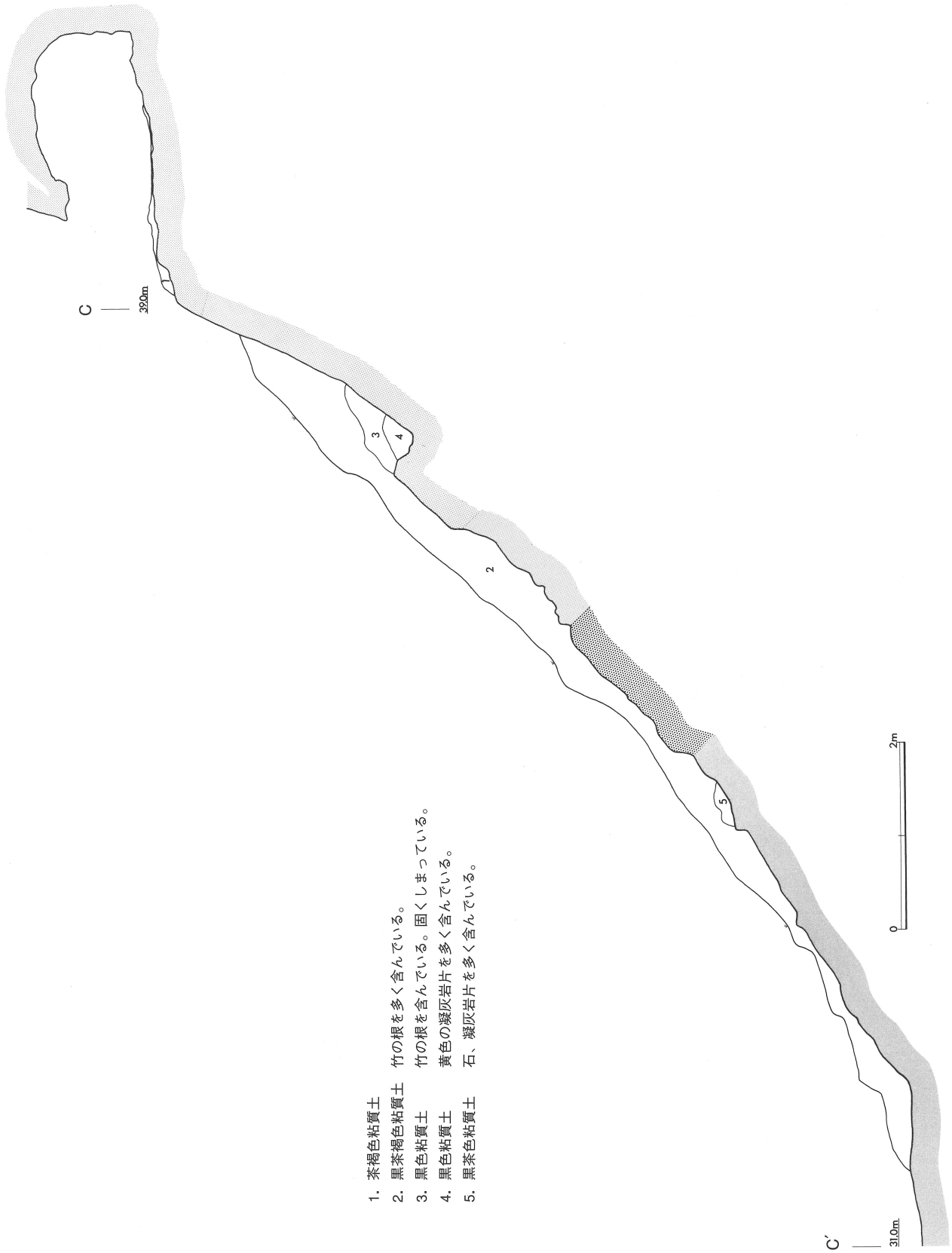
第11図　長廻横穴墓群調査範囲及びトレンチ範囲図（S＝1／1000）



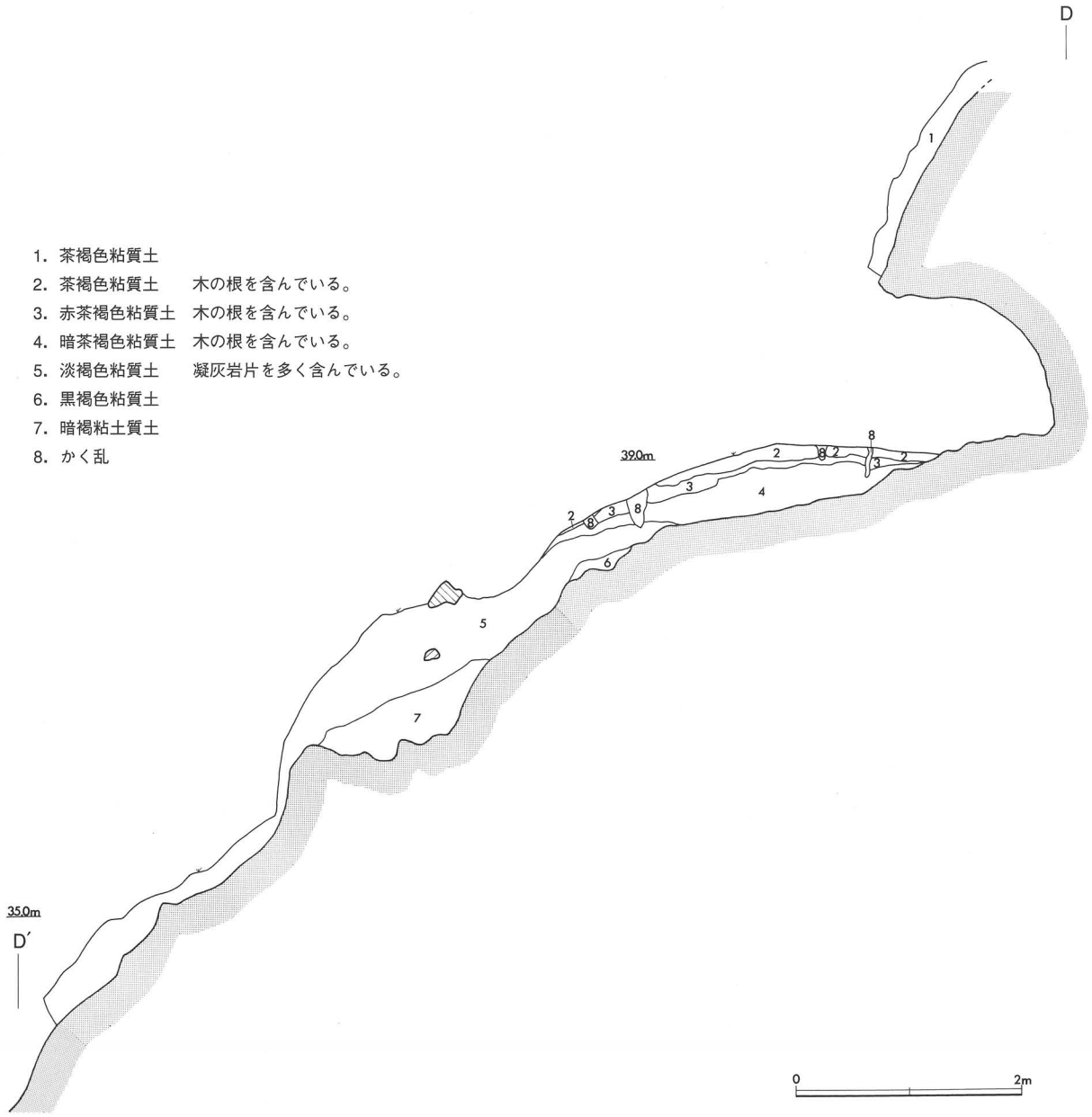
1　白色。固くしまっている。
2　黄白色。脆い。
3　淡赤黄色。石を多く含む。
4　黄色。きめ細かくしまっている。

1. 黒褐色粘質土　竹の根を含んでいる。
2. 淡褐色粘質土　凝灰岩片、石を多く含んでいる。かく乱。
3. 黒茶褐色粘質土　かく乱。
4. 黒褐色粘質土　石を多く含んでいる。
5. 黒色粘質土　しまっている。
6. 淡褐色粘質土　砂質土を多く含んでいる。
7. 赤茶褐色粘質土
8. 黄茶褐色粘質土
9. 黒褐色粘質土
10. 黒色粘質土
11. 暗茶褐色粘質土　竹の根を多く含んでいる。
12. 黄茶褐色粘質土　黄色の凝灰岩片を多く含んでいる。しまっている。
13. 淡茶褐色粘質土　黄色の凝灰岩片を含んでいる。しまっている。
14. 暗黄褐色粘質土　しまっている。
15. 黄褐色粘質土
16. 茶褐色粘質土　黄色の凝灰岩片を多く含んでいる。
17. 淡黄褐色粘質土
18. 黒褐色粘質土

第12図　長廻横穴墓群トレンチ1土層図（S＝1／100）



第13図　長廻横穴墓群トレンチ4土層図（S＝1／60）



第14図　長廻横穴墓群トレンチ6土層図（S＝1／60）

トレンチ６（第14図）

トレンチ６は２号横穴墓の中軸線の延長をトレンチの南端に設定し、そのラインで土層を観察した。横穴が穿たれている位置から標高が下がるにつれて、岩盤である凝灰岩は脆くなっている。第４層から上の層は横穴を再加工した後の堆積である。遺物は第５層直上から陶磁器片が１点出土した。２号横穴墓出土の青磁と同一個体と思われる。

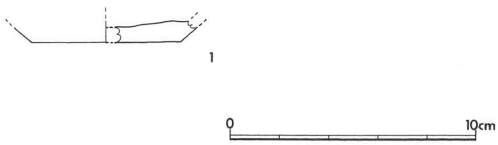
トレンチ８（第15図）

トレンチ８は、２号横穴墓から南へ約30mの尾根部分の岩盤を断面Ｖ字状に切っている位置に設定した。トレンチ上方で黒色粘質土を確認したが、遺物は出土しなかった。

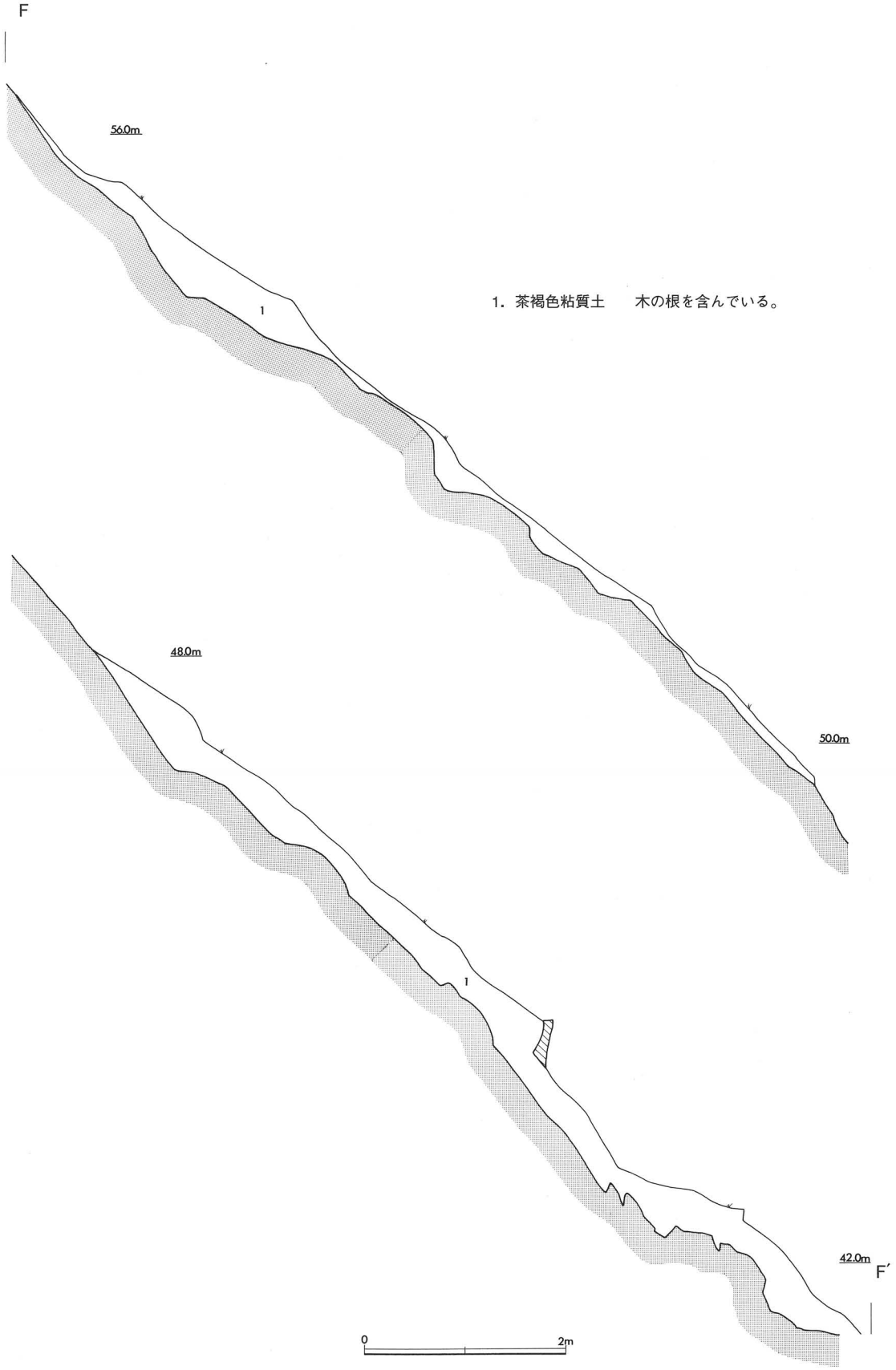
トレンチ12（第17図）

トレンチ12は遺跡の南端付近、勾配40度の斜面に設定した。厚いところでは0.5mの粘質土の堆積が認められたが、ほとんどは数cm程度の堆積であった。遺物は確認されなかった。

第15図　長廻横穴墓群トレンチ8土層図（S＝1／60）



第16図　トレンチ1出土遺物実測図（S＝1／3）



第17図　長廻横穴墓群トレンチ12土層図（S＝1／60）

第４節　まとめ

長廻横穴墓群は２穴の横穴墓から構成されている。長廻横穴墓群の西２㎞には島根県下最大規模の上塩冶横穴墓群が存在している。上塩冶横穴墓群の多くの横穴墓と同様に、長廻横穴墓群の２穴も凝灰岩に穿たれている。横穴墓の造墓過程を荒堀り→成形→調整の３段階に大きく分けると、１号横穴墓は成形の段階で終わっている。しかし玄室には軒線や棟線を表わそうとする線を確認することができ、おそらく家形平入りを意識していたと考えられる。また、２号横穴墓は造墓以降の風化、崩落がはげしく、玄室の天井は原形をとどめていない。床面から天井に立ち上がる線から推測すると、玄室の構造は家形妻入りと考えられる。しかし、出雲西部でよく見られる床面と奥壁が直角に合わさるアーチ形の構造と言うよりも、おもに出雲東部を中心に見られるドーム形に近い、奥壁が床面から緩やかに立ち上がる構造をとっている。両横穴墓とも横穴墓として使われていた時期の遺物は出土していない。凝灰岩に穿たれていること、玄室の天井の構造が家形であること、そして上塩冶横穴墓群の近くであることから判断すると造墓の時期は、須恵器の大谷編年では出雲５～６期頃にあたると推測できる。ＳＸ03については、第４章で述べたとおり目的等は分からないが、成形されたときの工具痕が確認できるので人為的なものと考えられる。現状では岩盤斜面をＬ字状に掘り込んだ状態であるが、加工後に風化など何らかの理由で前方部分の岩盤が崩落した可能性が考えられる。ＳＸ04についても目的等は分からない。工具痕を観察すると、２号横穴墓の再加工された部分の工具痕とは明らかに異なり、横穴墓で見受けられるものに近い様相を呈する。横穴墓などの遺構が造られている岩盤（凝灰岩）は、程度の差はあるものの非常に脆い。横穴墓２穴は60m離れて存在し、それぞれは群を構成していない。

参考文献

『出雲の横穴墓　ーその型式・変遷・地域性ー』 1997年　山陰横穴墓研究会
「横穴墓構造に伴う掘削技法」山陰横穴墓研究会　『島根考古学会誌　第12集』1995年
『地域に根ざして』 1999年　田中義昭先生退官記念事業会
『出雲・上塩冶を中心とする埋蔵文化財調査報告』 1980年　島根県教育委員会
『上塩冶横穴墓群他』 1998年　島根県教育委員会
『九州陶磁器の編年　九州近世陶磁学会』 2000年　九州近世陶磁学会

長廻横穴墓群　写真図版

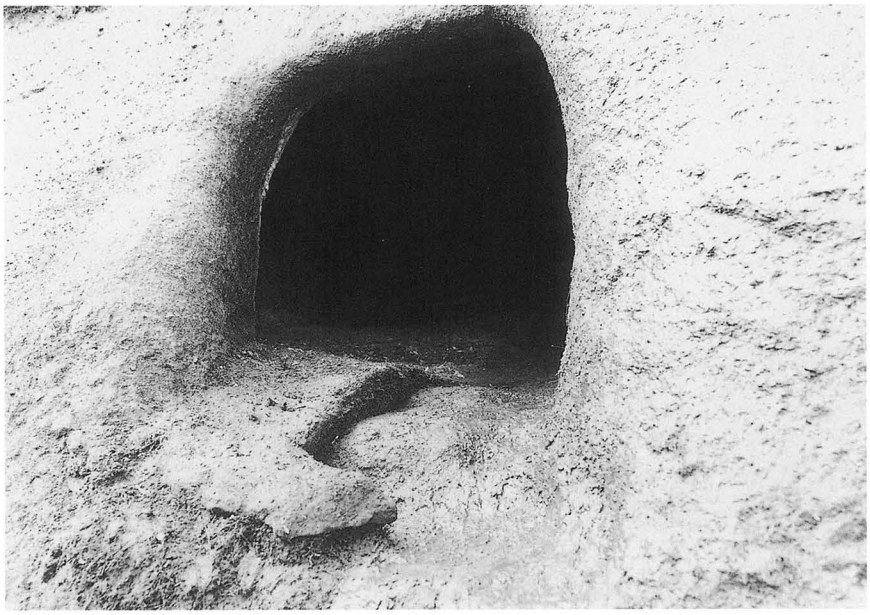
長廻横穴墓群
調査前風景

長廻横穴墓群
調査前風景

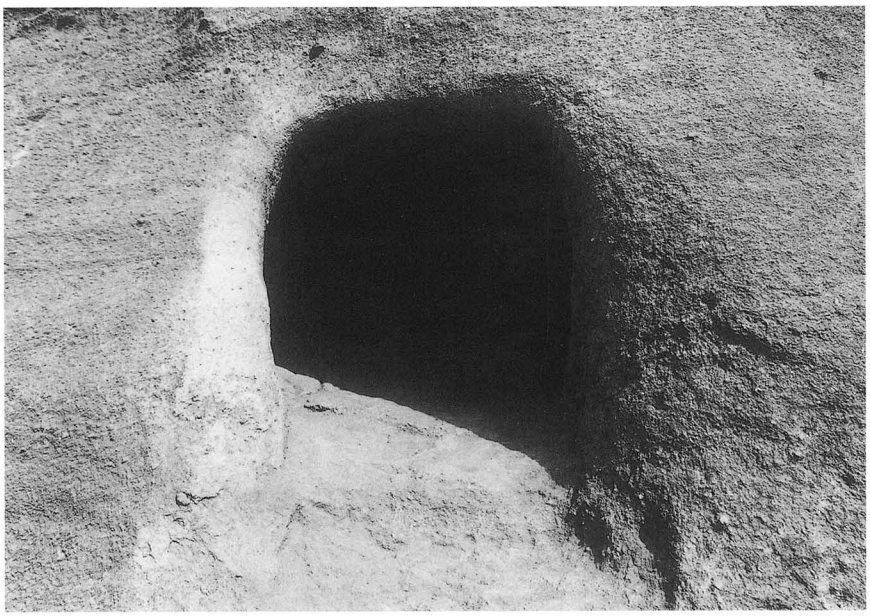
長廻横穴墓群
調査前風景

図版2

1号横穴墓周辺
調査前風景



1号横穴墓
玄室縦断土層



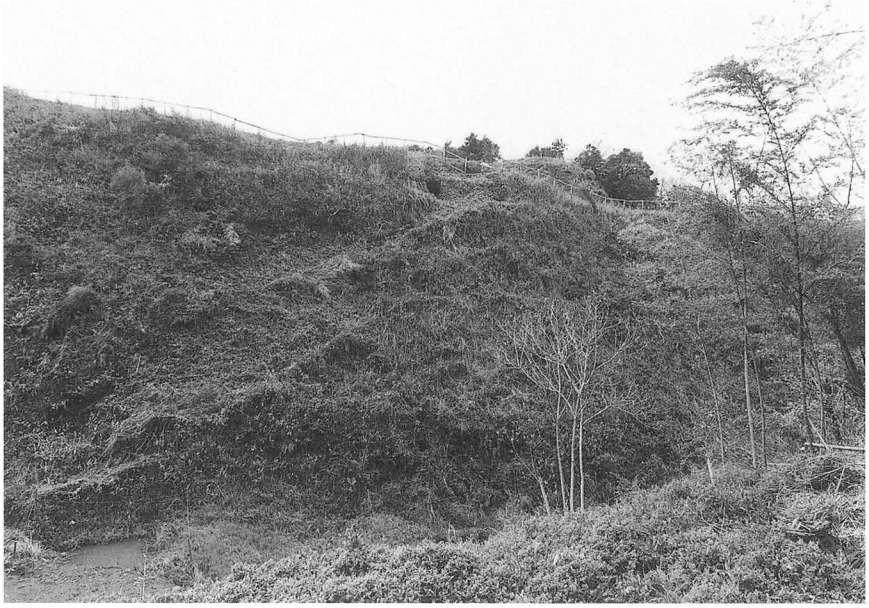
1号横穴墓
完掘状況

1号横穴墓
床面完掘状況

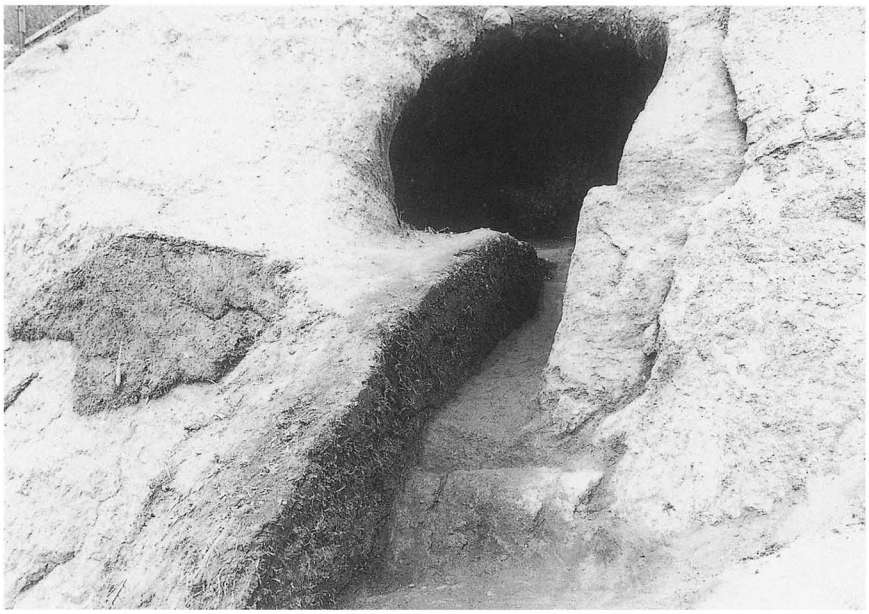
1号横穴墓
左側壁完掘状況

1号横穴墓
完掘状況

図版4

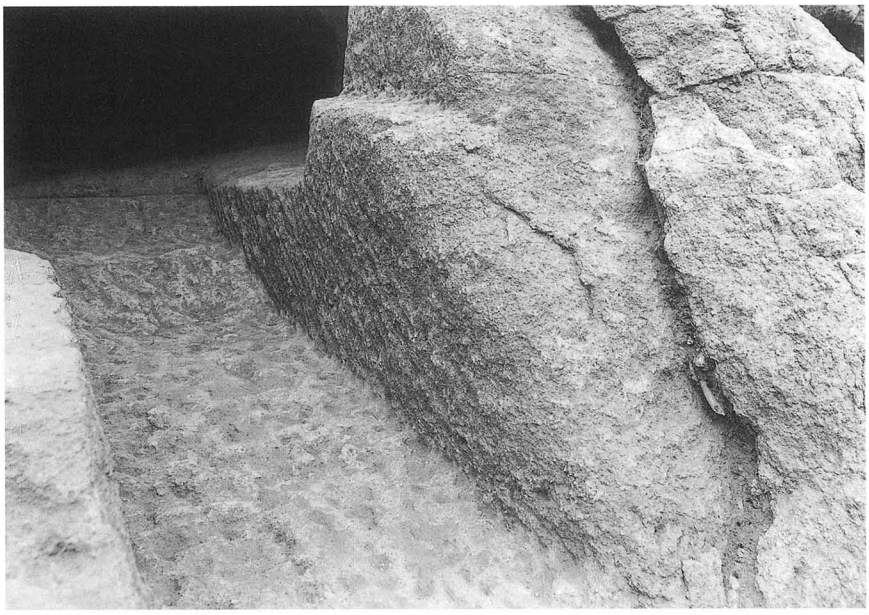


2号横穴墓周辺
調査前風景



2号横穴墓
縦断土層

2号横穴墓
完掘状況

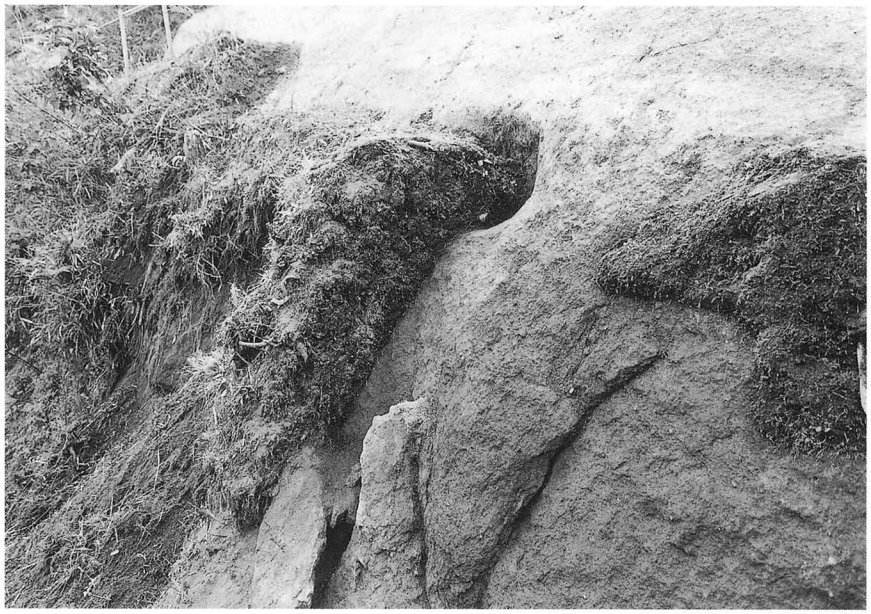


2号横穴墓
右側壁完掘状況

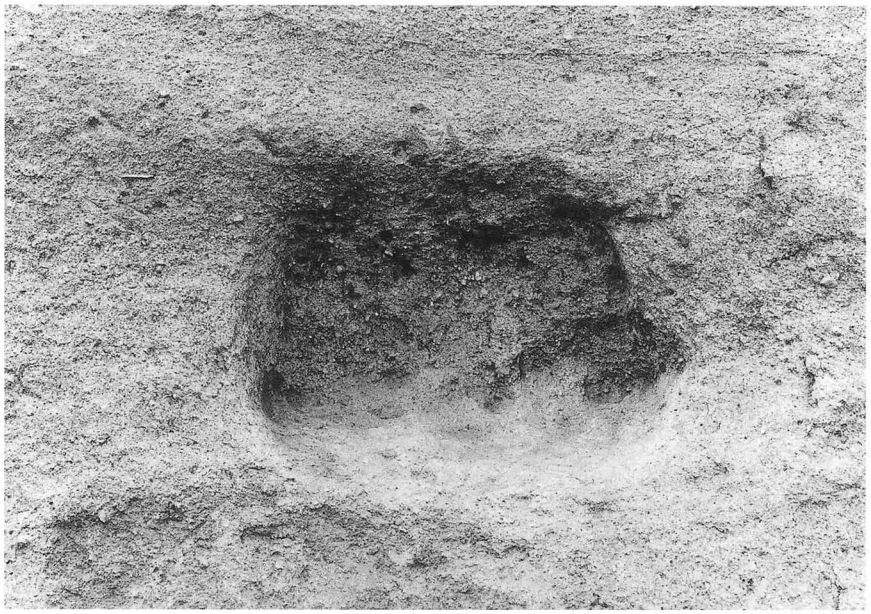
2号横穴墓
玄室奥壁完掘状況

2号横穴墓
完掘状況（玄室内から）

図版6

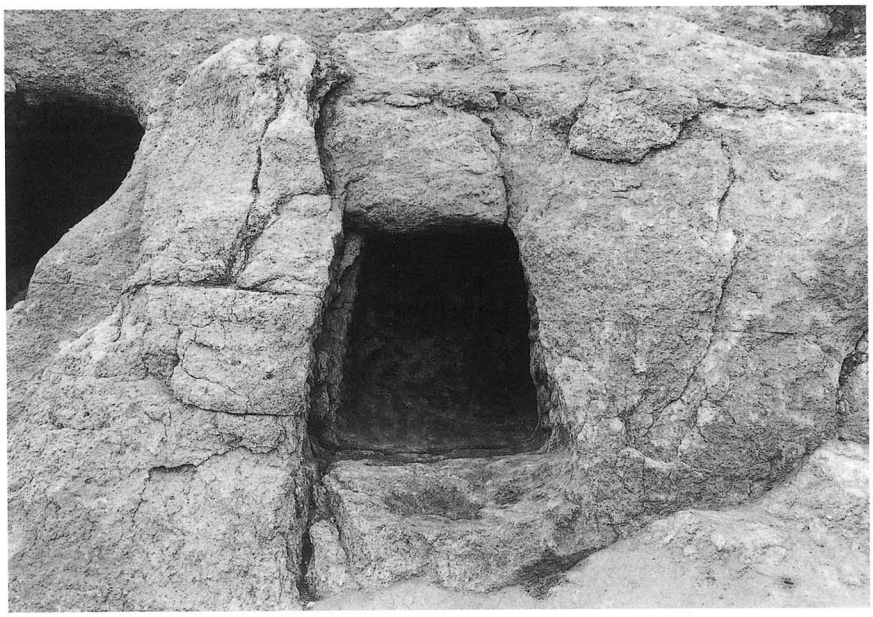


ＳＸ03　縦断土層



ＳＸ03　完掘状況

ＳＸ04　縦断土層



ＳＸ04　完掘状況

トレンチ1
縦断土層（上）

トレンチ1
縦断土層（中）

図版8

トレンチ1
縦断土層（下）

トレンチ1
横断土層（西）

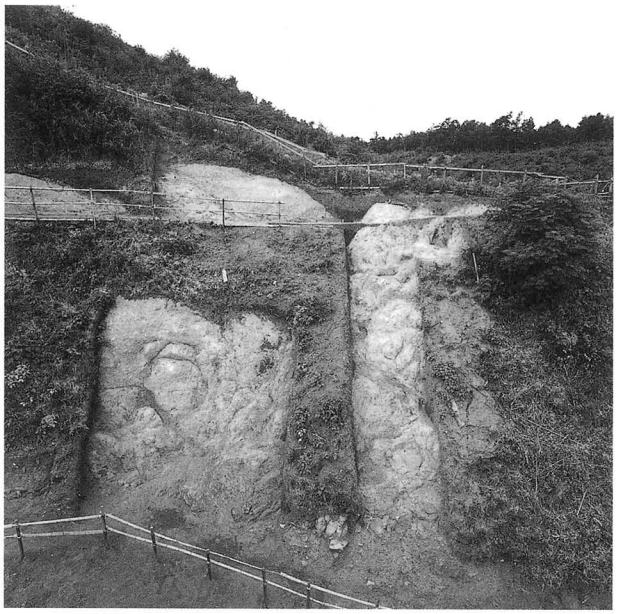
トレンチ1
横断土層（東）

トレンチ4
縦断土層（上）

トレンチ4
縦断土層（下）

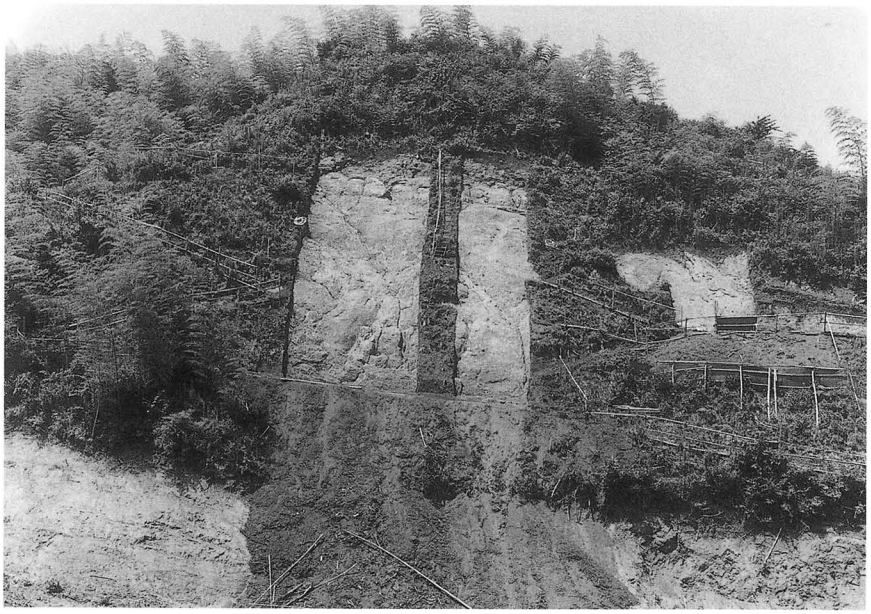
トレンチ6
縦断土層

図版10



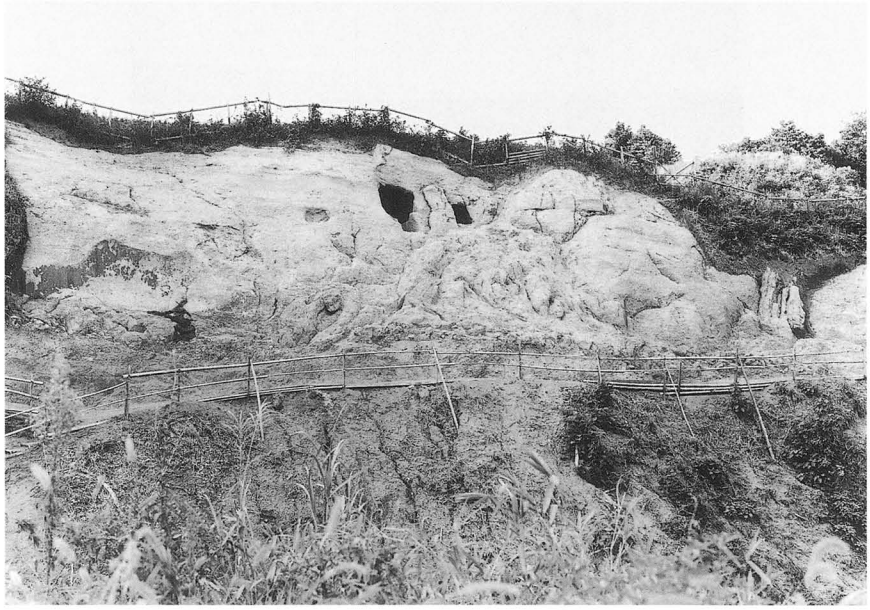
トレンチ7．8．9
完掘状況

トレンチ8
縦断土層



トレンチ11．12．13
完掘状況

トレンチ12
縦断土層



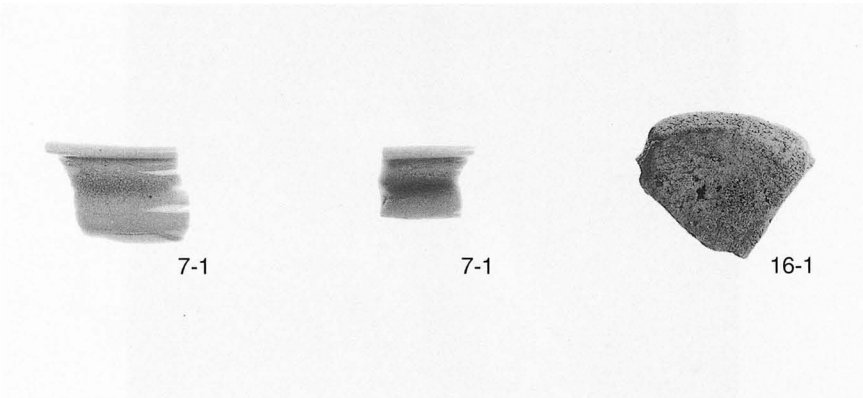
2号横穴墓周辺
完掘状況

調査終了後
（上空から）

図版12

調査終了後
（南上空から）

調査終了後
（南東上空から）



長廻横穴墓群
出土遺物

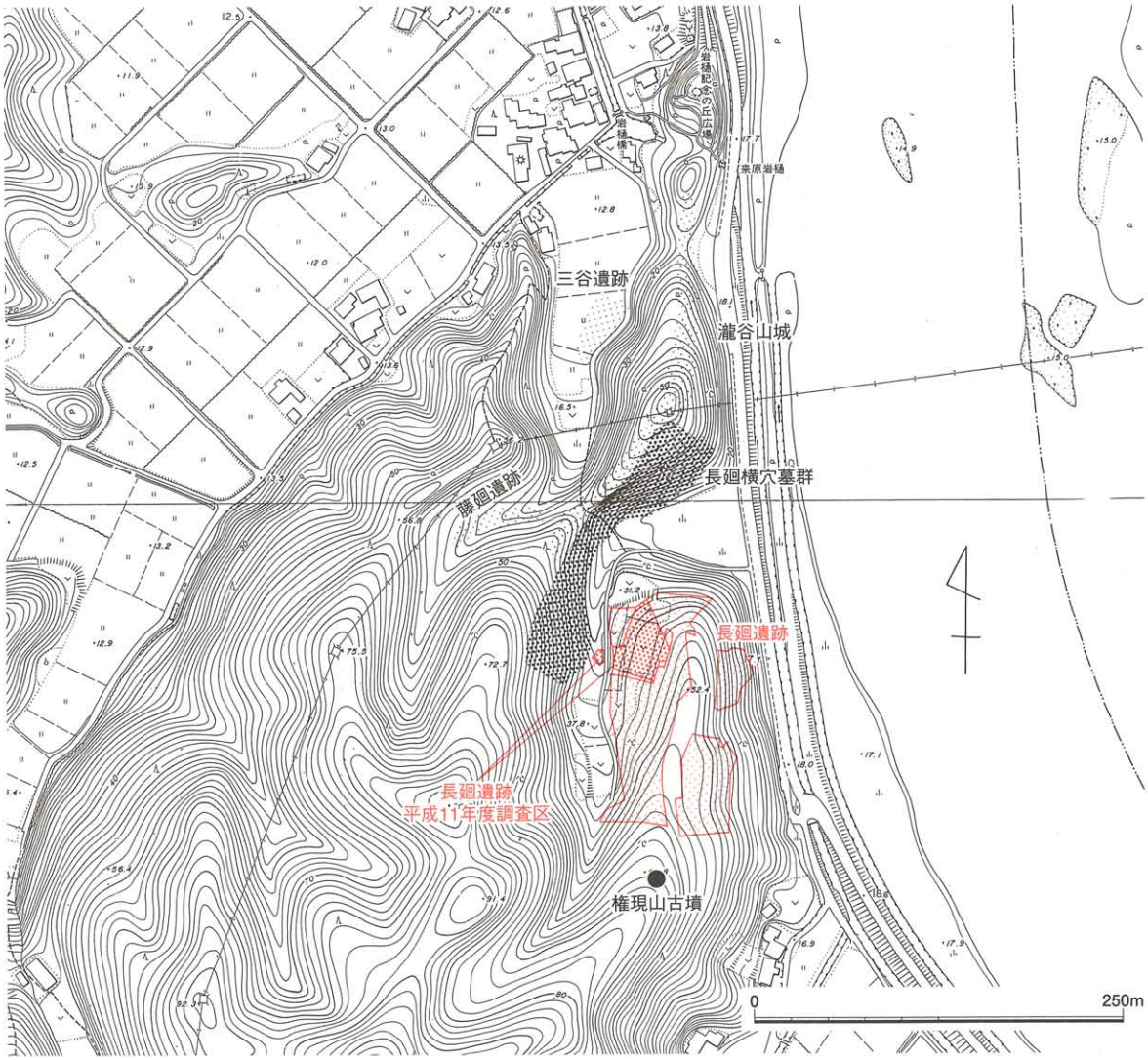
第４章　長廻遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

長廻遺跡は、出雲市大津町上来原に所在する遺跡である。来原岩樋と呼ばれる高瀬川の導水溝の付近から南にかけては権現山と呼ばれる丘陵が存在し、その丘陵の尾根が北に向かって延びている。長廻遺跡はその一番東側、斐伊川よりの尾根と谷に存在する。周辺には、谷を隔てた岩樋まで延びる尾根の斜面に長廻横穴墓群(本書第３章参照)が存在し、同尾根状には瀧谷山城跡が存在する。さらに長廻遺跡のある尾根の南側には権現山古墳が、さらに奥の山頂付近の斜面には権現山横穴墓群が存在することが知られている。

以上のような環境に位置する長廻遺跡については、既に門脇俊彦氏によって土師器・須恵器の出土が報告されていたが[*1]、このたびの調査に伴うトレンチ調査によって、遺跡は尾根の東側、斐伊川側にも広がることが確認された。同時に、谷部大岩付近でも本調査を実施することとなった。なお、遺跡の状況はトレンチ調査時には既に建設省による用地買収によって荒れ地の観を呈していたが、古写真によって谷部には水田が、西斜面には畑が営まれていたことがわかる。

平成11年度の調査区は、谷部大岩付近(Ⅰ区)と尾根西側斜面（Ⅱ区）である。調査は先述したよ

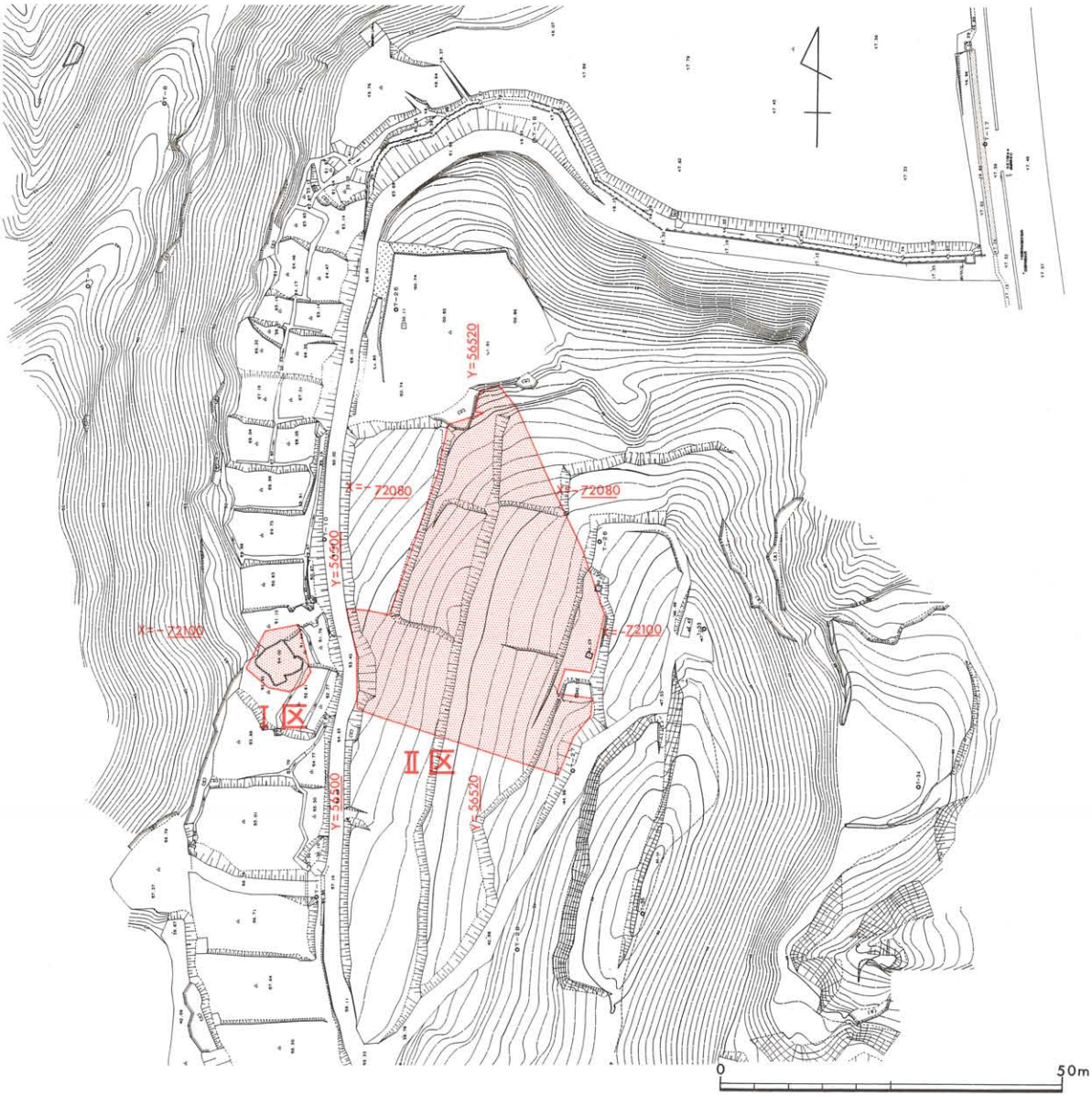


第18図　長廻遺跡位置図（Ｓ＝1／5000）

うに、平成11年５月20日～７月13日にかけてⅠ区大岩の調査、同９月14日～12月15日にかけて同Ⅱ区の調査を、斐伊川放水路建設予定地内大津地区のトレンチ調査と平行しながら実施した。

Ⅰ区では、大岩の東側の影になる部分で、大岩に寄り添って完形の土師質土器２枚が検出され、さらに岩を取り巻くように作られた段の石組み・木組みが検出された。特に前者については、中～近世にかけての大岩を対象とした祭祀が想定される。

続いてⅡ区では、古墳時代後期の性格不明の遺構１か所、弥生時代後期初頭の竪穴建物跡１棟、同終末期～古墳時代前期初頭にかけての竪穴建物跡２棟、弥生時代中期末～後期初頭の加工段３か所、同古墳時代後期の加工段１か所、弥生時代後期初頭の土坑1、同古墳時代中期～後期の土坑２か所、比熱をうけている土坑１、弥生時代中期末～後期初頭の半円状を呈する溝１条、同古墳時代中期の溝１条、近世の溝１条などが検出できた。うち、竪穴建物ＳＩ01からは古式土師器が、加工段01からは古墳時代後期の土師器・須恵器を大量に検出し、竪穴建物ＳＩ05付近の表土からは、銅印も発見された。これらの成果を得て平成11年11月27日には、古志本郷遺跡と連結して現地説明会を行い、悪天候にもかかわらず地元を中心に約70名の見学者を得ることができた。

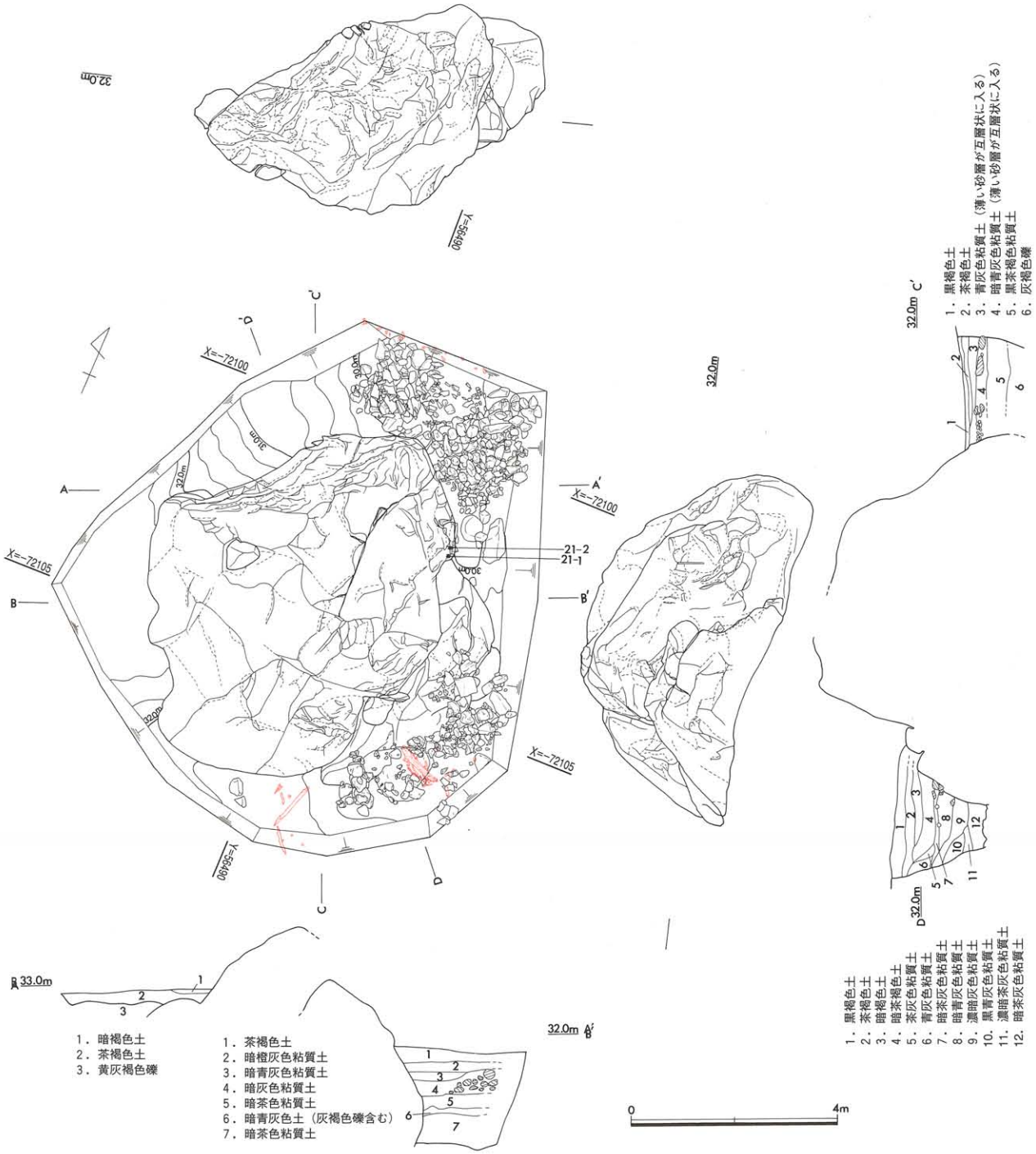


第19図　長廻遺跡調査区位置図（調査前地形図Ｓ＝1／1000）

第２節　調査の結果

（１）Ⅰ区の調査

調査区の位置　Ⅰ区は、斐伊川岸から南に入り、権現山に登る谷の谷底に位置し、標高は32m前後である。谷の入り口からは約150mほど登った場所にあたり、調査前は水田として利用されていた。調査以前から大岩が露出しており、トレンチ調査時に大岩東側にトレンチを設定して調査したところ土師質土器２点（第21図－1･2）が岩に添って出土した。そこで、大岩周囲全体を取り巻く

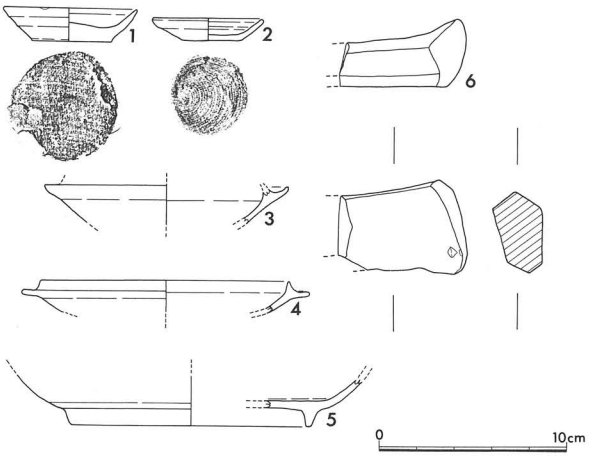


第20図　長廻遺跡Ⅰ区大岩実測図（Ｓ＝1／120）

ように本調査を実施することとした。

大岩

大岩は、谷の西側斜面に寄り添う形で調査前から露出していた。蔦様の植物、雑草に覆われており、現在、特に信仰の対象となっている様子は窺えない。調査は、山側で凝灰岩・礫を含む堅くしまった土層を検出した段階で地山に到達したものとした。谷側では標高30.5m付近で凝灰質の岩塊が現れた。これは自然堆積物でなく人為的なものである可能性もあるが、谷筋の湧水が激しく、調査はこの面の検出で留めた。



第21図　長廻遺跡大岩周辺出土遺物実測図（S＝1／4）

規模　前述のように掘りあげた段階で、東西約7.0m、南北約7.5m、高さが北側で4.2m、南側で2.4mを測る。東北角の側面には矢穴が認められ、一部が割取られた可能性が高い。

基本層序　表土の下に暗茶褐色系の粘質土があり、その下層に還元化した青灰色の粘質土層をもつ。暗茶褐色系の粘質土（東西土層図東側４層・南北土層図北側４層）にはともに岩塊が含まれている。

また、南側の土層堆積状況からは、大岩周辺が抉れて窪んでおり（流水によるものか）それが埋没した後整地されている様子が窺える（南北土層図南側２・７層）。

大岩をめぐる石組み・木組み・杭列　最下層からは石組み状の遺構が２か所で、杭と板による土止め状遺構が１か所で検出された（南東角）。これらは、現状の水田面の段差とは直接関係のない位置に築かれているが、いずれも谷筋を段状に利用するための土止め様のものと推測される。石組みの１つは大岩南側に位置し、３段にわたって石垣状に組んでいる。もう１つは調査区東北角から大岩にかけて検出したもので(写真図版５)、３～４段に石垣状を呈している。いずれも切石は確認できず、周辺に散見する石が利用されていた。なお、調査区北辺の杭列は、調査前の水田地割りにともなうものである。

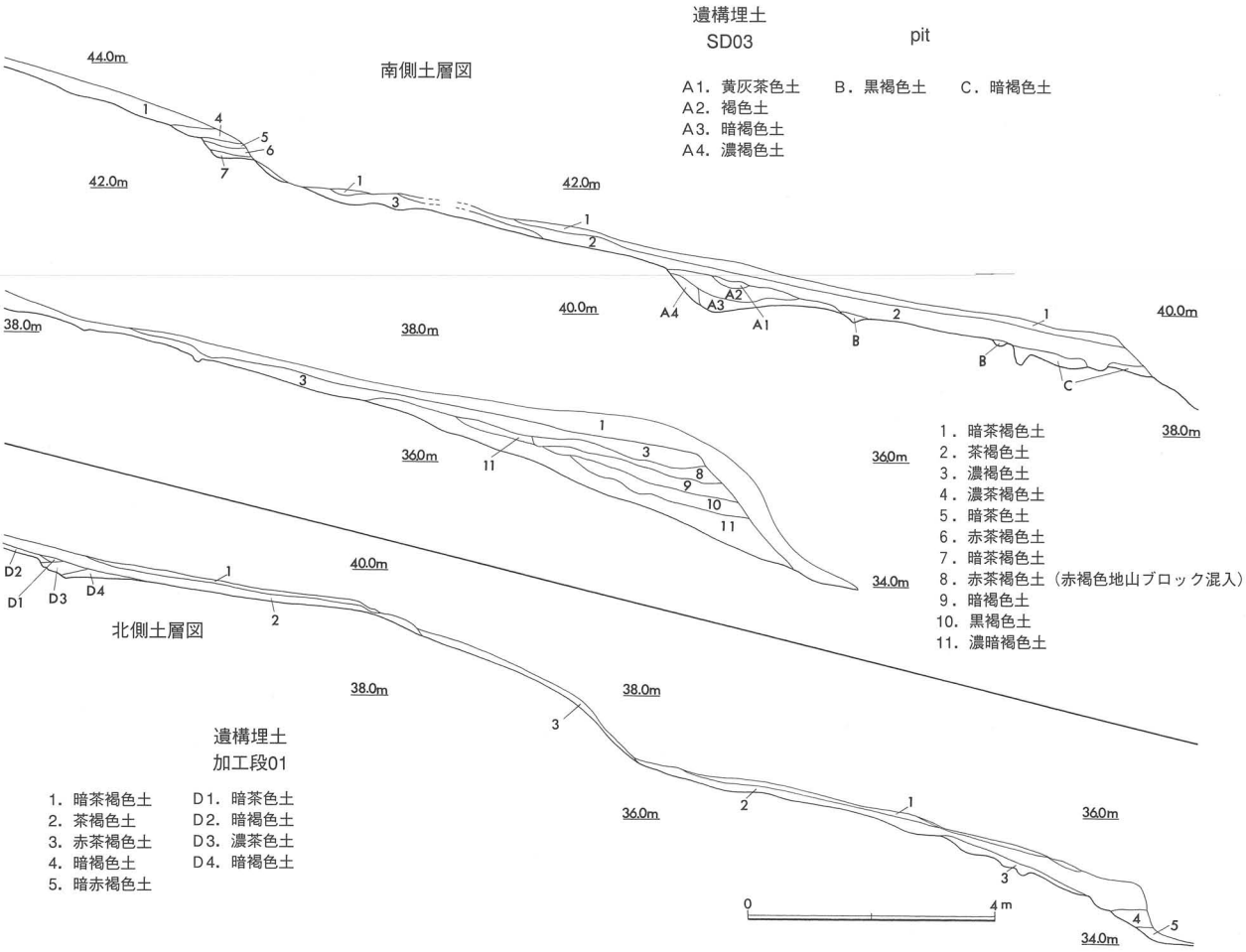
大岩周辺の出土遺物（第21図）　１・２は土師質土器の皿で、大岩東側の影になる部分に完形で出土した（写真図版５）。出土層位は東西土層図東側第７層。１は底部に厚みをもち、２は小型ながら低平で、いずれも古志本郷遺跡[*2]や姫原西遺跡[*3]、藏小路遺跡[*4]では中世後期～近世はじめとされた土師質土器の形態に類似している[*5]。また、１のような厚い底の皿としては古志本郷遺跡H区ＳX01の鉄鍋内出土の土器を見ることができる[*6]。しかし、１の底部調整は静止糸切りであり、古志本郷遺跡においては、この技法の初源は不明確ながら、近世でも18世紀以降に多くみられるとされており、１・２についても近世でも18世紀頃以降のものである可能性がある。今後、周辺遺跡での類例の増加を待って、これらの土師質土器の年代は考える必要があろう。３～５は須恵器坏である。いずれも最下層の凝灰岩礫やその直上から出土しており、摩耗の激しく、谷奥部からの流入した遺物である。６は砥石である。このほか、不明獣骨などが出土した。

大岩の土師土器の意味　完形の土師質土器からは、大岩を対象とした祭祀行為が推定されるが、周囲にはこの２点しかみえず、短期間(１回のみ)のものであったようである。また、これらは最下層からの出土であり、それにほぼ伴う石組み・木組みの年代も近世以降となろう。

（2） Ⅱ区の調査

調査区の位置　Ⅱ区はⅠ区と同じ権現山に至る谷の西側斜面にあたる。谷の入り口からは150～200m入った地点で、標高は尾根先端に近い北側が低く31m、南側が谷底付近で33m、同尾根筋側が44mに達する。調査区は調査前の状況で、北東部・北西部・南東部・南西部の4面の段々畑となっており、それぞれの境目、尾根側は大きく地山が彫り込まれて、古い遺構なども検出できなかった。一方で、各段の谷側には盛り土がおこなわれている（第23図南側土層図４～６層、北側土層図４・５層）。また、北側尾根先端部にいくに随って強い浸食作用を受けており、遺構面が流出しているものが多かった（ＳＩ04）。調査区の面積は約750㎡である。

第22図　長廻遺跡Ⅱ区遺構図（Ｓ＝1／300）



第23図　長廻遺跡Ⅱ区調査区土層図（S＝1／120）

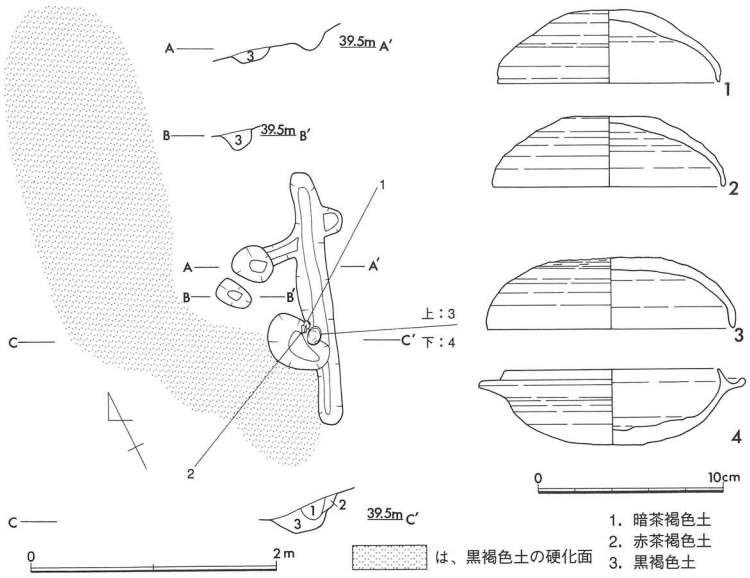
基本層序（第23図）　南側土層図は、調査区南側壁面、北側土層図は加工段01北端付近で、調査区南辺にほぼ水平になるように設定した。先述のように、段々畑としての造成によって、堆積土は表土１層のみで地山面までの深さも10～30cm程度、遺物包含層も存在せず、遺構の保存状況は概して良くなかった。ただし、調査区南端の８～11層は盛土層ではなく良好な堆積土で、弥生～古墳時代の遺物が包含されていた。また、調査区の東側は近・現代の墓地で多数の墓坑が存在したが、そのためもあってか近現代の整地はみられず、黒色の遺物包含層が残存し（写真図版13）古墳時代の遺物が比較的多く出土している（第49図）。なお、地山については凝灰岩の風化したものと思われる黄灰褐色の年砂質土あるいは赤茶褐色土で、標高差などによって部分ごとに異なっていた。

以下、性格不明の遺構ＳＸ01、竪穴建物、加工段、土坑、溝の順に各遺構について報告していきたい。

A　性格不明遺構

ＳＸ01（第24図）

規模・形態　ＳＸ01は、調査区ほぼ中央、標高39.5m前後に位置する。等高線に平行する方向のの溝によって、径40cm深さ20cm（いずれも検出面での大きさ）の柱穴が、幅20cmほどの等高線に平行する方向の溝によって切られている。周辺には削平地は検出できなかったものの、同柱穴から北西の方向にかけて長さ４ｍ、幅１ｍの黒褐色土による硬化面が検出された。ただし、この硬化面



第24図　長廻遺跡ＳＸ01遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

は片流れの傾斜地で、硬化面の北西端で柱穴部分と50cm程度の比高差が生じている。

覆土と遺物の出土状況覆土は硬化面と同様の黒褐色系のやや粘質をもった土である。遺物は前述の溝の覆土から第25図１～4がまとまって出土、なかでも３・４は３を上にした状態でほぼ完形のまま組合わさって出土した。

出土遺物１～３は須恵器蓋坏。１・２は天井部のヘラケズリを省略するもので、３のみ中央に若干のヘラケズリが残る。４は同坏身で、やや丸みを帯びている。1・2・４が大谷晃二氏の形態分類・編年[*7]による蓋坏Ａ７類とそれに伴う坏身、３が同Ａ６類に該当する。

年代・性格遺構の年代は、出土した須恵器から大谷編年５期、７世紀前半にあたる。現状では性格不明である。南側にみえる柱穴（第22図参照）を含めて、柱穴が溝に切られている点など問題として残るが、掘立柱建物跡の痕跡の一部である可能性もある。

B　竪穴建物

ＳＩ01（第25図）

規模・形態　調査区中央南寄りに位置する。形態は隅丸方形で、東西4.2m、南北4.3m、深さは0.7mを測る。保存の良好な東側辺には幅1.4m、長さ0.6m、深さ0.2mの張り出し部が確認される。ただし、床面や壁面などにこれに対応する柱穴などはみられず、その機能は不明である。一方、西側には、長さ1.4m、幅0.9m、深さ1.5mを測る貯蔵穴がある。西側は保存状況が悪いが、残存する壁体溝の位置からすると、壁際ぎりぎりに位置したと思われれる。床面の標高は40.0～40.1m程度である。

壁体溝・柱穴　住居跡内にはピット５穴が確認された。このうちＰ１～Ｐ４が主柱穴で、４本柱で構成されていたとみられる。Ｐ１・４がやや大きく長径70cm、深さ60cm程度、Ｐ２・３が径40～50cm、深さ60cm程度である。P1・３では径10～15cm程度の柱の抜取痕跡が検出できた[*8]。Ｐ５はいわゆる中央ピットであり、赤茶褐色系の土が堆積していたが、これらは地山の赤茶褐色粘質土に近いもので、特に焼土などは認められなかった。１回の掘り返しが想定される（覆土19・20層）。壁体溝は２条確認されている。現在の壁面側に位置する幅30cm、深さ10cm、内側のものが幅15cm、深さ10cmを測る。内側のものは、南東の１／４周分程度しか確認できなかった。住居面積の拡大を考えた場合の２次的な主柱穴、あるいは主柱穴の掘り返し等も認められず、内側の溝には、壁体溝と異なる機能を想定するべきかもしれない。

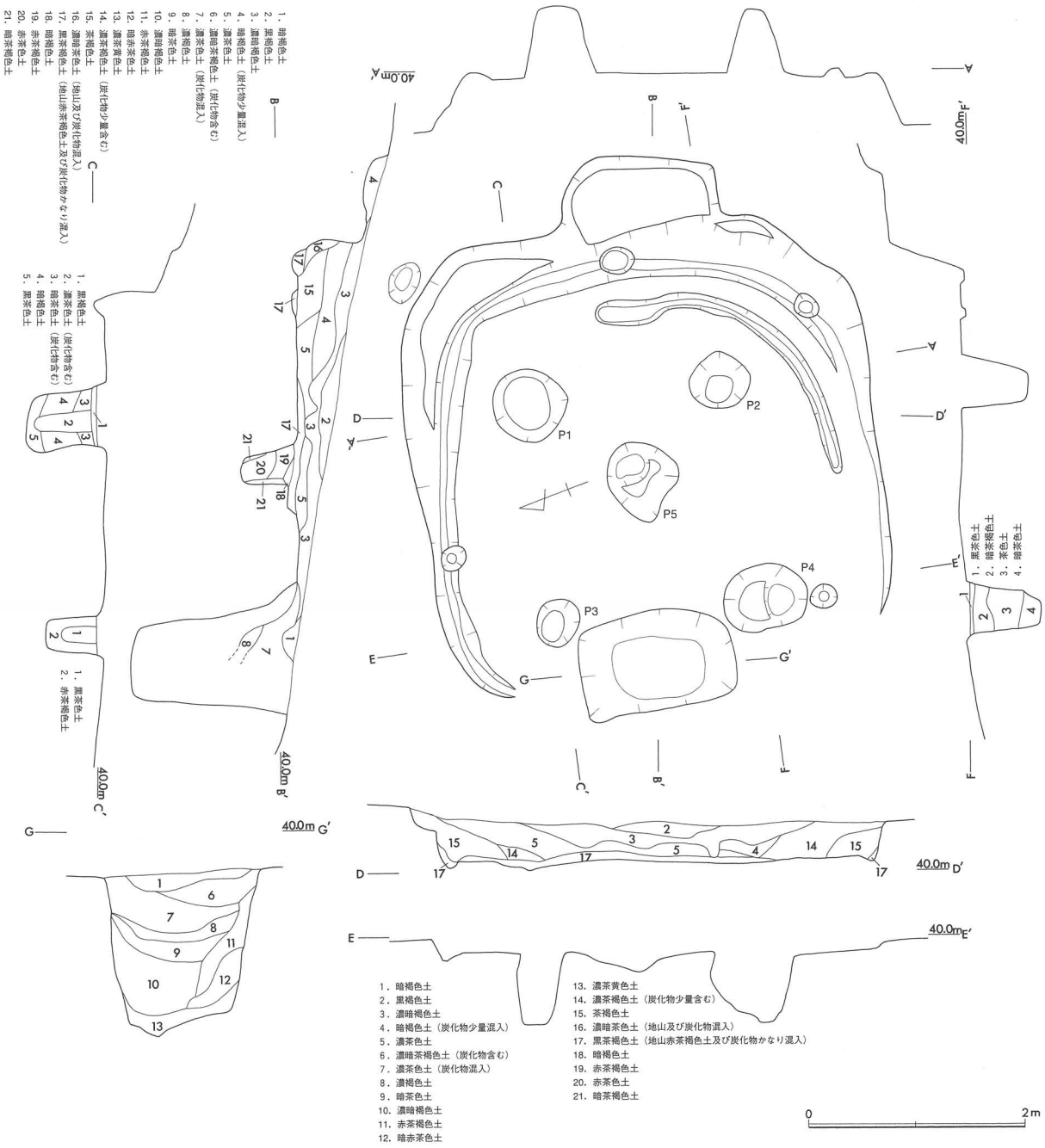
覆土　後述の遺物出土状況にもかかるが、上部の１～３層は地山ブロック・炭化物を含まない層で、古墳時代後期の遺物を包含しており、竪穴建物廃棄後の窪地を利用した廃棄にかかる堆積とみられる。一方、４層～16層までは竪穴建物廃棄にかかわる堆積層と考えられ、第28・29図にみえる古墳時代初頭の遺物が含まれている。このうち17層は炭化物を多く含み、よくしまっていることから貼り床あるいは床の生活面と考えられる。また、西側の貯蔵穴は土層を３あるいは４層程度に大きく分けることが可能で、11・12層のように明らかに切られているものが存在するのでこの程度の掘り返しがあったとみられる。遺物は９層以上から出土する。

遺物出土状況（第26・27図）　遺物の出土は上下に二分して考えることができ、第26図では遺構に関わるとみられる、遺構廃絶後のあまり時間のたっていない覆土の下層からの出土状況を中心に示している。実測図を掲載した出土遺物中、第28図１～第29図16までが下層の遺物群、同17～19までが貯蔵穴の出土遺物、同20～第30図33までが上層の遺物群に属す。上層の遺物群は土製支脚などを含み、明らかに須恵器登場以後のものと推察されるが、すべて土師器で、須恵器は図化できるか否かにかかわらず１点も出土していない点が特徴である。一方、遺構にかかる下層の遺物群は多くが破片であり量も乏しく、必ずしも床面の直上に位置するものでなく、自然地形に添ってやや傾斜して分布していることから、第27図に示した床面直上出土の甑形土器をの除いては、竪穴建物が廃絶し、建物跡が埋まる過程で含まれたものであろう。

出土遺物（第28～30図）　出土遺物はいわゆる山の土器で、表面の風化の激しいものが多く、比較的保存状況の良好なもののみを実測した。

１～３は甕である。いずれも口縁部のみで、推定口径が20cmを越える大型品であり、一様に器壁が厚く、複合口縁部の突出は鋭い。３のみ外傾する。４は低脚坏の足、５～８は高坏で７には縦方向のハケが見られる。中央に軸穴をもつ円盤充填。９～12は鼓形器台であるが、風化のために調整が不明で、受部・脚部の判断については推測である。９のみ受部外面にに痕跡的なハケを残している。13～16は甑形土器である。これらはほぼ２個体分は上下接続する形で出土したが（第27図参照）、取り上げとその後の注記・接合作業の進行手順が悪く、復原が不可能になってしまい、上下のみの図示になってしまった。この場を借りてお詫びしたい。小型のものである13が27図の南北方向に倒れているもの、16が北西から南東に倒れているもので、これと接合しないもう１個体分（14・15）が図示した箇所などに含まれているとみられる。いずれも下端の内面に横方向のヘラケズリ、体部に縦方向のヘラケズリが施される。このうち13は特に器壁が薄く5㎜程度である。17～19は貯蔵穴出土土器。17・18は甕で、18は風化が激しいものの、器壁が薄く、複合口縁部の半ばで折れ曲がって外反することから草田５期[*9]の特徴を示している。19は壺で、頸部が一定の太さをもち、複合口縁部も直立気味で、松山智弘氏の指摘する近畿の影響を受けた複合口縁細頸壺とはやや相違した形態である[*10]

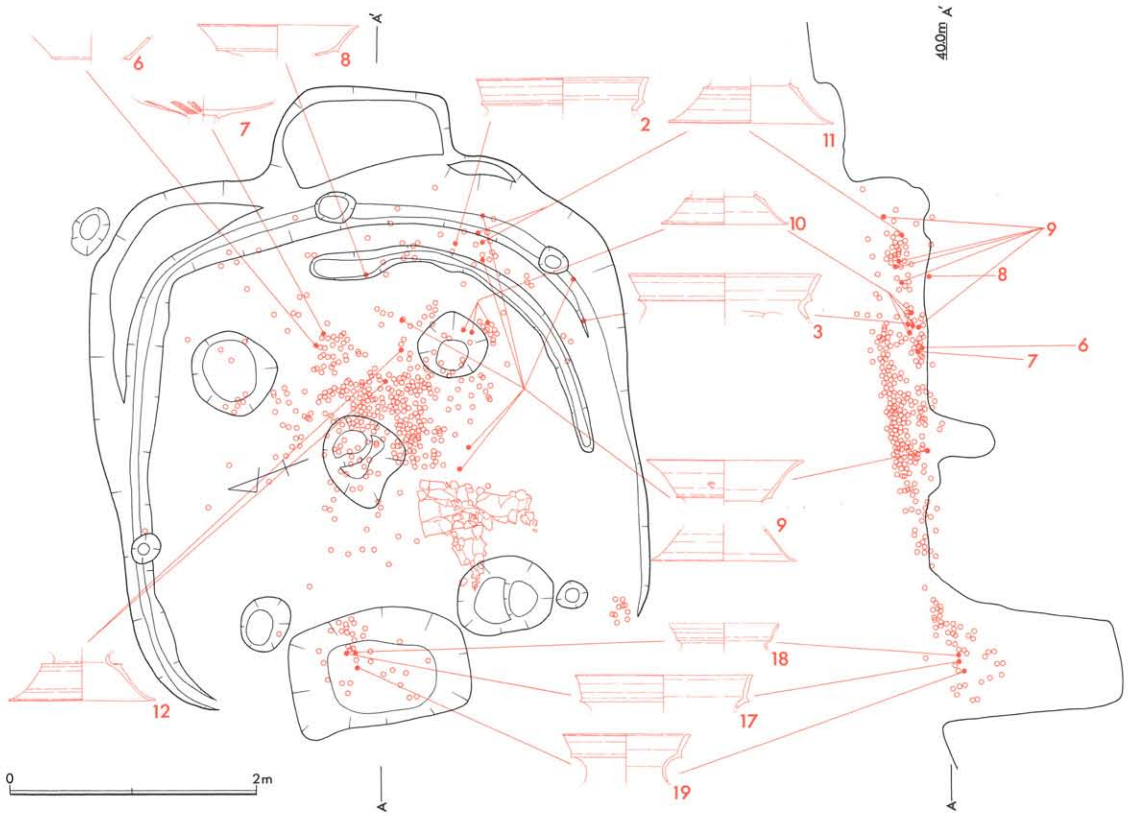
20以降は上層の遺物包含層からの出土品である。20～27は土師器の甕である20・21は小型で体部に丸みを帯びるもの、23～27は口径に比して体部が大きく広がり、口縁部は直立しつつ端部が外傾するもの、あるいは「く」の字状を呈するものである。いずれも確認できるものは外面ハケ内面ヘラケズリ。28は甑か。頸部に細いハケを施す。29～31は土製支脚である。いずれも二股突起で外面には指頭圧痕が多数残る。穴は外側からあけられているが貫通せず（30）、29はいったん貫通したものを塞いでいる。32・33は移動式竈片。34は砥石で、竪穴建物付近を調査した際の廃土から発見された。



第25図　長廻遺跡ＳＩ01遺構図（Ｓ＝1／60）

下層出土遺物の時期　これらの遺物は、出土状況で述べたとおり必ずしも良好な一括遺物とはみなせないが、おおむね同時期のものとみて良いであろう。当該期の代表的な遺物である口径15～20cm程度の中型の甕こそ図示できなかったものの、草田５期と推察される18を除くと、３・９・17・19等いずれも典型的な小谷式土器（草田７期相当）よりもやや古相を示すものが多く、松山氏の大木式～小谷１式、すなわち古墳時代初頭に収まるものと考える[*11]。床面の甑形土器の年代もこれらの遺物と大きく異ならないことから、竪穴建物の廃棄ののち、それほど時間を経ることなく、遺構が埋まったとみられる。

上層出土遺物の時期　須恵器が含まれないために明確にし得ないが、土製支脚・移動式竈の出土から古墳時代後期以降であり、胴部が直線的で水平方向に「状に口縁の突き出る甕がみえないこと



第26図　長廻遺跡ＳＩ01遺物出土状況図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／12）

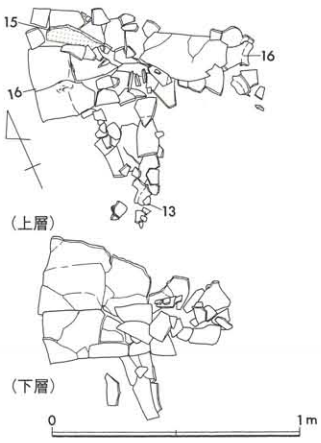
などからそう遅くは下らないものと考えられる。

上層遺物の包含層については、掘り込み面など明確な形で遺構として検出することができなかった。おそらく、竪穴建物廃絶後遺構はある程度埋没し窪地のような状況にあり、そこに土器が廃棄されたものと推察される。

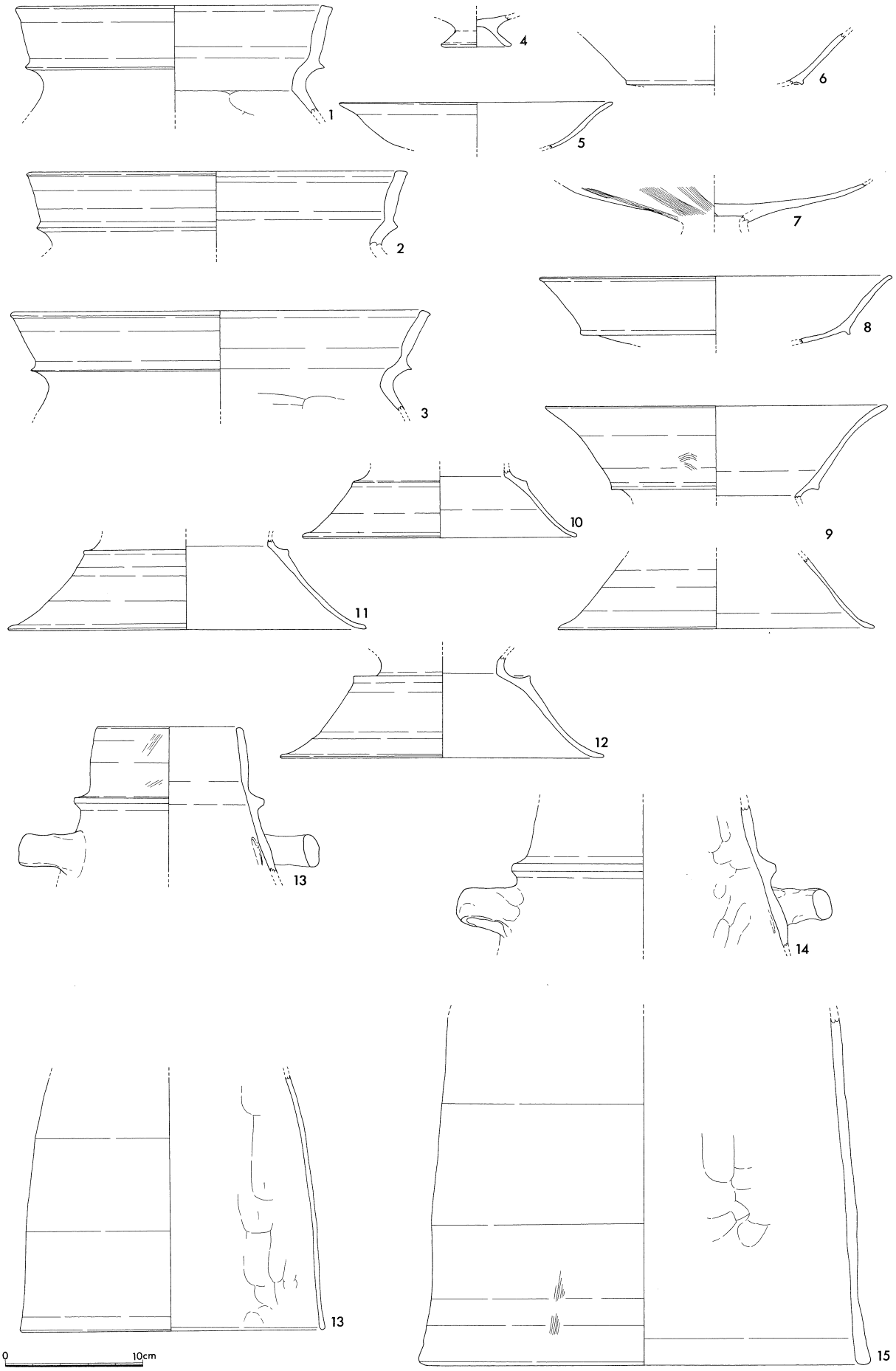
ＳＩ02（第31図）

規模・構造　調査区中央北寄りに位置する。平面径は隅丸方形で規模は南北方向の一辺が4.5m、同東西方向が、残存する部分で3.5m、深さ0.5mを測る。床面の標高はＳＩ01とほぼ同じく、40.0～40.1m付近である。なお、西側は遺構面が流出しているものと考えられる。

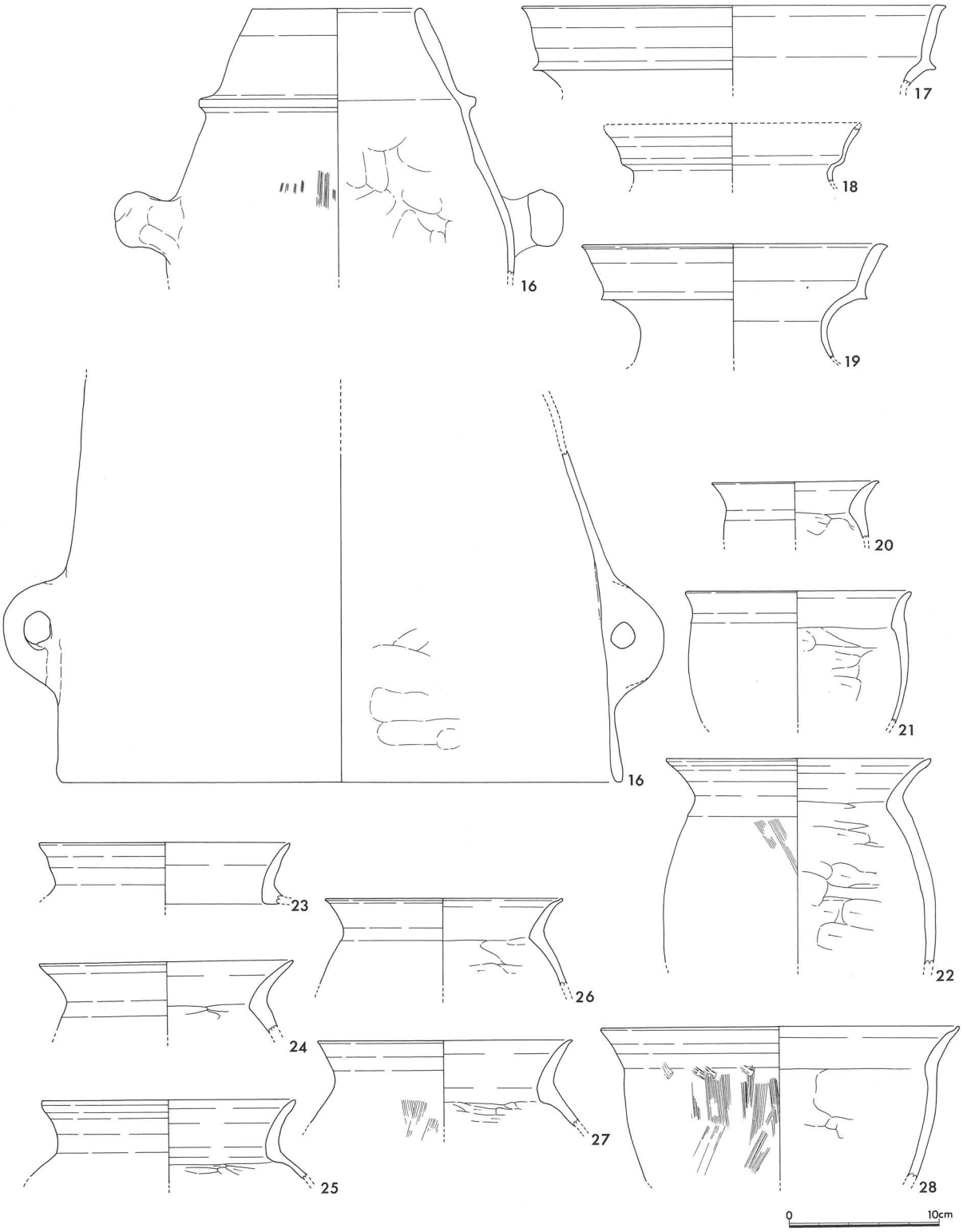
柱穴・壁体溝　竪穴建物内からは８穴のピットが確認されている。このうち主柱穴はＰ１～Ｐ4と考えられる。Ｐ１がやや大きく、長径90cm、短径60cm、深さ75cmを測る。やや南側に傾斜する形で掘られていた。他は径50cm、深さ50～65cm程度である。Ｐ５はいわゆる中央ピットで２段掘り状を呈する。上段で長径110cm、短径75cm、下段は径25cm、深さ50cm程度の深い穴になっている。堆積層には炭化物が含まれる。また、Ｐ５とＰ４・６の間の深さ5cmの浅いくぼみには、ピットに切られており炭化物を含む黒褐色土が堆積する。焼土こそ確認できなかったが火処の可能性もあろう。壁体溝は保存状況の良好な東側で幅15～20cm、深さ５～10cmのものが認められ、壁際に掘削されていた。



第27図　長廻遺跡SI01
甑形土器出土状況図（Ｓ＝1／30）



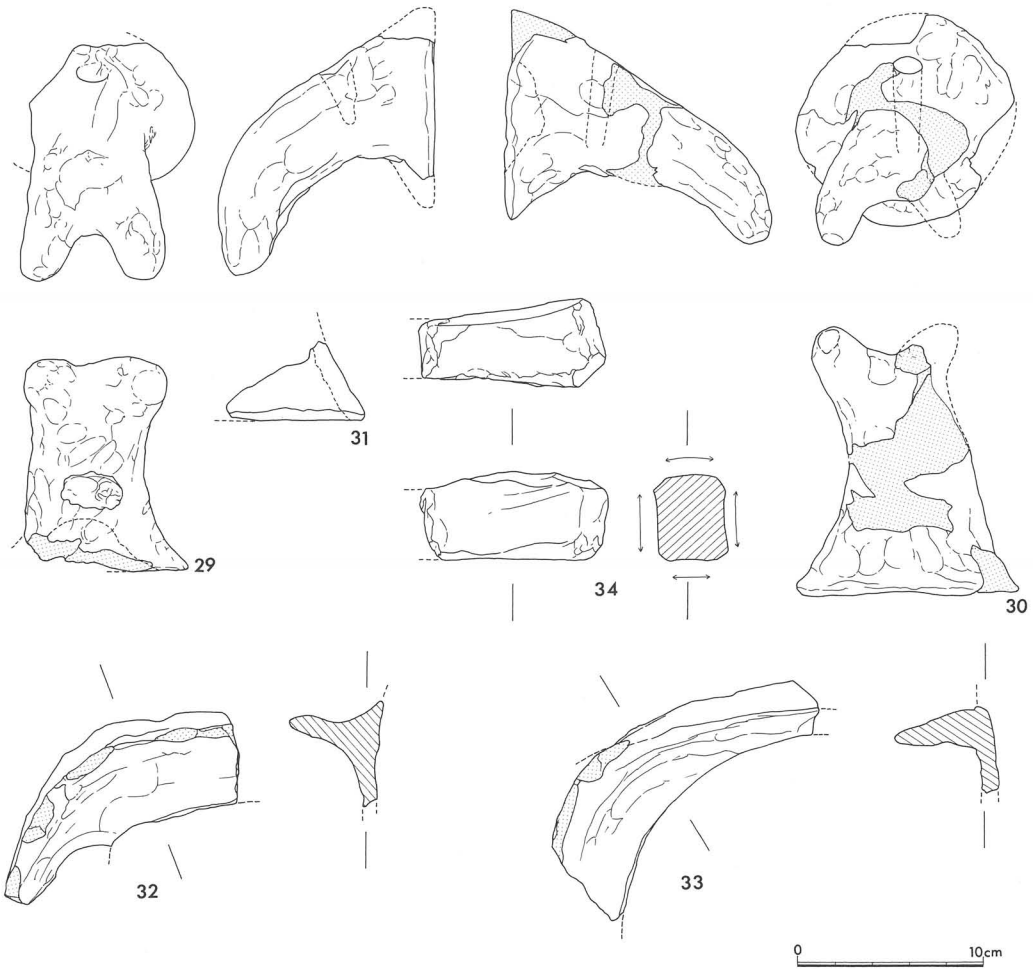
第28図　長廻遺跡ＳＩ01出土遺物実測図1（Ｓ＝1／4）



第29図　長廻遺跡SI01出土遺物実測図2（S＝1／4）

覆土　茶褐色のやや砂質の土が堆積する。7層はよくしまっており貼り床、あるいは床面の生活面とみられる。

出土遺物（第31図）　遺物は若干量が出土しているが(写真図版８)、いずれも甕体部などで図化可能であったのは２点のみであった。１は棒状土錘、上部が穿孔される。重さ8.6g。２は中心に軸穴をもつ円盤充填の高坏である。



第30図　長廻遺跡ＳＩ01出土遺物実測図3（Ｓ＝1／4）

時期　２やその他の遺物及びＳＩ01と同様の位置・形態であることから弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる。

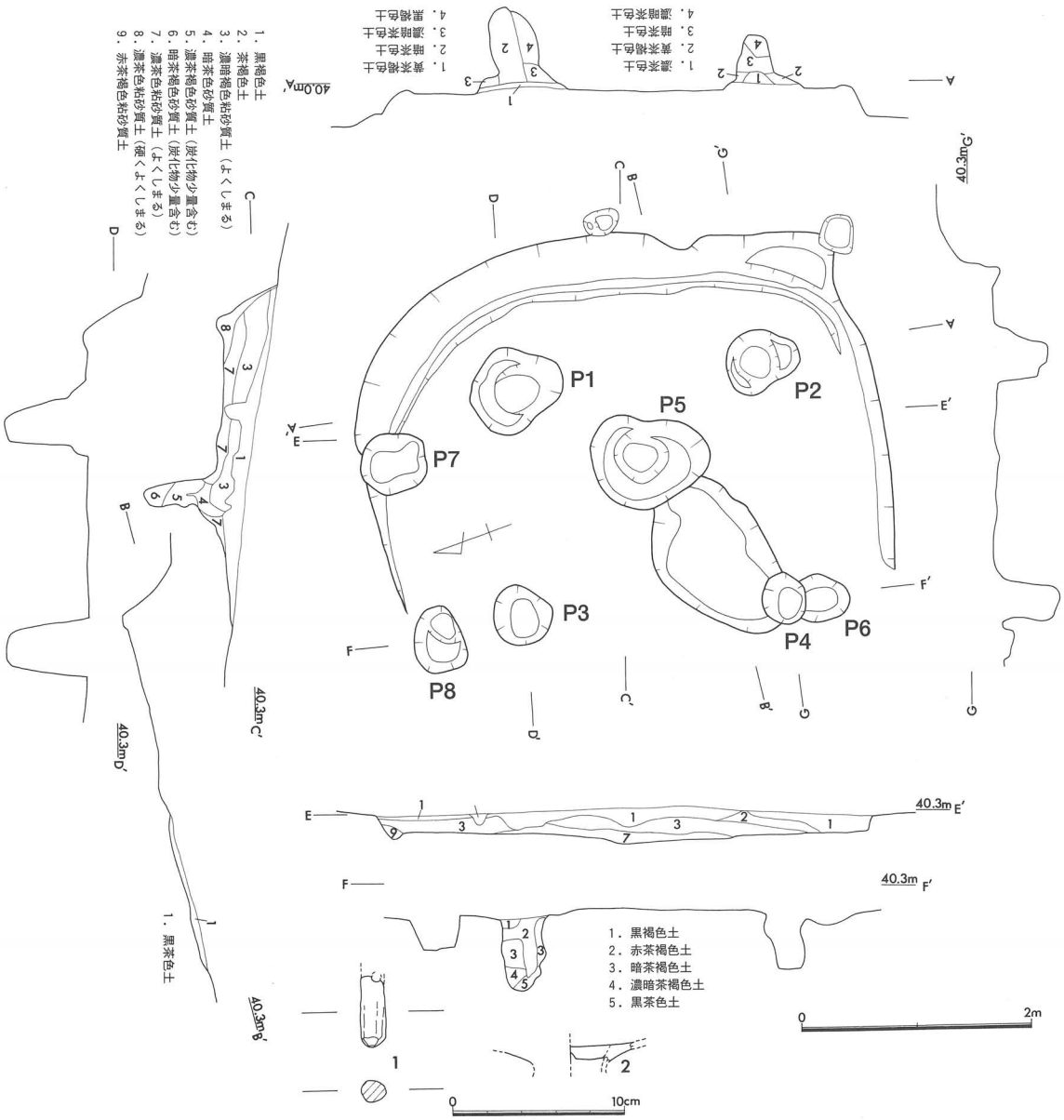
ＳＩ03（第32図）

規模・構造　調査区中央東寄りに位置する。ＳＤ01に切られる。調査区のうちこの周辺はやや平坦で、黒褐色土がかなり堆積していた。遺構自体もこの堆積土中から掘り込まれたとみられるが、掘り込み面を検出できず、竪穴建物の存在に気がついたのは地山面でのピット・壁体溝の検出時であった。そのため正確な規模は不明であるが、Ｐ１－Ｐ２間2.2m、Ｐ３－Ｐ４間1.8m、Ｐ１－Ｐ３間2.0m、Ｐ２－Ｐ4間で1.9mを測る。東側の壁体溝と推測される溝からは隅丸方形の平面形が窺える。床面の標高は41.3m前後。

柱穴・壁体溝　Ｐ１～５と溝が検出された。Ｐ１～4が主柱穴になろう。規模はＰ1～Ｐ３が径45cm、深さ50cm程度、Ｐ4のみやや大きく径75cm、深さ80cmに達する。Ｐ５は径65cm、深さ35cmで中央ピットに該当しよう。溝は幅25cm、深さ７cm程度であり、東側のみで確認された。Ｐ1・Ｐ３からは直径15cmの柱抜き取り痕跡が検出された。

覆土　前述のように、堆積状況は確認することができなかった。

出土遺物（第32図）　１は溝から出土した甕であり、口縁部はある程度の厚みをもちつつ内傾する。凹線文を施す。内面は頸部までヘラケズリ。２は高坏脚部でＰ５から出土した。拡張され凹線が施



第31図　長廻遺跡ＳＩ02遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

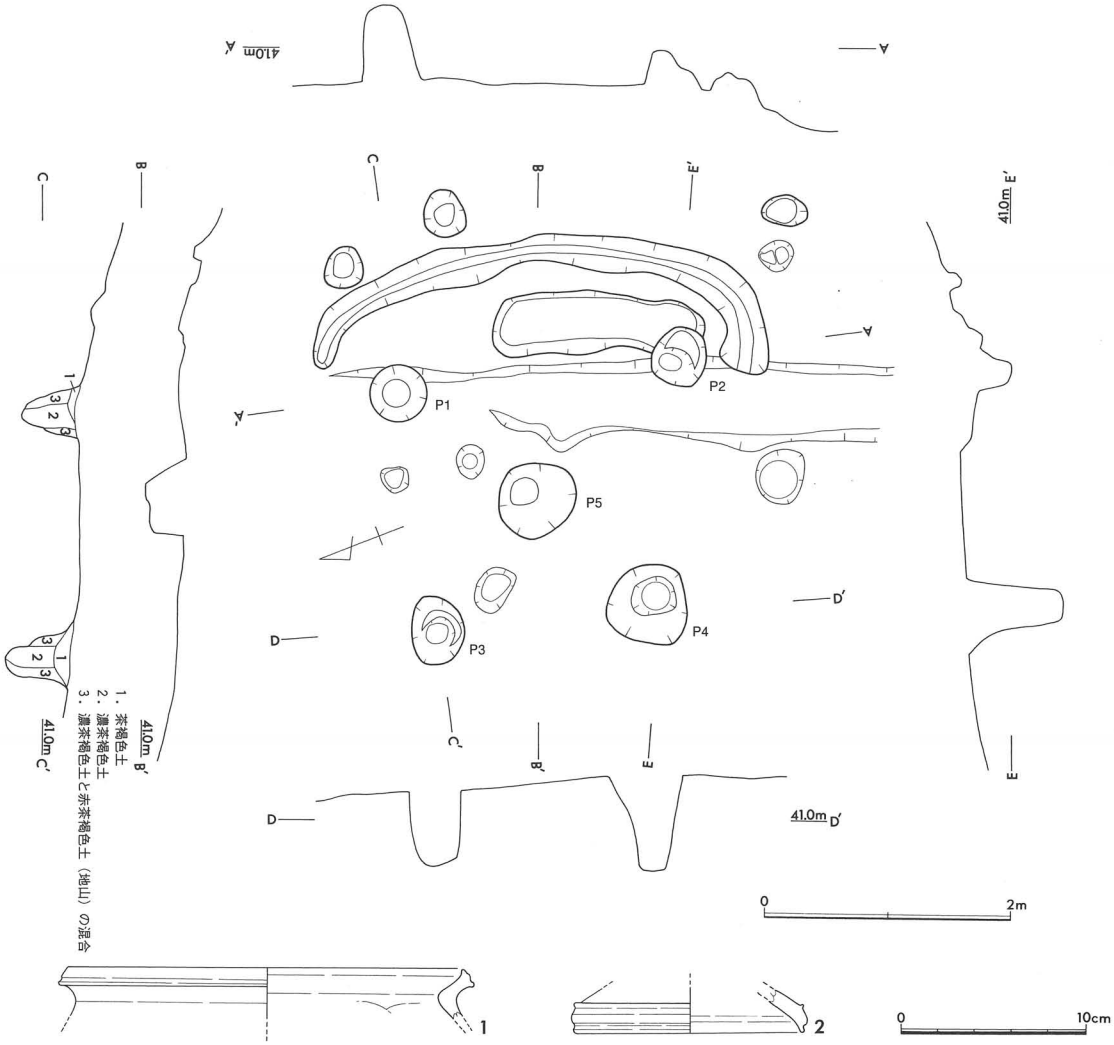
されるが、中期のものと異なり直立する。

時期　出土遺物はいずれも松本岩雄氏による編年のＶ－1様式に該当し[*12]、弥生時代後期初頭と推察される。ただし、溝の形状からは隅丸方形の建物跡が想定され、遺物の時期にはあまり普遍的ではない点が問題として残る。

ＳＩ04（第33図）

規模・構造　調査区北側に位置する。現状で強い片流れ斜面に位置し、北側、西側の遺構面は流出していた。Ｐ1Ｐ2間の距離は2.5mで、残存する壁体溝から平面隅丸方形を呈していたとみられる。床面の標高は36.1m前後である。

柱穴壁・体溝　ピット４穴、壁体溝の一部（南東隅付近）を確認した。Ｐ1・２がある時期の主柱穴とみるが、Ｐ３・４もほぼ同規模であり、立て替え等があったか。壁体溝の土層断面では掘り返しが確認される（１・２層）。規模はＰ１が径35cm、Ｐ２が長径80cm短径50cm、底面の標高はと



第32図　長廻遺跡ＳＩ03遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

もに36.0m前後になる。Ｐ３・４は径50cm、底部の標高は同じく36.0m前後となる。壁体溝は幅35cm、深さ15cmを測る。

覆土　濃暗褐色土が堆積していた。

時期　出土遺物はなく、遺構の時期については不明である。

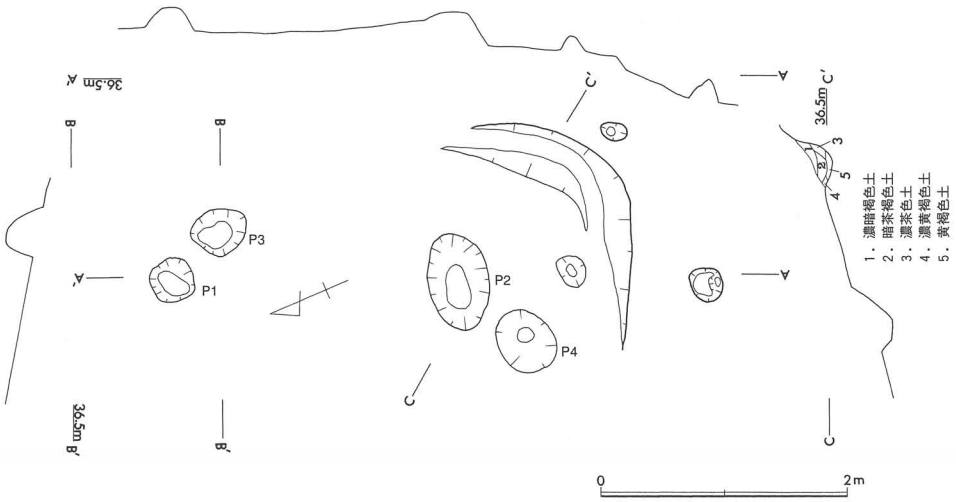
ＳＩ05（第34図）

規模・構造　調査区中央西寄り、ＳＸ01のすぐ西に隣接するが、両者の間には標高差がある。南側は開墾によって生じた崖によって削り取られておりＰ４・５間の距離で2.0mを測る。一方、東西方向ではＰ３・4間は、比較的平坦であるものの、Ｐ１・２周辺は相当の傾斜をもっており、これらピットが同一建物の柱穴を構成していた可能性は低いように思うが、平面的な位置としてはよい場所にあるので参考として図化している。ちなみにＰ１－Ｐ4間の距離が3.9m、Ｐ３－Ｐ4間の距離が1.9mを測る。全体として竪穴状の掘り込みの縁辺部に小柱穴をもつ構造の遺構である。なお、Ｐ３・４周辺の標高は38.5m前後である。

柱穴壁・体溝　同一平面と考えられるのはＰ３～５であり、いずれも径20cmの小柱穴である。深さはばらつきがあり、Ｐ３－30cm、Ｐ4－20cm、Ｐ５－40cmを測る。主柱穴に相当するものは検出

できなかった。

覆土　東側壁際付近に、暗褐色系の遺構に伴う堆積土を検出した。他の1～4層はいわゆる表土にあたる。



第33図　長廻遺跡ＳＩ04遺構図（Ｓ＝1／60）

時期と性格　遺構に伴う遺物は検出できなかったので、時期は不明である。またＰ３付近の表土中から銅印（第50図３）が発見されている。表土と異なる遺構の覆土が存在することから、竪穴建物跡として報告したが、近・現代の遺構である可能性も否定できない。

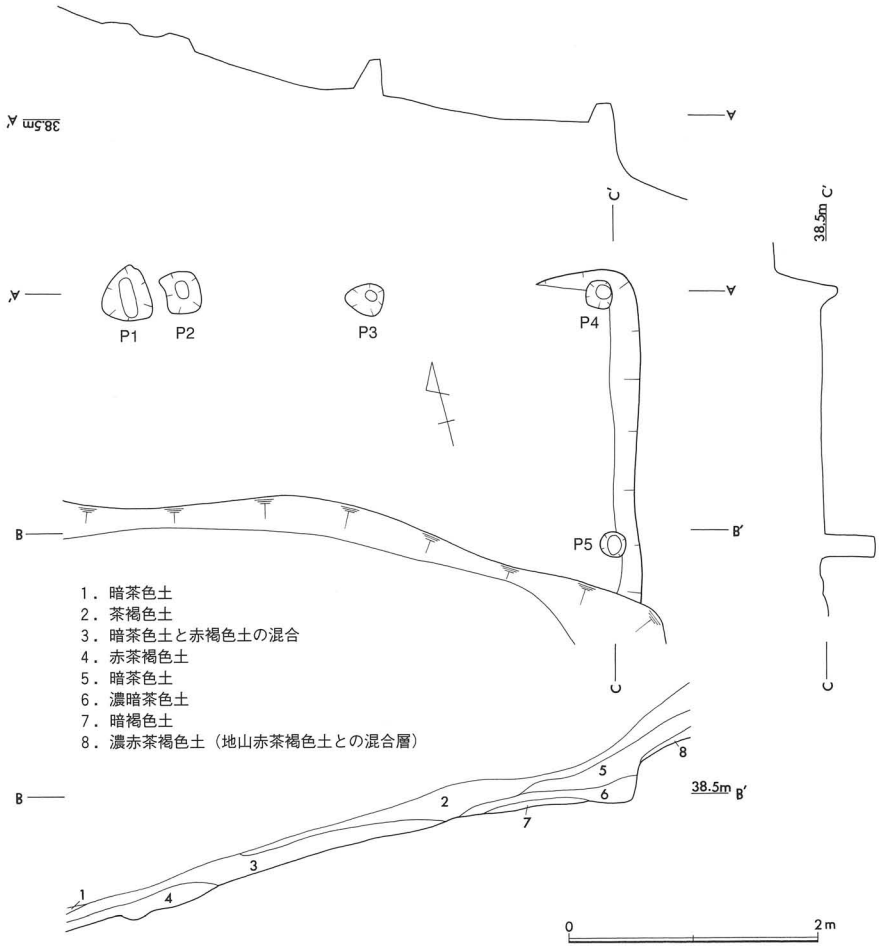
Ｃ．加工段

加工段01（第35図）

規模・構造　調査区中央北寄りに位置する。現状では南北10.5m、東西５m、深さの0.3mの」字の浅い溝状を呈している。ただし、北側は削られ、遺構面が失われており、本来の形状は不明である。底部には細かい凹凸はあるものの（写真図版12）、明確なピットを確認することはできなかった。溝の底部にあたる部分の標高は40.0m前後になる。

覆土　上層に暗褐色土、中層には黒褐色土、下層には茶褐色土が堆積するが、なかでも中層の黒褐色土層から多量の遺物が出土した。また同層の下部を中心に、第35図にみられるような多数の石も検出された。なお、これらの石に明確な加工痕のあるものはみられなかった。

遺物出土状況（第36図）　」字の溝の南側屈曲部を中心に大量の遺物が出土している。一方で、北側や西側斜面に延びる部分からはほとんど遺物が出土していない。出土した遺物は後述するように、須恵器坏から土師器の甕類、移動式竈に至る多種多様な土器類が中心で、写真図版12に示したように高密度に出土し、上位出土遺物と下位出土遺物の接合関係、平面的に距離をもつものの接合関係（36・49等）が認められることから、全体として一括性の高い遺物とみてよい。さらに、高坏・土製支脚などは出土状況が完形に近いか、破損していても完形近くに復原できるものが多いこと、全体の1/2程度が復原できた81の移動式竈等がかなり集中した形で出土していること等から、ある時期に使用していたそれらの土器類を、使用可能なものも含めてまとめて廃棄したと考えるのが妥当である。さらに、器種ごとの出土状況に目をやると、供膳具である須恵器高坏（図内▲印）周辺に、土師器の高坏や、須恵器蓋坏が比較的集中していることがわかる。一方で、煮沸具である移動式竈・土製支脚なども集中する場所があり（図内■周辺）、また甑などもある程度のまとまりが窺えそうである。これらの用途別の出土状況が何を意味するのか、ただちに明らかにすることはできな



第34図　長廻遺跡ＳＩ05遺構図（Ｓ＝1／60）

いが、一定の行為が現れていることは認めてよいように思う。なお、須恵器の蓋坏・坏身については整理・復元作業が容易であるにもかかわらず、完形に近い状況に復原できたものが少なく、如上の遺物とは廃棄の状況が異なっている可能性があることを指摘しておきたい。また、貯蔵具である須恵器甕片は図化できないものも含めて一切出土していない。

出土遺物（第37～41図）　須恵器については実測可能なもののほとんどすべて、土師器については比較的保存状況の良好なものについて図面を掲載した。１～８は須恵器蓋坏である。５・６は頂部にやや粗雑なヘラケズリを施すもの。肩部には沈線をめぐらし稜を表現する。６は内面にも段の退化した沈線を施す。大谷Ａ4～５類に該当する。１～３、７は稜の表現されず、口縁部の段の痕跡も失われているもの。４は肩部に沈線をめぐらすが、頂部はヘラケズリのちナデを施す。大谷Ａ６類。８は肩部に沈線２条をもつが、底平で口径のやや大きいもの（13.8cm）。頂部が残っていないが大谷Ａ４類に含まれるか。９～15は須恵器坏身である。いずれもかえりの高さは低く、12・14に粗雑なヘラケズリがみられる。大谷４期の所産であろう。

16は須恵器短頸壺、17は須恵器瑳片で、肩部に二重の波状文をめぐらす。大型品であり大谷１期に相当するか。18～24は須恵器低脚無蓋高坏である。いずれも坏部には沈線などがみられず、脚端部には内傾する面がしっかりと成形され、透かしは三角形２方向である。坏部には立ち上がりが直線的なもの（19・21・25）、丸く内湾していくもの（18・22・23）がある。大谷Ａ４類に含まれる。24は脚部が失われているが、口径が大きく（20.3cm）、しっかりとした三角形の透かしを３方向にもつ。坏部は屈曲が緩く、二段透かしをもつ長脚無蓋高坏で大谷Ｂ３類にあたる。

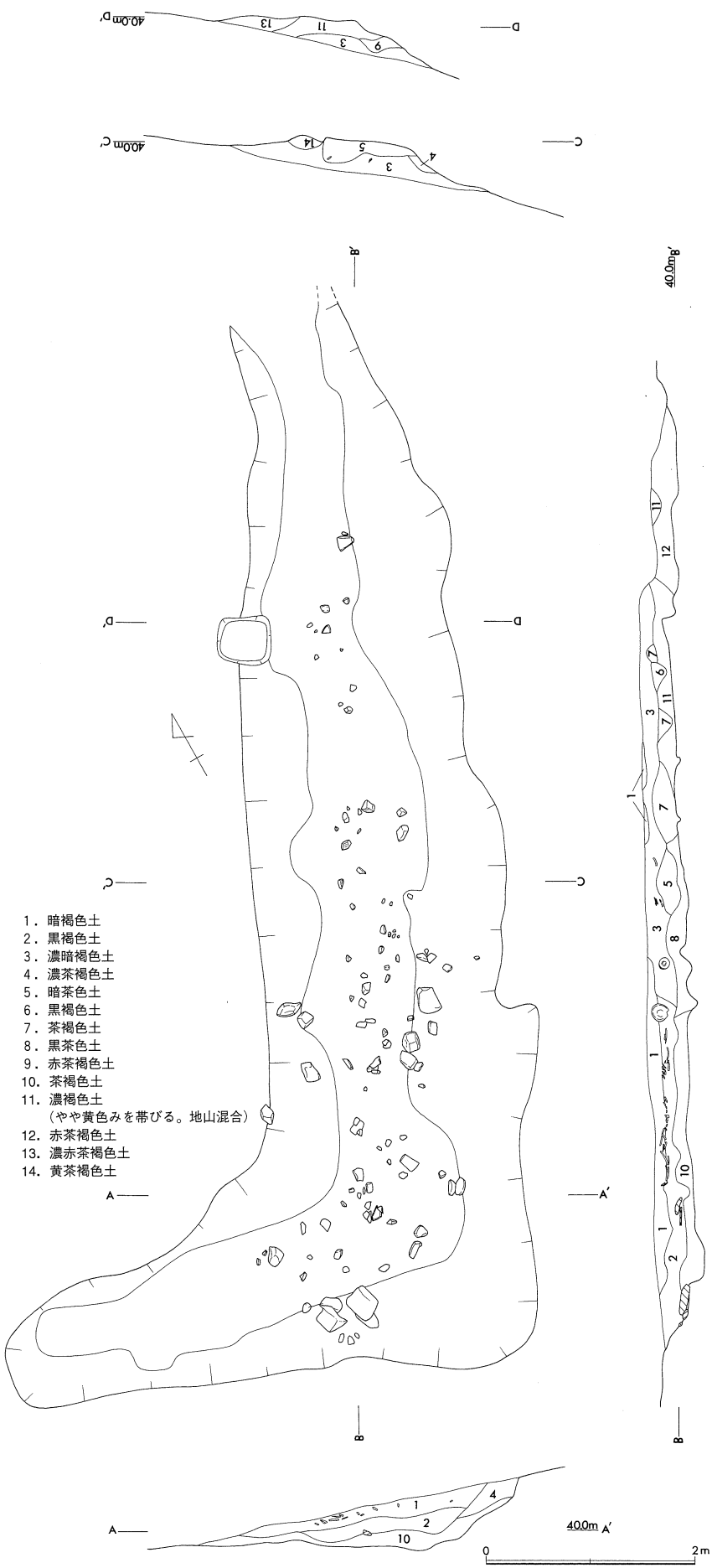
26～53は土師器甕である。26・28・29・32は、口縁部が体部の最大径とほぼ同じで、体部が球形

となるもの。頸部内面では口縁部と体部の間に明瞭な稜線をもっている。口縁部には比較的強いナデが施され、内面はヘラケズリ、外面はハケ調整を施す。27・30～39は口縁部に強いナデを施し、体部と口縁部の区別もはっきりした稜をもっているが、体部が口径を上回り、下部が残っているものはないものの、下膨れの体部をもつと推測されるものである。33は口縁部内面に、38は同外面にも部分的にハケを施す。40～46は先のグループと同様の下膨れの形態が想像されるが、体部と口縁部の区分が明瞭でなく、口縁部に向かってなだらかに外湾していくもの。口縁部のナデも余り強くない。47～53は体部が余り胴張らず、口縁部は急激に屈曲、直線的に外傾するもの。ただし、口縁部が水平方向に「字状に屈曲するには至っていない。口縁部付近のナデも丁寧なものが多い。52は一部口縁部内面にハケをもつ。

54～58は土師器高坏である。赤彩されているものが多く、54の外面、57の内面なども、出土状況からみて風雨を受けて激しく風化していると判断され、本来は赤彩されていた可能性がある。坏部はいずれも丸く内湾し、54はほんの少し端部を内傾させる。いずれも脚部は内面にケズリを施しており、55は内部まで胎土の充填していた筒状の脚部をえぐり取ったような状況を呈している。57の脚部には若干の段が見いだせる。59は段をもつ球状に復原できる土師器で、高坏・椀の体部を想定して図化したものであるが、正確な器種は不明である。60は内外面赤彩された土師器の坏である。底部はヘラケズリのちハケ、体部にはハケを施す。底は平らに近く、屈曲部から口縁部に向かって厚みを増す。61～68は甑である。61は底径8.1cmの小型のもので、外面は赤彩される。底部が破損しているものの、内面に外面の赤彩がはみ出て塗られていることから、底部が穿孔されていたことが明らかである。64・65は口径に比して高さのない類型で、口縁端部は水平に外反する。内面はヘラケズリ。67・68は接合しなかったが、あわせて１個体である可能性がある。67には口縁部に工具の木口の圧痕がみられ、68には底部付近に径1cm程度の穴が穿孔される。69～71は甑の把手である。簡単なハケを施す。72～77は土製支脚である。72は高さ13.5cm、73は同14.4cm、74は同14.5cmでいずれも完形近くに復原できた。二股突起で体部に穴があけられているが、73・74はかなり縦長の穴になる。75～77は同破片である。78～81は移動式竈で、78・79は庇部分にあたる。79で庇の出６cm。81はほぼ完形に復原できたもので、幅44cm、奥行き34.4cm、高さ34.9cmを測る。外面にハケを施すほか、焚き口部の右側の断面に、径0.8cm、深さ0.5cm程度の窪みをもつ。左側面が残っていないので、胎土に含まれた石などがとれた痕跡であることも否定できない。82・83は混入品と思われる土器である。82は退化した複合口縁の甕で、松山智弘氏による古墳時代前半の土師器編年のⅢ期のものである[*13]。83は甑形土器で、体部が大きく傾斜するもの。84は鎌である。刃部で幅2.4cm、装着部で幅3.5cmを測り、途中の破片を失うが刃部長20cm程度に復原できる。

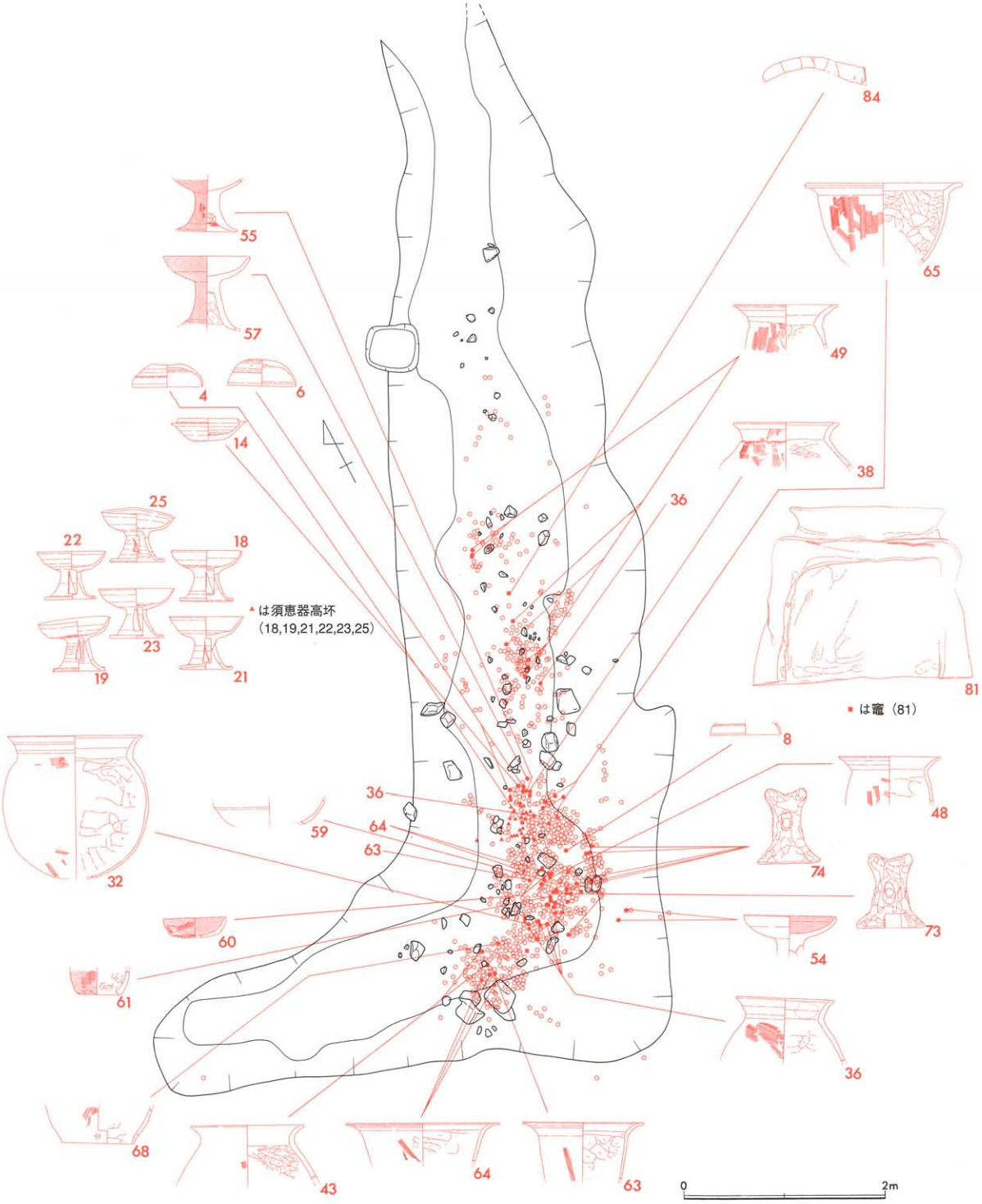
土師器高坏について　54～58の土師器高坏は、いずれも坏部の口径が大きく（17.0～18.6cm）浅く、須恵器無蓋高坏と類似することが特徴である。このような高坏の類似するものとして、古志本郷遺跡ＳＤ18[*14]、角田遺跡B地点[*15]、壱丁田遺跡土器群１[*16]の出土例がある。いずれも須恵器と出土しているが、一括性の低い出土状況であった。本報告によって、これらの土師器高坏は少なくとも大谷４～５期に存在することが確認された。

古墳時代の土師器高坏については、前期～中期にかけてのものについて松山智弘氏によって考察がおこなわれている[*17]。松山氏が分類するＡ～Ｃ類のうち、最も出現時期が遅く（初期須恵器の登場とともに現れるとされる）、本遺跡の土師器高坏に時期的に近いＣ類との関係が問題になろう。



第35図　長廻遺跡加工段01遺構図（S＝1／60）

しかし、本遺跡の土師器高坏と松山C類は脚部と坏部を別に成形する点こそ共通するものの、坏部が低平（本遺跡例）－丸碗状を呈する（松山C類）、脚が高く底径も大きい（本遺跡例）－脚は短い（松山C類）などプロポーションには共通しない点が多い[*18]。さらに松山C類の高坏の存続時期を見ると、三田谷I遺跡のSI06・08・17からは[*19]、近畿陶邑のTK208、TK23・47平行の須恵器[*20]とともに出土している。また、松江市八色谷4号墳周溝からはMT15前後とされる須恵器子持瑳や、端部に段をもつ瑳とともに松山C類の系譜を引くと考えられる土師器高坏が出土している[*21]。さらに安来市石田遺跡SR01出土例は、須恵器の大谷3～4期前後に属すると報告されており[*22]、出雲地域東部では、ほぼ本遺跡例に平行して存在していた可能性が認められる。現時点で知ることのできるこれらの土師器高坏の諸様相を勘案すれば、54～58の土師器高坏は、古墳時代中期から続く松山C類の土師器高坏とは別系統の類型の高坏である可能性が浮か

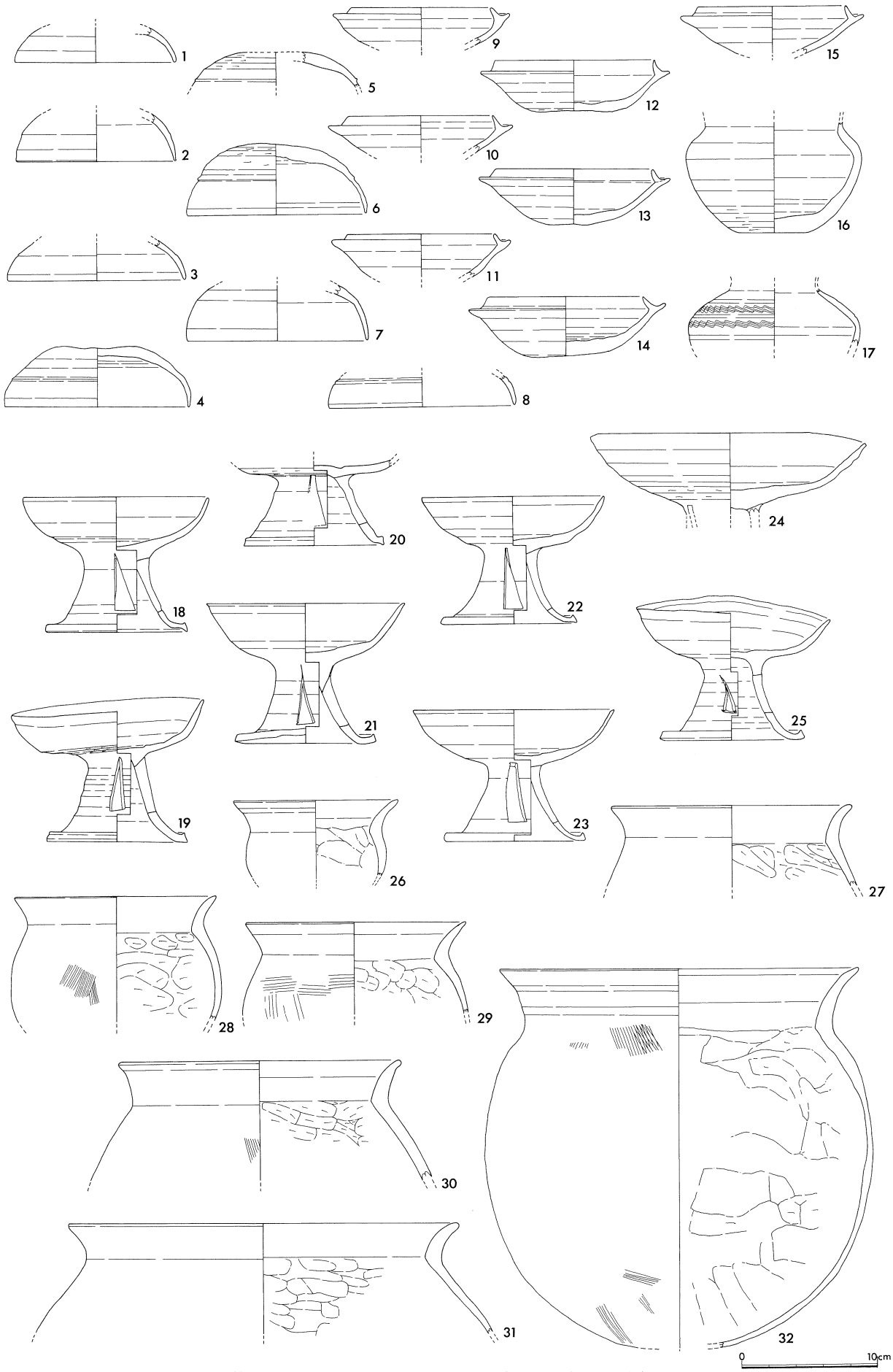


第36図　長廻遺跡加工段01遺物出土状況図（遺構S＝1／60・遺物S＝1／12）

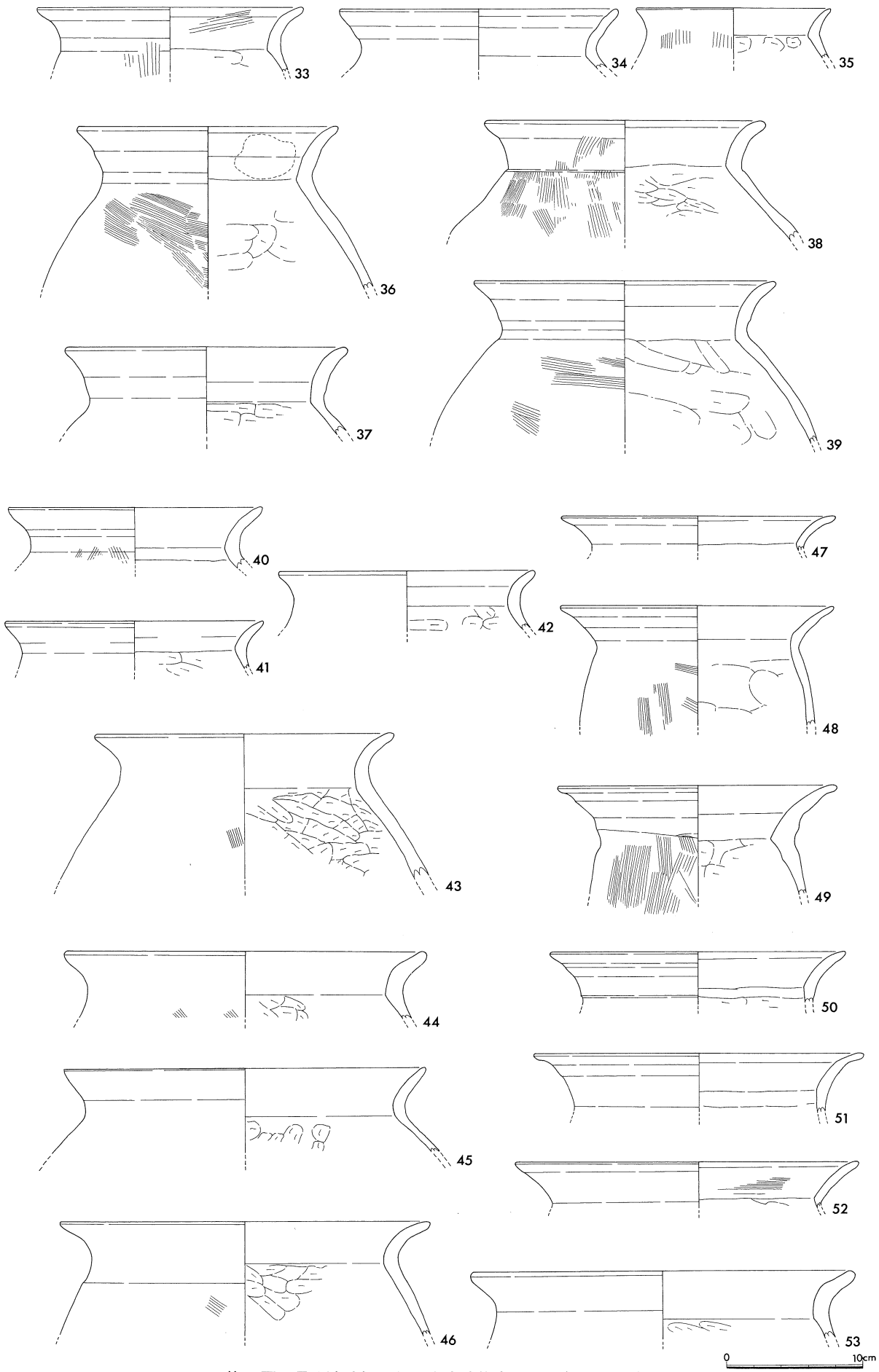
び上がってこよう[*23]。

現在のところ、本遺跡例と同様の土師器高坏は出雲市周辺での出土例が多い。今後、両者の中間的な時期の出土例の増加などによって、当該期の土師器高坏の時期差や地域差を含めた存在形態が明らかになっていくことを期待したい。

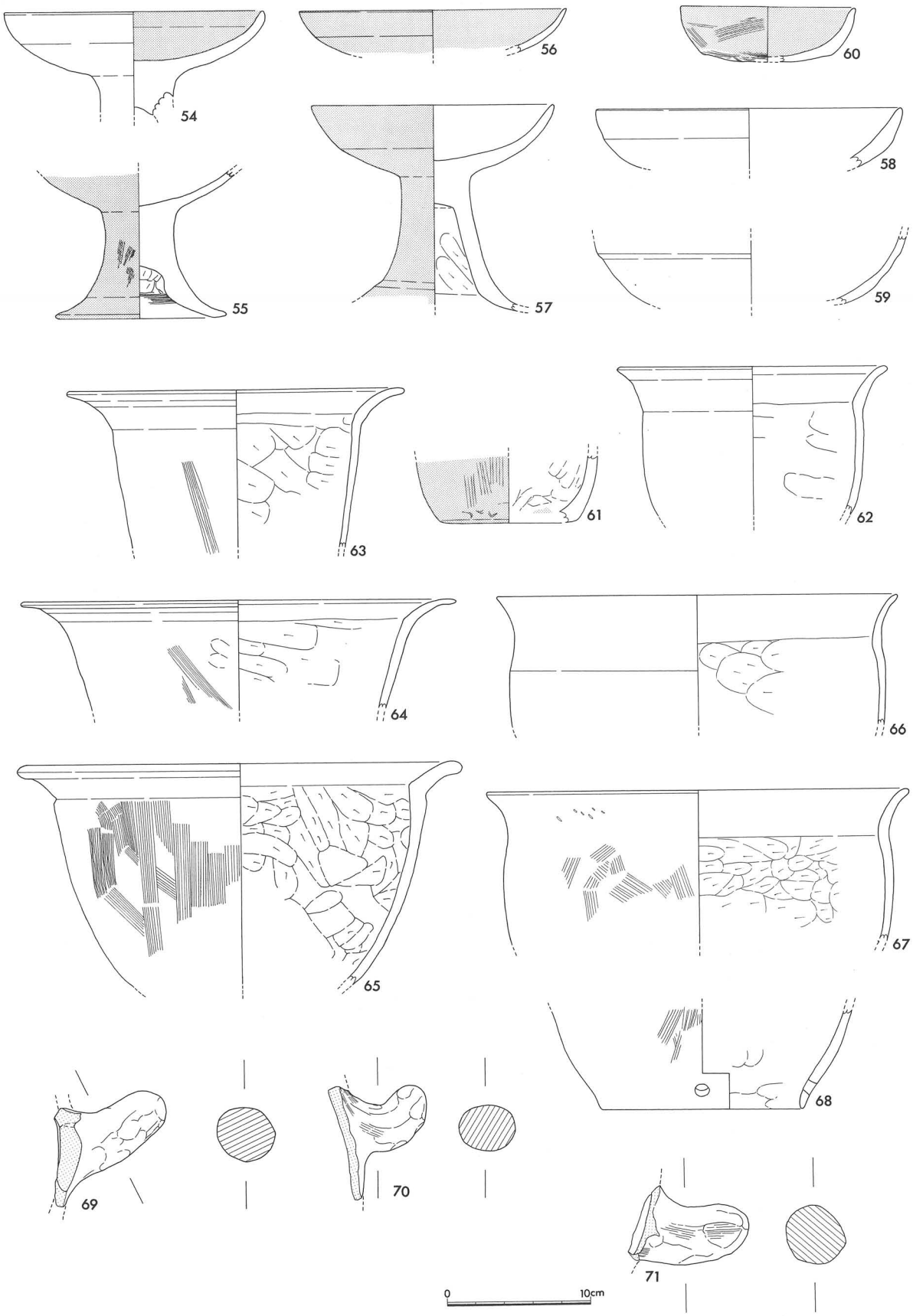
遺物の時期　須恵器は多くが大谷４期に属しているが、最も新しいものでは蓋坏の大谷Ａ６類、長脚無蓋高坏B３類が含まれている。総体として大谷４～５期、７世紀前半がこれら遺物が廃棄された時代とみられる。当該期の比較的良好な一括資料となろう。



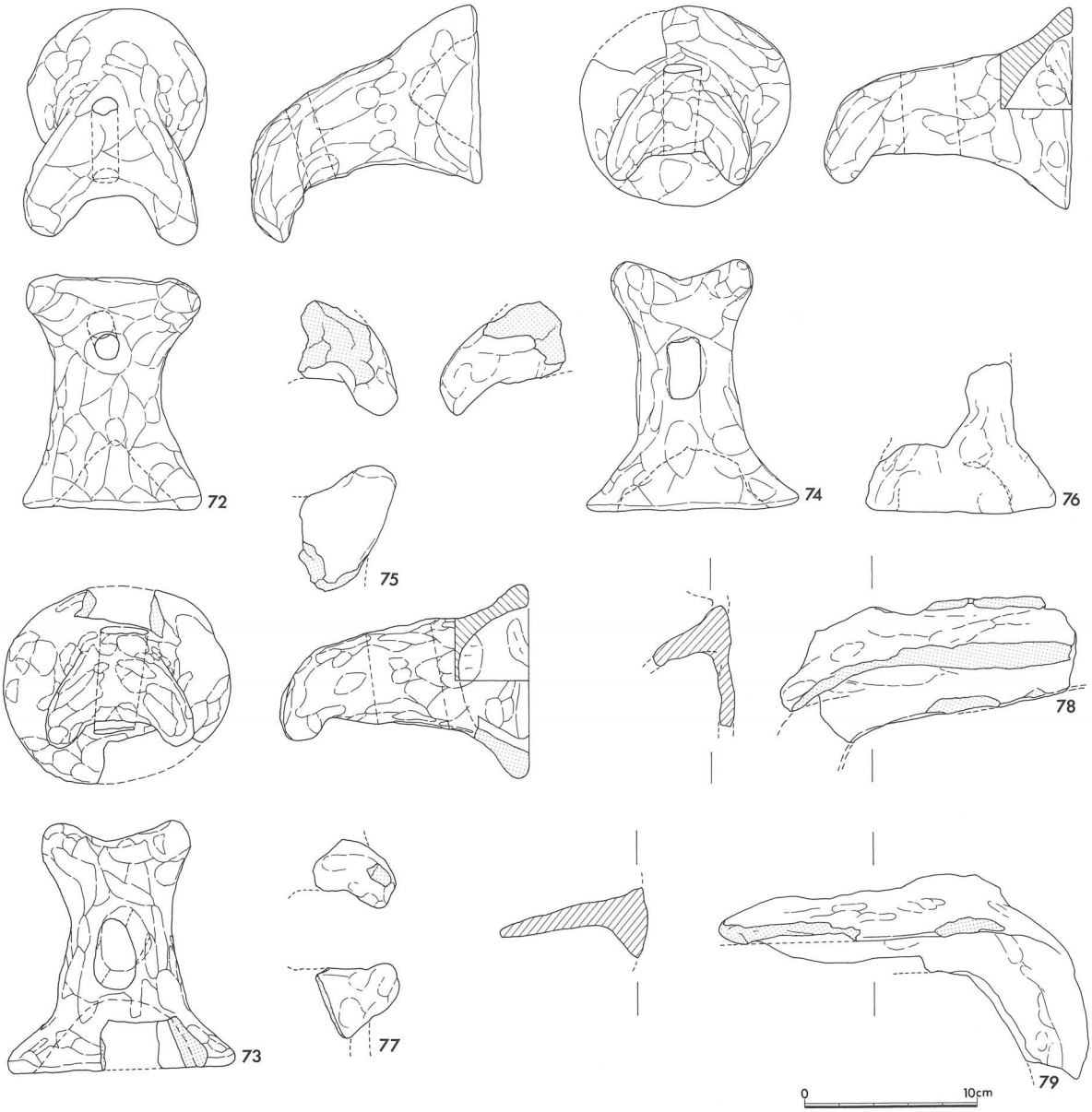
第37図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図1（S＝1／4）



第38図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図2（S＝1／4）



第39図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図3（S＝1／4）



第40図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図4（S＝1／4）

加工段02（第42図）

規模・形態　調査区東辺やや南寄、コンクリートブロックに囲まれた墓地の南側位置する。東側に幅25cm程度の段をもって築かれており、平坦部にはピットが２穴確認される。なお、この加工段は墓地の北側にも続いている可能性があるが、北側は近現代の墓坑による攪乱がひどく、遺構として捉えることはできなかった（出土遺物については第49図に掲載)。

覆土　黒褐色土が堆積していた。

出土遺物（第42図）　１・２は須恵器坏身である。底部の調整は不明であるが、かえりが低いことなどから大谷Ａ６・７類に該当する。

時期・性格　調査時は、加工段02について竪穴建物などを想定し、遺物についても混入品などの可能性を考えていたが、墓地跡北側の黒褐色土層からの出土品と照らし合わせると、古墳時代後期の加工段とみるのがよい。

第41図　長廻遺跡加工段01出土遺物実測図5（S＝1／4）

加工段03（第43図）

規模・形態　調査区南辺西よりに位置する。長さ7.3mにわたってほぼ等高線に添った形で幅約1.0mの加工段がつくられていた。現地形では急斜面への傾斜変換点付近にあり、遺存状況はよくない。中央部東側には長2.0m、幅1.3mの張り出し部があるが、この部分は掘り込みが不十分で、内部は平坦面になっていない。

覆土　暗褐色土が堆積していた。

出土遺物（第43図）　1～3は弥生土器の甕である。1は口縁端部が内傾し、上側に向かって拡張され、凹線が施される。内面の調整は不明である。2・3は底部。3には上方向へのヘラケズリが

確認できる。

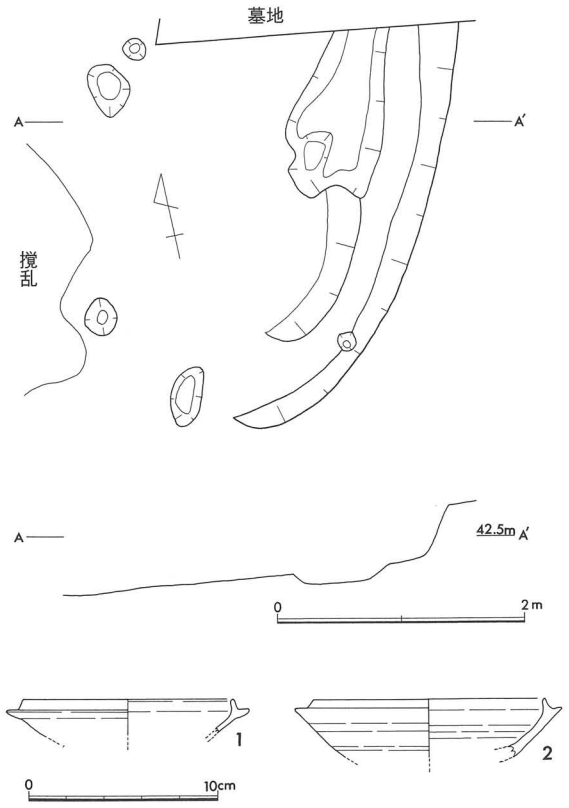
時期　遺物は風化が激しく、不明な点もあるが、おおむね松本Ｖ－１様式、弥生時代後期初頭に含まれる。

加工段04（第43図）

規模・形態　調査区南辺西よりに位置する。加工段03のさらに南側に位置し、等高線に寄り添うかたちで3.5mにわたって、断続的に続く。深さは深いところで20cm程度である。

覆土　黄茶褐色土が堆積する。

時期　出土遺物ないが、加工段03に覆土などにているところから、同時期の遺構と推察される。



第42図　長廻遺跡加工段02
遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

加工段05（第44図）

規模・形態　調査区中央北寄りに位置する。遺構西側は、近現代の段状の加工によって大きく削られており、現状では、南北3m、東西1mの楕円形の加工段となっている。中央には径40cm、深さ80cmのピットが設けられている。

覆土　茶褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第44図）　１～５はいずれも弥生土器甕である。１は口縁端部に２条の凹線をめぐらす。上側に向かって拡張し、ヘラケズリは頸部まで達している。上述のピット内から出土。２は口縁部の拡張も小さく、薄い作りである。二条の凹線をめぐらす。３は風化がひどく、調整不明である。４・５は底部で、５には外面のハケが残る。

時期・性格　時期は出土遺物から松本Ⅳ－２～Ｖ－１様式、弥生時代中期末～後期初頭と推測される。保存状況は不良であるが、竪穴建物であろうか。

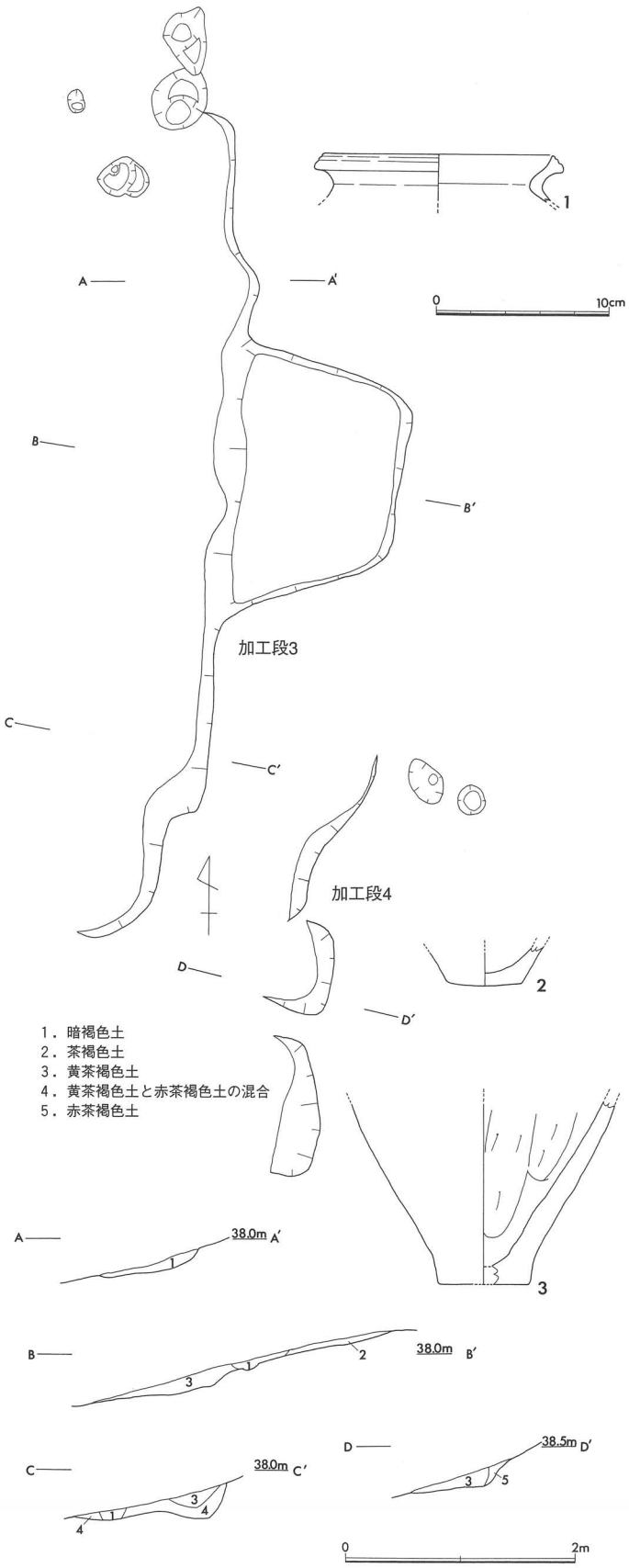
Ｃ．土坑

ＳＫ01（第45図）

規模・構造　調査区南側中央、ＳＤ03上に位置する。長径1.0m、短径0.75m、深さ0.2mを測る。暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物（第45図―1）　弥生土器鉢で、１個体の1/3程度が出土した。風化によって細かい調整は不明であるが、器壁は厚く、松本Ｖ－1様式のものか。

時期・性格　遺物から弥生時代後期初頭と考えられる。性格は不明である。



第43図　長廻遺跡加工段03・04
遺構・出土遺物実測図（遺構S＝1／60・遺物S＝1／4）

ＳＫ02（第45図）

規模・構造　調査区南辺中央のＳＤ03北側に位置する。長径75cm、短径50cmを測り、二段掘り状を呈す。

出土遺物（第45図―2）　土師器坏である。逆に伏せた状況で完形で出土しており、外面は風化が激しく調整等が不明であるが、内面には赤彩が確認されている。胎土自体も赤褐色を呈す。口縁部には須恵器坏身の立ち上がり部を思わせる段が設けられており、須恵器模倣の土師器であることを推察させる。

時期・性格　前述の土師器にはあまり類例がなく、断定はできない。須恵器の形態を模倣していると仮定した場合、底部が広く平らであること、直立するがあまり高くない立ち上がり等が挙げられ、近畿陶邑のＴＫ208の立ち上がりがやや内傾しそれほど大きくないものや、ＴＫ23の底の平らなものとの類似点が多い[*24]。なお、三田谷Ｉ遺跡ＳＩ08・16からもＴＫ23・47に平行する須恵器とともに相当する土師器坏が出土しており、ＳＩ08出土例には立ち上がりを意識して段を設けたものもある[*25]。しかしこれらは、いずれも丸底でプロポーションはかなり異なっている[*26]。プロポーションという点では、初期須恵器を供伴する松江市布敷遺跡中層からの出土例との類似性が見いだせよう[*27]。土器については一応、５世紀代と推定したい。遺構の性格は不明である。

ＳＫ03（第45図）

規模・構造　調査区東南に位置する。長径1.3m、幅0.5mを測る。

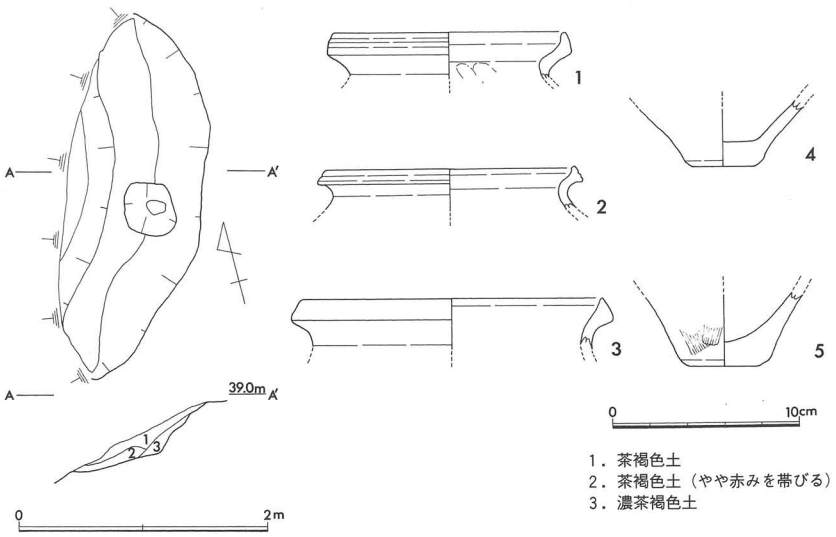
出土遺物（第45図―3）　須恵器蓋坏で、現存する部分はナデが残り、ヘラケズリ

はみられない。大谷A7類であろうか。

時期・性格　時期は7世紀前半になろうか。性格は不明である。

ＳＫ04（第45図）

規模・構造　調査区中央西よりに位置する。東西2.3m、南北2.0m前後の長方形の堀方に、方50cmの突出部が西側にとりつく。



第44図　長廻遺跡加工段05
遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

時期・性格　覆土は攪乱を受けた感じであり、近現代の遺構である可能性もある。性格は不明。

ＳＫ05（第45図）

規模・構造　調査区南端中央に位置する。ＳＤ03に乗った状態で検出した。長径2.0m、短径1.3mを測る。

土層堆積状況　検出面からの深さは浅かったものの、４層を検出した。第１・２層はいずれも、炭化物を多量に含んでいる。第４層は焼土である。

時期・性格　遺構の時期は出土遺物などないため不明であるが、後述するＳＤ03覆土の上に乗っていることから、少なくとも弥生後期前半以降と考えられる。性格については炭化物層と焼土の存在から鍛冶炉の可能性がある。

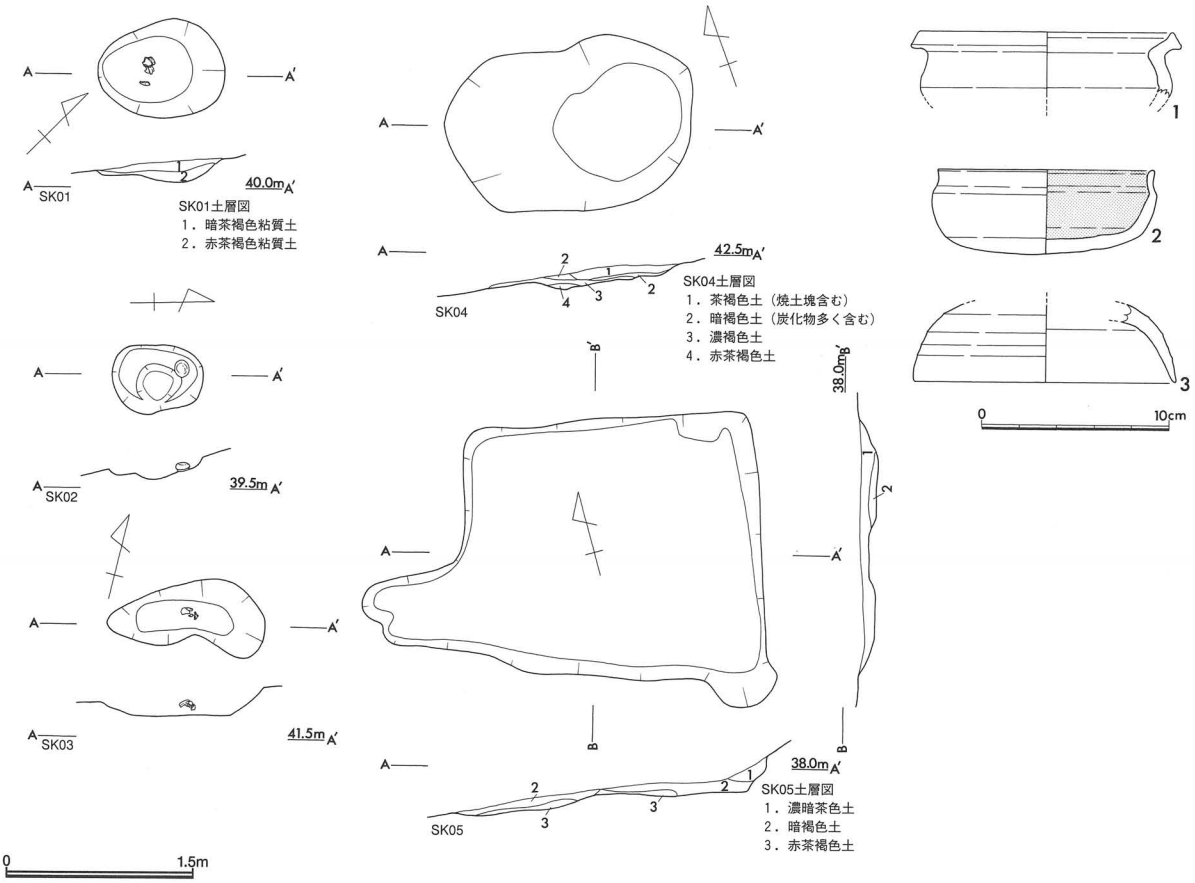
Ｄ．溝

ＳＤ01（第46図）

規模　調査区東側に位置する。近現代の墓坑を取り囲むように［状を呈しており、長さは10.6m幅0.6mを測る。ＳＩ03を切る。底部の標高は41.4m前後である。調査前に溝は確認できなかった。覆土砂質の茶褐色土が堆積する。

出土遺物（第46図）　１は乳灰色を呈する釉のかかった磁器の猪口である。２は土師質土器の皿で、底部はヘラケズリを施すものである。

時期・性格　出土遺物は１がおおむね18世紀以降のもので、２の土師質土器の皿も同じ時期のものと考えて矛盾はない。底部ヘラケズリの技法は、中世後期のものであるが古志本郷遺跡で確認されており[*28]、姫原西遺跡でも底部の糸切り痕跡を消すようなナデの施されたものがある[*29]。また、本遺跡のⅡ区調査区出土例（第49図－19）には回転糸切後ヘラケズリが確認される。出雲市周辺では回転糸切と平行して存在したのであろうか。墓坑を取り囲んでおり墓地を区画する溝と思われる。



第45図　長廻遺跡SK01～05遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

ＳＤ02（第47図）

規模・構造　調査区北端に位置する。ちょうど尾根の先端を分断する形で掘削されており、調査区外の東北側に延びている。規模は完掘状況、すなわち最大の部分で上幅2.0m、下幅0.4m、深さは0.9mを測り、断面は逆台形をなす。長さは東西に4.3mを検出した。西側にいくに従って検出面からみて次第に浅くなり、消えてしまっている。

土層堆積状況　２～11層までが溝の堆積土である。断面をみての通り、３回の掘り返しを確認でき（上から２・３層、４～６層、７・８層、９～11層）、最後には規模の縮小した断面V字の溝となったとみられる。１回目の掘り返し最下層第８層には、地山の流出した赤褐色土の堆積もみられる。

出土遺物（第47図）　遺物はいずれも第７層以下から出土した。１・２は土師器甕の口縁部である。複合口縁をもつが、突出部は鈍く、幅も狭い。３は平底の土器底部で茶褐色の胎土を有する。４～９は高坏片である。口縁部の残る４・７・９はいずれも丸く立ち上がり、途中の段をもたない松山智弘氏の分類による高坏Ａに該当し[*30]、なかでも７は端部を外に引き出す形態をしめし大角山遺跡ＳＩ01出土例に似る[*31]。10のみ須恵器であり、提瓶・短頸壺などの口縁部とみられる。10についても取り上げは溝の床面近くであった。

時期・性格　遺構の時期は、出土遺物には松山編年のⅡ期古段階、古墳時代前期後半の遺物が多いが、須恵器もあり、今後本年度調査区東側の調査の進展を待って確定されることを期待したい。

性格についても明らかではないが、３回の掘り返しが認められることから、ある程度継続的に利用されたものと推測される。

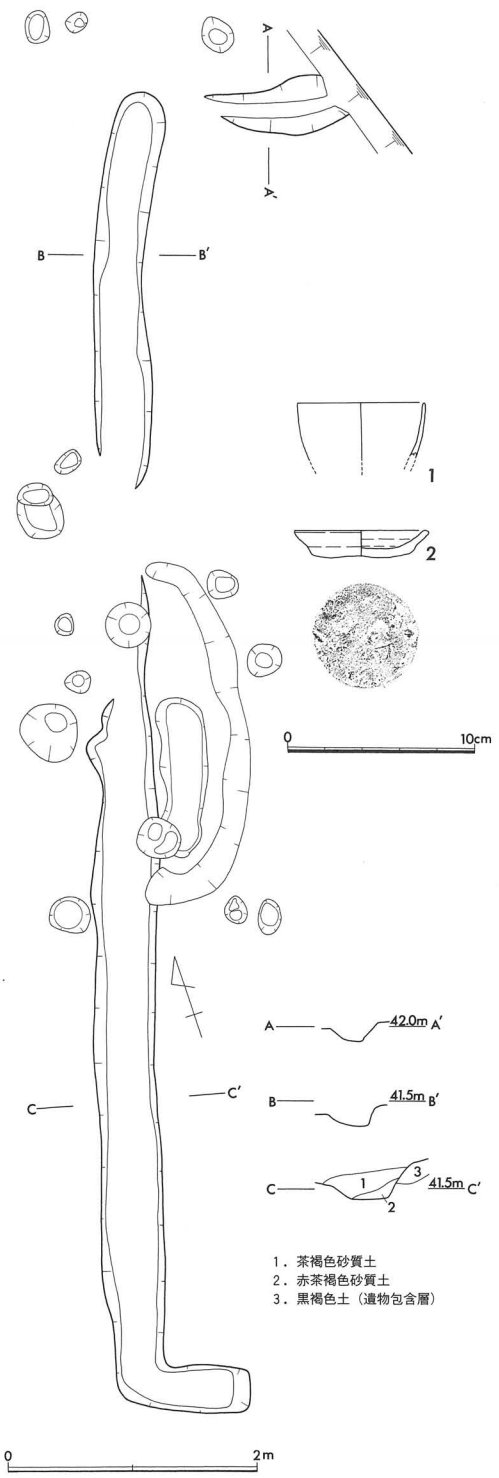
ＳＤ03（第48図）

形態・規模　調査区南端中央に位置する。斜面に円弧を描くように作られており東南の側が高く（底部標高40.1m）、西北側が低い（同39.7m）。規模は上幅1.8m、下幅0.8m程度の浅い台形をなす。

覆土褐色系の土が堆積していたが、どの層もよくしまっており、一見すると地山と類似していた。中には若干の拳大の石が含まれていた。

出土遺物（第48図）　いずれも弥生土器である。１は壺口縁部で、内傾し凹線を施す複合口縁分と、頸部には上から５条のヘラ書き沈線・ヘラ状工具による羽状紋、さらに３条のヘラ書き沈線が施され、その下端は欠損している。出雲地域ではあまりみられない文様構成で、波来浜遺跡出土の壺に同様の文様構成をもつものがあり[*32]、松本岩雄氏は石見Ｖ－１様式として分類している。２～５はいずれも甕口縁部で凹線をめぐらす。２・３は口縁部を上に拡張しながら内傾させるもので器壁も厚い。４は口縁部が直立気味のもので、体部に羽状文をもつ。５はやや古い様相が見え、拡張は上下におこなわれ器壁も薄い。６・７は甕・壺の平底の底部で、内面にはヘラケズリが施される。

時期・性格　出土遺物は、１が松本石見Ｖ－１様式、２～５が同出雲・隠岐のＶ－１様式に該当し、弥生時代後期初頭にあたる。溝は斜面に円弧を描く特殊なもので、弧の内側にも現状では明確な遺構・平坦面などを確認できず、性格は不明である。12年度の調査が期待される。

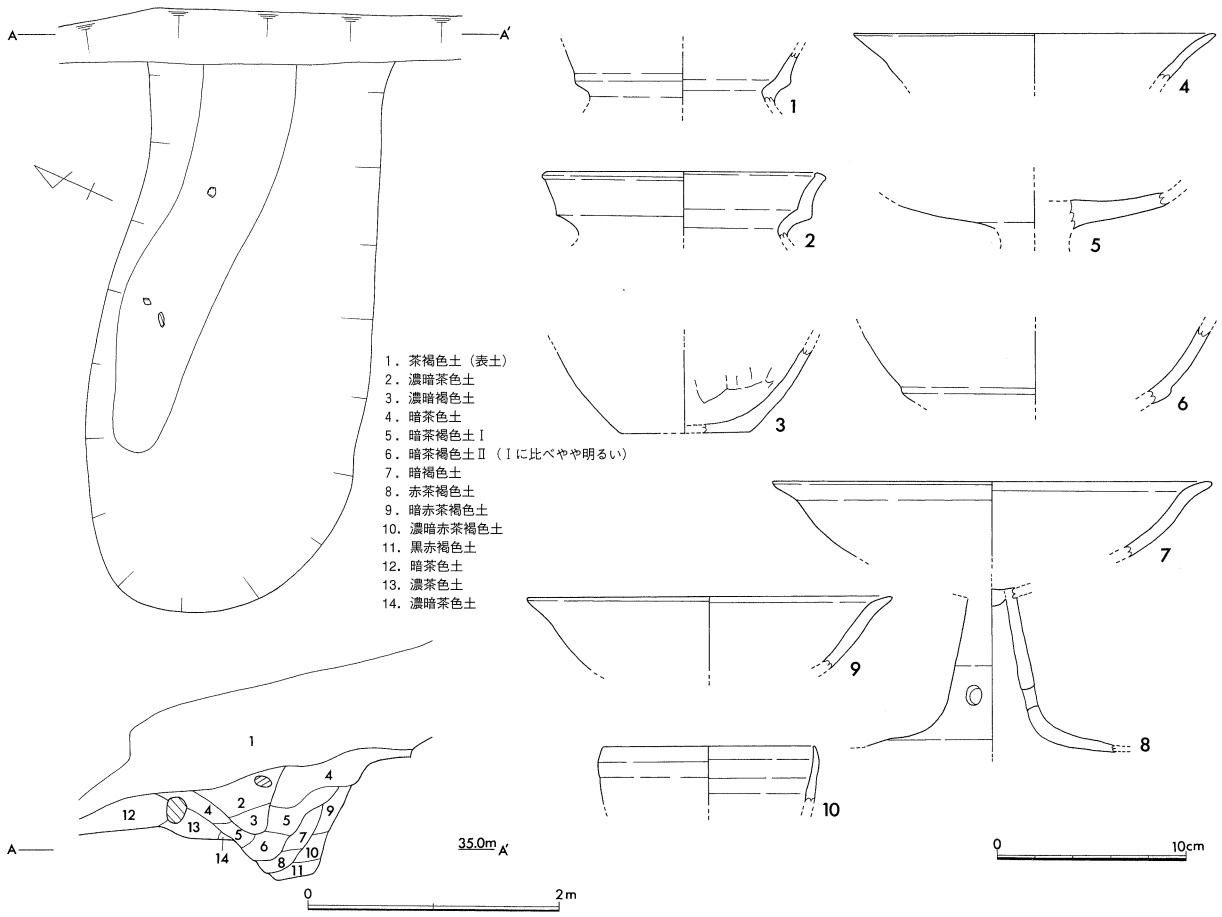


第46図　長廻遺跡ＳＤ01
遺構・出土遺物実測図
（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

Ⅱ区調査区出土遺物

Ⅱ区東側黒色土出土遺物（第49図）

１～10はⅡ区の東側黒色土層の出土遺物である。この黒色土層は、調査区中央東辺の墓地北側に位置する。この場所には近世～現代にかけての墓坑が多数掘り込まれていたが、その下に黒色土か



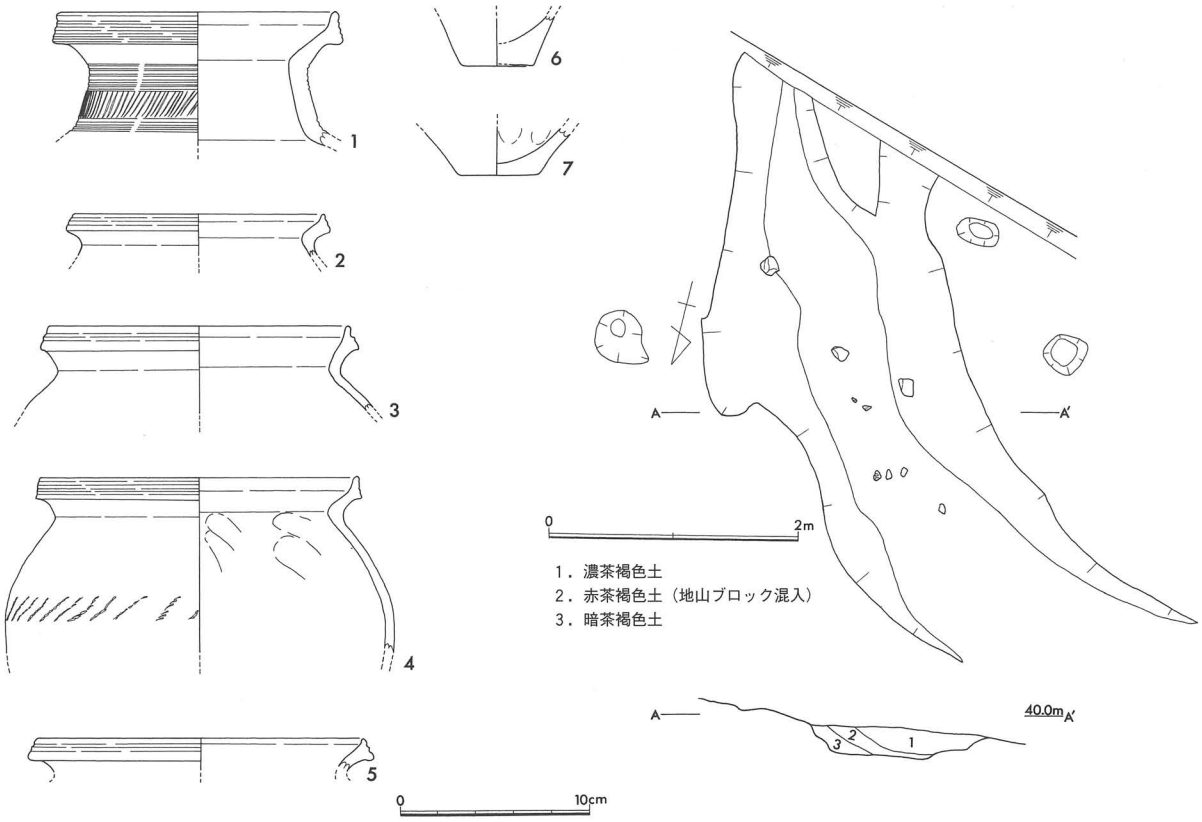
第47図　長廻遺跡ＳＤ02遺構・出土遺物実測図（遺構Ｓ＝1／60・遺物Ｓ＝1／4）

らなる良好な遺物包含層が存在した。先に述べた加工段０２はその南辺にあたる。

１・２は弥生土器である。１は鉢。２は口縁端部を下側に拡張している広口壺の口縁分である。いずれもやや保存状態が悪く、口縁分に凹線が施されていた可能性もある。１が松本Ｖ－１様式、２が同Ⅳ－２様式に属する。３・４は手捏土器である。５～９は土師器甕片である。いずれも外面にハケを施し、内面はケズリを施す。８は口縁分が水平方向に外反するもの。10は土製支脚の脚部で、外面に一部ハケを施す。３～10は古墳時代後期のものとなろう。したがって黒色土層の時期は古墳時代後期と考えられる。

その他の調査区出土遺物（第49・50図）

第49図11～22は上述以外の調査区各所からの出土遺物である。11～13は弥生土器である。１は厚めで内傾する口縁部で凹線を施す。12は中間が失われているが、高さ30cmほどに復原される甕である。外面と内面の頸部にはハケを施す。頸部内面より下はケズリが施される。13は甕底部。これらのうち12は松本Ⅳ－２様式、すなわち弥生中期末の時代観が与えられる。14は鼓形器台である。15は土師器の甑把手、16・17は土師器高坏の脚部で、いずれも碗形の坏部がそのまま剥がれた状況を示している。18・19は土師質土器の皿で、18は底部回転糸切、19は底部回転糸切りの後ヘラケズリするものである。先にＳＤD01出土遺物の項で述べたように、出雲市周辺の土師質土器には底部をヘラケズリするものがみられ、19もそれらに含まれよう。20は黒曜石の石鏃で、重さは0.34g。21

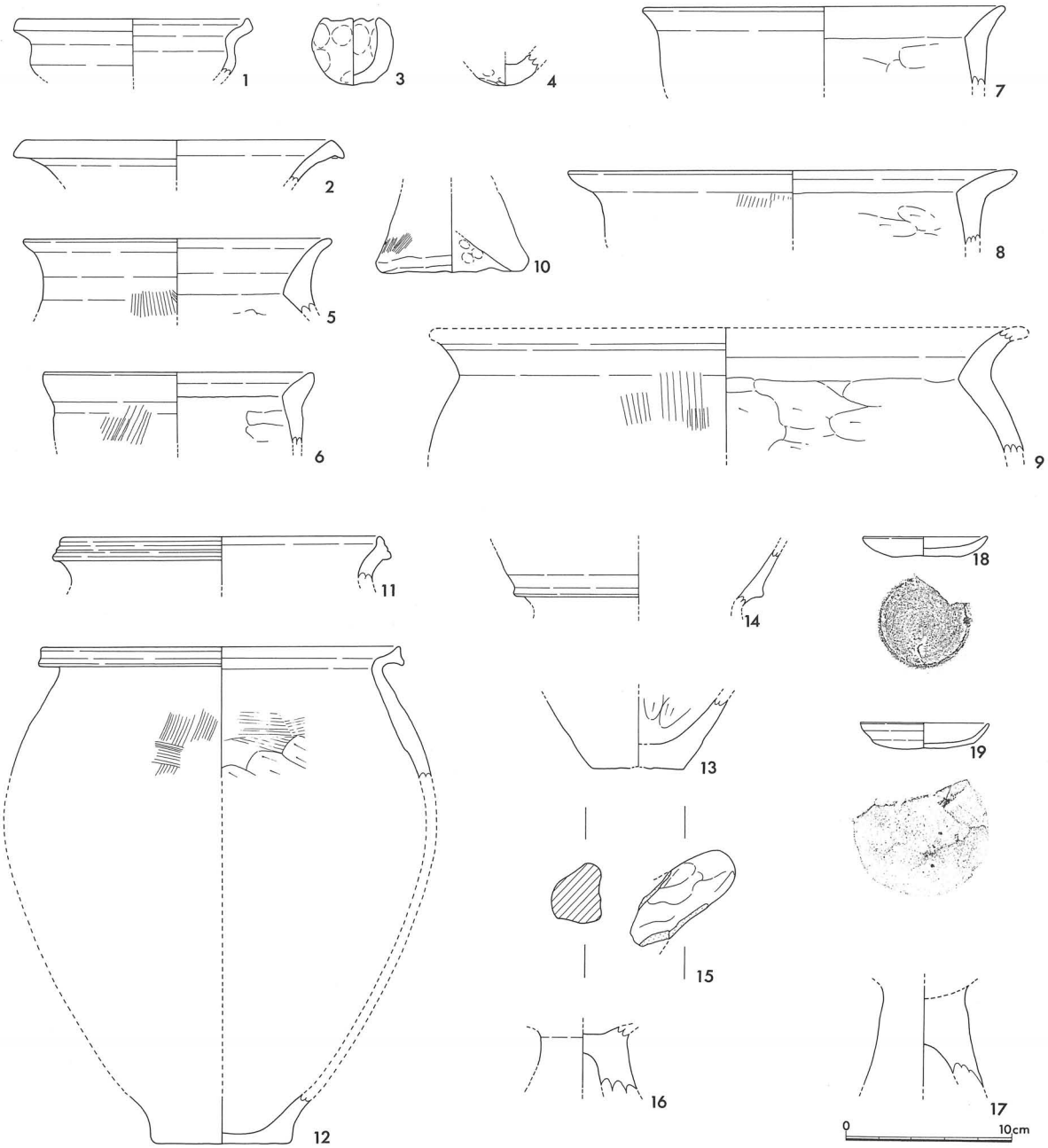


第48図　長廻遺跡SD03遺構・出土遺物実測図（遺構S＝1／60・S＝1／4）

はメノウ製勾玉で、穿孔は片側からおこなわれている。

出土銅印について　22は銅印である。ＳＩ05で述べたように、22はＳＩ05の表土中から検出された。結論から先に述べると、近世以降に作成された、古代印を模した銅印、擬古印であると考えられる。なお、現地説明会資料では古代印との報告を行っておりこの場を借りて訂正するとともに、資料解釈の誤りについてお詫びしたい。大きさは、下端を欠損しているとみられるが現存部分で幅2.7cm、長さ（現存長）1.8cm、厚さ（紐の部分）1.0cmを測り、重量は11gである。形状については、まず背面に中央が盛り上がっており、なおかつ断面に下方が方形をなす差し込み穴状のものがみえることから、この部分に紐があったか、あるいは紐が差し込まれていたものと推測される。この前提に立つと、印の紐は一般に印の中央に位置することから、現在の破損部分が印の中央にあたるとみることができ、長さ4.0cm程度の縦長長方形の印が復原できる。一方、印面の側をみると、現状では高さ1.3cm程度の「中」字状の印面がみえ、文字「中」とみればタテ２文字の１文字分とみることができる。「中」字状の印面を旁とみる場合、下側が同程度の大きさとなるが、その場合には「忠」「虫」などの文字１文字となろう。ただし、このような推定が成り立つものの古代印（この場合模造の対象となったという意味で）には、印面の縦横比が大きく異なるものは殆どなく[*33]、先の推定と異なりあるいは紐の位置の寄った正方形に近い形状であったのかもしれない。

銅印の特徴　さらに形状の特徴をみていくと、印面部が厚さ1㎜程度薄いこと、紐が貧弱なこと、が挙げられる。これらの特徴は近世以降の製作として知られる[*34]、愛知県豊田市保見町自治会蔵



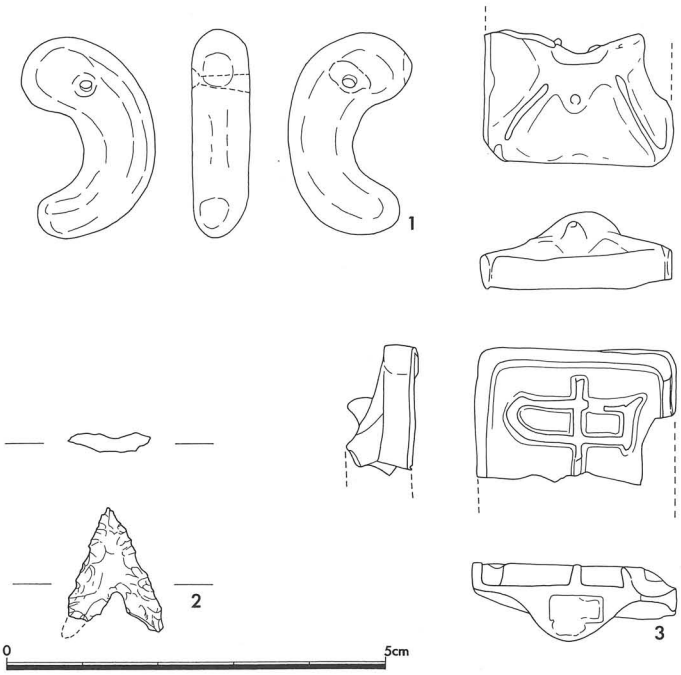
第49図　長廻遺跡Ⅱ区調査区出土遺物実測図（S＝1／4）

「揖保郷印」[*35]や、「内宮政印」[*36]にみえる。長廻遺跡出土銅印の背面は印面の厚さが薄く稜線が浮き出た形状をしているが、これは特に「内宮政印」と類似する。なお、背面には突起状の部分があるが、これについては類例がない。一方、外枠の郭線が中の文字の字画線と接しないこと、印面の掘りが2.5㎜と深いこと、字画の太さが細く同じ幅で底部に至る点などは古代印の印面の特徴を示す。

銅印の製作時期　さて、以上に述べてきた特徴からは、古代印的な要素と近世の擬古印的な要素がともに見られる。ただし、現在知られている確実な古代印で同様の紐の形態を持つものはみえず、一方、擬古印の中には紐の形態が異なるが印面について古代印の特徴を比較的正確に写したものが存在する[*37]。さらに、表土からの出土という出土状況からすると、積極的に古代印とすることはできず、近世以降の擬古印と見ることが妥当となる。以上が遺物についての考察であるが、本書第5章に示した永嶋正春氏の自然科学的分析の結果も、素材や密度から擬古印との類似性を指摘するの

で、総体としては印面について古代印の特徴をよく写した擬古印と見るのがよい。

実測図非掲載の調査区出土遺物　この他に調査区中から黒曜石片が発見されている。



第50図　長廻遺跡Ⅱ区調査区出土遺物実測図（S＝1／1）

＊1門脇俊彦「元権現山横穴群」『出雲・上塩冶を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会1980年、池田満雄「大津町上来原の横穴」『出雲市文化財調査報告』1　1956年。

＊2平石充他『古志本郷遺跡Ⅰ』島根県教育委員会1999年。土師質土器のⅣ～Ⅴ期の土器に類似する。

＊3足立克己他『姫原西遺跡』島根県教育委員会1999年。C区2・3号古墓出土の土器が類似し16世紀の年代観を与えられている。

＊4間野大丞他『藏小路遺跡』島根県教育委員会1999年、B2区の墓出土資料。15世紀後半～16世紀の年代が与えられている。

＊5八峠興氏も、主に松江市周辺出土の低平で口縁に向かって大きく開く土師質の皿について、中世末～近世はじめとみている。「山陰における中世土器の変遷について」『中世土器の基礎研究』Ⅷ1998年。

＊6勝部智明氏の教示による。

＊7大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11　1994年。

＊84本の主柱穴をもつものでは、弥生中期～弥生後期初頭の円形竪穴建物の中に同様の対向する柱ごとに大きさが異なっているものがみられる（古志本郷遺跡SⅠ06・07。前掲註1文献参照）。

＊9赤澤秀則他『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会1992年。以下、草田編年は本論による。

＊10松山智弘「小谷式再検討ー出雲平野における新資料からー」『島根考古学会誌』17　2000年。

＊11松山智弘前掲註10。大木式・小谷式の内容や近畿地方の土器との平行関係は、すべて本論に従う。

＊12松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年山陰・山陽編』木耳社1992年。

＊13松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』8　1991年。

＊14前掲註1文献。

＊15岸道三他『壱丁田遺跡』出雲市教育委員会1998年。

＊16川上稔・岸道三他『出雲市埋蔵文化財調査報告書第5集』出雲市教育委員会1995年。

＊17松山智弘前掲註13文献。以下、本項で使用する松山○類は、すべてこの論文の分類に依拠する。

＊18脚が筒状を呈するか(松山C類)、棒状を呈するか(本遺跡例)も異なるが、古志本郷遺跡出土例などは筒状であり、これらの土師器高坏についてはなお詳細な分類が必要になろう。

＊19今岡一三他『三田谷Ⅰ遺跡Vol.1』島根県教育委員会1999年。

＊20田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966年。以後、陶邑との平行関係は全て本論に従う。

＊21柳浦俊一・守岡正司『八色谷古墳群』島根県教育委員会1993年。

＊22池淵俊一他『石田遺跡Ⅲ』島根県教育委員会1998年。
＊23松江市堤廻遺跡ＳＩ13出土例（ＴＫ23～47平行）、勝負遺跡・布敷遺跡中層などに、Ｃ類で低平な坏部や比較的長い脚を持つ高坏がみられる（今岡一三他『堤廻遺跡』〔松江市教育委員会1986年〕、広江耕史他『一般国道９号松江道路建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ（勝負遺跡）』〔島根県教育委員会　1992年〕、板垣旭・桑原真治・広江耕史『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（布敷遺跡）』〔島根県教育委員会1989年〕）。接続法は松山智弘氏の接続法βで(前掲註12)、東出雲町渋山池遺跡ＳＢ09土例と共通し（椿真治他『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』島根県教育委員会1997年）、ある時期まで連続する可能性もあるが、いずれも本遺跡例とは接続法が異なる。また、土師器高坏が大量に出土した西ノ島町兵庫遺跡出土例（ＴＫ43～209平行の須恵器が出土）は坏部が強く丸碗状を呈す典型的な松山Ｃ類で(柚原恒平『兵庫遺跡第２集』西ノ島町教育委員会1996年)、本遺跡例とは全く異なる。隠岐では松山Ｃ類が６世紀後半まで残る模様である。
＊24前掲註20のＴＫ208の坏Ｃ、ＴＫ23の坏Ａ。
＊25前掲註19文献第28図8・14・15等。
＊26西ノ島町兵庫遺跡にも同類がみられるが（註23参照）、三田谷Ⅰ遺跡例と同じく底部は碗形を呈している。
＊27前掲註23参照。
＊28ＳＸ03出土第80図43・44、文献註１参照。
＊29Ｂ２区墓3出土例。前掲註３参照。
＊30松山智弘前掲註12参照。
＊31角田徳幸他『大角山遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会1988年。
＊32発掘調査以前に出土した土器の中にみえる。（門脇俊彦他『波来浜遺跡発掘調査報告書ー第１・２次緊急調査概報』江津市1973年）。
＊33個人蔵「財印」が縦2.8cm、横3.1cmを測る（資料番号76『日本古代印集成』国立歴史民俗博物館1997年）。
＊34永嶋正春「非破壊手法による銅印の科学的研究」（『国立歴史民俗博物館研究報告79日本古代印の基礎的研究』1999年）。
＊35『日本古代印集成』（国立歴史民俗博物館1997年）資料番号112。
＊36『日本古代印集成』（国立歴史民俗博物館1997年）資料番号91。
＊37永嶋正春前掲註35文献。

長廻遺跡（Vol.1）写真図版

図版1

調査前風景（北側尾根より）

調査前風景（北側尾根より）

調査前風景（南側谷奥より）

図版2

Ⅱ区完掘状況

Ⅱ区完掘状況（西より）

Ⅱ区完掘状況（南より）

トレンチ調査風景

図版4

Ⅰ区大岩完掘状況（北より）

Ⅰ区大岩完掘状況（東より）